物に凝ると氣違の樣に成る性質ゆゑ夫くらゐの事は仕兼ませ邊に隱れて居て夫人が婆武に何を問ふか、又婆武が何と返事をか』

妙陀は婆武に逢ふが厭さに逃ぐるが如く典獄の家を立出たる者ば決し兼て返事もせぬに、幸助は猶ほ說勸め『イヤ夫人の隱れて居ます、夫に若し婆武が吾々の隱れて居る事を疑ふ樣な樣子でも有れば、直に刺殺し今夜の中に出奔します、其用意は是れ御覽成さい』と云ひ、兼々懷中に取出して拔示すに、暗にも燦めく劍先はゾッと肌に粟を生ず、妙陀は小聲にて唯一言と云ふに幸助は此意を悟り、直に妙陀の手を引きて物影へ隱れしが、其暇の有るや無し、早や彼の婆武は第二塔の見廻りを終へ典獄と共に出來りて、足早に典獄の家に入しは早く美人の顏を見ん心ならんか。

是より纏に又七八分を經たる頃、婆武は美人の既に逃去りしに怒りし者か、荒々しく典獄の家より出來り、背後より詫ながら從ひ來る典獄を叱り退け、其身唯一人り馬車の方へヅカ〳〵と歩み行くにぞ、妙陀も幸助も息を殺して窺ひ居るに果せるかな、彼れが早や馬車の五六間と云ふ所に至りし頃、傍より突と現はれ彼れの前に立塞がる人影あり、暗に透して定かには分らねども、髮までも振亂せし女の姿は大膽なる織部夫人に相違なし、婆武は意外の事に二足ほど退きながら『誰だ、誰だ』と叱り問ふ『誰でも有ません、先日來幾度も貴方の家を問ひ、其度に面會を斷られた織部夫人です、サア斯う顏を合せた上は私の問に返事せぬ事は出來ますまい』婆武は驚く聲を嗚りの調子に變へて『ホ、、夫人國王路易の宰相とも云はれる者が、此樣な所で話など出來ませうか』夫人は猶ほ聲荒く。

『何故此樣な所で話が出來ぬとお言成さる、貴方は十年前に國王路易の丁稚同樣に勤めた事を忘れましたか、貴方は麵燒の息子でせう、貴方の祖父の梨的理永は燒麵を擔いで賣り、其金で家計を立てゝ居たのでせう、麵燒の息子が少しの事で朝廷の書記に取立られ、其子の貴方は路易のお伴で、左樣サ路易が夜々私の別莊へ忍び來るとき、貴方は二時間も三時間も冷い玄關へ

立されて居た事を忘れましたか、私が餘り可哀相と思ひ少しの祝儀を包んで遣れば、ナニ此樣な事は有がちだから少しも辛いとは思はぬと云ひ、邊を見廻し推戴ひてソツと衣嚢へ入れた事を忘れましたか、アノ吹拂ひの玄關へ素跣足で冬の夜に立つ事を思へば、今茲で立話をする位は餘り辛くも有ますまい、今でこそ寥武、侯爵と云はれても十年前は從者密査兒では有ませんか』と留度も無く罵り立てられ、最早や拒むだけ我恥を晒すの木と思ひしか、彼れ最と不興氣なる言葉にて『夫人貴方の用事は何事です』『夫』『問はずとも分ツて居ませう、鳥居立夫を救ひ出し私の手許へ返して下さい』と命ずろ如くに言出せり。

四十四

鳥居立夫を救ひ出せトの織部夫人の鋭き言葉を、寥武は聞流して『ヱ、夫は誰の事です』夫人は益々怒り狂ひて『誰の事とて夫を貴方が知りませんか、假忘けるにも程が有ります、貴方が彼れを欺いたでは有ませんか、ハイ貴方の手先が貴方の言附に從ツて彼れをアノ樣な目に逢

はせました、全體云へば貴方から褒美を遣るが當然ですのに夫を牢の中へ投込んで—『寥』ヱ、貴女は何と仰有ります』『幾』『私が知らぬと思つて居ますか、朝廷から跳退けられた此織部に國家の秘密は分るまいと思ふかは知りませんが、織部は朝廷に居る人より猶ほ能く秘密を知つて居ます、ハイ何も彼も知つて居ます、貴方が彼れを牢の中へ入れたのみか、昔から聞いた事も無い恐ろしい鐵の假面を被せ、誰にも其顏を見せぬ樣に仕て有る事まで、私は皆な知つて居ます、サア貴方は那の鐵假面を放免して呉れますか呉れませぬか』と詰寄するに、寥武は鐵假面の一語を聞き胴震ひのする程に打驚くは、如何にして斯る大秘密の洩れしにやと疑ふが爲なる可し。

去れど夫人の劍幕は最早や言紛らすにも紛らされぬ程なれば、彼れ止むを得ずと思ひてか、『夫人、些と言葉を謹み成さい、彼の囚人は國王の大敵です、貴女が彼の一類と交り、樣々の振舞に及んだ事も私ば知つて居ますが、唯だ貴女の身分を思ひ誰にも云はずに居るのです、皇族の端に繫がる身を以て國賊と謀事を通じ國王を恨むなど云ふ事が、貴女の御自分の口から洩

れては取返しが附きますまい、國王の耳にでも入れば其儘には濟みませんぞ』と嚴かに誡むるは、彼れも流石に宰相の値打ありと云ふ可し。

織部夫人は少しも怯まず『濟まうが濟むまいが其樣な事は構ひません、ハイ私は國賊です、以前は國王の未婚の妻、今は國王の仇敵です、サア貴方は國王に召使はれる宰相の役目として、私の樣な明白な國賊を此儘許して置く譯に行きますまい、許して置くは怠たりです、早く部下の兵士を呼んで來て私を捕へさせ、彼れと一緒にバスチルへ入て下さい、爾すれば彼れに逢はれますから、サア〳〵夫が却て私の望みです』寒武は斜に彼の第二塔の方に振向き『イヤ那の塔に捕はれて居る彼の男は、那の塔で生涯を送るのです、貴女のみかは何人にも顏を見せずに此世を終ります』ア、是れ何等の邪慳なる言葉なるぞ、兼ねてより鐵假面が生涯許されぬ苦なりとは聞きたるも、世を終るまで其顏を出さしめず死ぬるより猶辛き刑罰を加へ置き、聲さへも震はせずに其事を言切るとは彼實に鬼の心を備ふるなるか。

織部夫人は半ば泣叫ぶ調子にて『夫は實に餘りです、非道過ます、彼が何の罪を犯しました、昔から例も無い其ほどの罰を受る樣な惡い事を何時仕ました、彼は此儘放免しても少しも世の害に成りません』寒『イヤ夫人、其樣に私を恨むのは間違ひです、彼も外の同類と同樣に殺して仕舞ふ可き所を、未だ殺さずに命だけ與へて有るのは私の恩と云ふ者です、貴女は禮を云ふこそ然る可きです』織『ナニ其樣な事が恩でせう、同類と同じく殺すとて彼には一人の同類も有ません、成る程彼は決死隊の中へ這入りましたが、夫は唯だ一月か二月ばかりの事、其前には決死隊の名も聞いた事が無い程です、夫が貴方の爲め國王の爲めに使はれ、彼の憎らしい櫛尾明の辯巧に載せられて決死隊へ入込んだのです、ハイ國事探偵も同樣に入込だのです、夫が何故に鐵假面を被せられる程の罪に成ります』此問を聞き寒武は初めて何か意外なる事でも聞きし如く打驚き『オヤ何と』言掛けしが更に嘲笑ふ如き聲と爲り『ホ、、貴方が救ひ度ひと仰有るのは、シテ見ると貴女に使はれ朝廷に出入して居た、アノ生白い鳥居立夫とか云ふ男の事ですか』夫『爾ですとも彼れで無ければ何で私が此樣に救ひ度いと云ひませう』寒『ハ、ア爾ですか、夫では夫人、最う其御心配は無用です、彼れならば疾つくに死んで仕ました』織『エ、

ヱ、何と仰有る、鳥居立夫が死ましたか、ヱ那の立夫が殺されましたか、嘘です、嘘です、貴方は私を欺すのです、死んだのは最う一人の男です』幸『イヤ夫人、是から上の事は職務の秘密、最う一言もお返事は出來ません、問答は無益ですからドレ御免を蒙ります』と云ひ、早や馬車の方を指し立去らんとする景色見ゆ。

夫人は何とも言ひ様の無き程に絶望し、最と悲げに打叫びつ『では此上に唯一つの私の願ひを叶へて下さい、無理な事は云ひません唯一つです、何うか私に鐵假面の姿勢だけ見せて下さい、顔は見ずとも姿を見れば夫で最う滿足します』寞『イヤ國王の嚴命です、誰にも彼れの姿を見せる事は出來ません、彼れを見るのは唯私ばかりです』綺『でも有ませうが爾云はずに、コレ若し貴方、其代り決死隊の企みに付いても何も彼も私が知て居ますから、其秘密を殘らず貴方に知せませう、何うか唯一分間、私を牢の中へ連て行き、隙間から彼れの姿を見せて下さい』寞『ナニ決死隊の秘密は貴女から聞くに及びません、秘密は殘らず手箱の中に收めて居ますから誰に聞かずとも分ります、貴女は唯だ自分の名前が連名帳の中に無い様にお祈りなさい』と

欠

して床の下へ葬ツて呉れるけれど』と最と本意無げに呟きながらも引かるゝ儘に從ひ行きたり。

抑梅眞女の家と云へるは、ローヤール街の角に在る可なり立派なる屋敷にして、表に一通りの馬車道を設け、樣々の事を聞きに來る貴婦人達を玆より出入りさせ、猶ほ世間憚る人々の爲め裏手に秘密の口を設けたり、此所より入る時は樹木鬱蒼たる廣き庭の隅に出で、小路を傳ひて直に梅眞女の居室の窓下に出る作りにして、妫陀幸助等は玆より出入る許しを得し者なれば、先づ此の小路に據り窓下に出で、兼て定めある合圖に從ひ輕く戸を叩くに、直ちに内より返事する者あり。

間も無く迎へ入れられて席に就きしが、妫陀と幸助が未だ言を發せぬ間に梅眞女は口を開き、『今し方、織部夫人が來て、宴武に痛く跳附られたと云ひ、大層立腹して居るのを漸く慰めてお歸し申しました』と云ふ、幸『ハイ實は私共も夫人と宴武との問答を物影で聞きましたが、アレ丈では少しも判斷が附きません、貴女は何と思ひます』梅『イヤ實地に聞かぬ私に判斷せよとは無理ですが、何方かと云へば何うも帶里谷事鳥居立夫は死で仕舞ひ、守雄殿がアノ通り鐵

欠

假面を被されて居る方が確かでは無いかと思はれます』妙陀は初めて聲を發し『私も爾思ひます』と云ふ。

梅眞は暫し二人の顏色を眺めし末『シタが貴方がたは今夜何の御用事で』と問出せしかば、幸助は直ちに彼の饗武の馬車が妙陀の家の前に來り居し事を語るに、妙陀は其尾に附き、今夜典獄の小宴にて饗武に逢ひし事より、判事夫人が今に饗武が私に妙陀の家へ遊びに來るならんと云ひし事まで物語るに、幸助も梅眞女も一樣に驚きしが、良ありて梅眞女は一種の思案を浮べし如く『幸助さんは何と思ひますか、私の考へでは少しも驚く事は無く、矢張り妙陀さんは田舍から出た平井未亡夫人と云ふ積りで、饗武に交際するが好からうと思ひますが』幸『勿論です、第一爾せれば饗武に疑はれます、疑はれるが最後直に本性を見破られ、捕縛せられるか殺されるか孰れにしても酷い目に逢ひますから、隨分危ひ仕事だけれど、我々は何所までも化の皮を着た儘で恐れず驚かずに居ねば成ますまい』妙陀は殆と泣聲にて『私に其樣な事が出來ませうか、私は一層最ふ饗武に本性を見破られ、所夫と共に鐵の假面を被されて世を送るが本望です』と涙の目にて二人を見ながら恨めしげに言ひ切りたり。

四十六

妙陀が恨めしげに言切るを、梅眞女は慰めて『貴女が爾思ふも無理は無いが、今までの艱難は何の爲です、唯だ鐵假面の本性を突留めて救ひ出し度いばかりでせう、今貴女が饗武に見破られて捕はれる樣に成つて御覽なさい、鐵假面と同じ所へ入れらる氣遣ひは無く、貴女は貴女で別々に又苦しい目に逢はされます、夫が爲め鐵假面の苦痛が輕むと云ふ譯でも無ければ、我々の仕事が樂に成ると云ふでも無く、是ほど詰らぬ事は有ません、夫とも鐵假面が愈々守雄殿で無いと分れば又格別、今では守雄殿の方が强さうに思はれる程ですのに、貴女が早や絕望して自分も捕れる樣な事をしては實に仕方が有ますまい、今の所で鐵假面の秘密を知るは唯だ饗武一人と云ふもの、我々は何とかして彼れに懇意を結び、彼れから秘密を聞出したいと思ツて居るのに、其矢先へ彼れから貴女へ目を附けたは何よりの仕合せ、貴女は小々辛くとも彼れの

遊びに來る度に、貴夫人を迎える心持で彼を迎へ、氣永く彼れに取入ねば成りません』。

妙陀は獨言の如く溜息吐き『ア、貴女の樣な心が欲しい、私は顏色替へずに彼れの前へ出る事は出來ません』と云ひ首を垂る　梅『でも彼れを仇敵と思へば何の樣な事でも出來ませう、彼れを位から蹶落して辱めるのが守雄殿を初め一同の目的でせう、守雄殿の目的通りに行けば今頃は彼を殺して居るかも知れません』妙『ハイ貴女が彼を殺せと云ひ懷劍を授けて下さらば、私は今からでも彼の前へ行き名乘り掛けて刺殺します、假令ひ力が足らずして彼れに捕はれ、反對に殺されるとも其樣な事は厭ひませんが、現在所夫の仇敵と知り、笑顏で彼れと附合ふ事が何うして私に出來ませう』

梅『と云つて此儘彼れに逢はずば貴女は必ず疑はれ本性を見破られます、見破られても構はぬなどと云つて居る時で有ません、今見破られては大變ですから、兎に角も斯うなさい、今夜は彼を外しても四五日の內に暇を見て又彼れが立寄るは必然ですから、其時には其の判事夫人とやらを賴み、女の身で唯一人男に逢ふは能くないからとて、其夫人に立會ふてお貰ひ成さい、

立會人が有て面會するには少しも構ふ事は有ません、貴女は詰り判事夫人と饗武との面會を傍で見て居る積りで居て、彼れから話を仕掛られても成る可く言葉少に返事して居れば能いのです、是だけの事ならば出來ぬ事は有ますまい、全體云へば私が其の立會人に成り度いのですが、私の顏は饗武に見知られて居ますから不可ません、判事夫人なら本統の他人故却て安心だらうと思はれます』幸助も傍らより『イヤ爾なされば私も餘所ながら見張つて居ます、達て貴女の御迷惑な事でも有れば、直に私が然る可き用事を拵へ貴女を彼れの前から救ひ出すか、彼を追返すか仕て上ます』梅『夫に彼れは急がしい職務ですから決して永居は致しません、極々懇意に成れば兎も角、初めの中は唯だバスチルへ行つた序に立寄る丈です、今夜も最う彼は歸りました』幸『爾でせうとも、都合に寄りては私が是から歸つて、彼の居る居無いを見て來ても好いですが、何の途今申す通り判事夫人を立會はせて、彼れに逢ふと云ふ積に成つて下さらねば困ります』

右左よりの勸めに逢ひ、妙陀も今は辭み得ず『では致し方が有ません、出來るか出來ぬか爾

うして試ませう』と力なく答へたり、梅眞は『ナニ其氣にさへ成れば何も六かしい事は有ません、美人に對して男ほど弱い者は有ませんから』と宛も判事夫人の言たると同じ事を云ひ、更に四邊を顧みて聲を潜め『斯極れば言ますが、實は最う鐵假面が立夫か守雄かを氣遣つてばかり居る時で有るまいと思ひますから、兎に角救ひ出して見るが好からうと思ひます、妗陀さんも幸助さんも若し帶里谷なら救ひ出すは厭だと斯う仰有るでせうけれど、私の考へでは何時木性が分るかも知ませんから、夫を便々と待て居るうち若又鐵假面が何所かの牢屋へ移されると面倒です、此樣な囚人は時々方々の牢へ移し、何所に居るのか分らぬ樣にするが窶武の今までの癖ですから、今鐵假面が手近のバスチルに居るを幸ひ救ふが第一では有ませんか、旨く救ひ出して仕まへば其本性は獨り分りますから、其時、若し帶里谷で有つたならば貴方がたの不運ゆゑ、別に帶里谷に向つて復讐するとも夫等の工風は後にして、唯私は織部夫人に一力ならぬ世話を受た身の上故、假令ひ鐵假面が立夫でも救はねば成ません、何うです幸助さん貴方は爾思ひませんか』

幸『イヤ救ふ工風が有るならば、本性の分るまで待つに及びません直ぐ救ひ出すが第一です』妗陀も之には異存なきにや無言にて打聞くのみ　梅『工風と云つて別に六かしい事でも有ませんが、兎に角、先日來私と織部夫人とで種々の所から牢番に通傳を求め、鐵假面へ牢から逃出す丈の道具を送る道を開きました、第二塔の窓から下の掘へ屆く程の絹絲の繩梯も、巧みな職人が有つて手の中へ丸め込むほど細く出來ます、其樣な道具類さへ送つて遣れば後は自分で旨く遣るだらうと思ひます、第二塔の案内なども聞ましたが、上等の囚人を容れる所だけ却て逃易い所も有ると云ふ事です、夫に鐵假面も何うか逃出し度いと思つて居るのか、時々呻吟て居る樣子だと牢番は話ましたが』幸『ハテな呻吟くと云へば守雄樣ではない、守雄樣なら假令ひ火水の責苦に逢ても、決して苦痛の聲は發しません』と云ひ、幸助は訝しげに考へ初めぬ。

四十七

牢の中にて呻吟き居るとは勇士守雄に有るまじき振舞なれば、幸助は訝りて眉を顰むるに、

梅眞は夫と見て『イヤ牢番の話に由ると猶だ不思議な事が有るのです、鐵假面が時々織部夫人の名を呼んで、己が此樣な苦い思ひを仕て居るのに織部夫人が何故救つて呉れ無いか、ヱ、、最う見捨られたのか、など、叫んで居たと云ふ事です、併し是はナニ牢番の作り事だらうと思はれます、織部夫人から牢番へ約束した褒美の金は典獄の年金よりも澤山ですから、夫ゆゑ牢番が織部夫人を迫し立る爲め此樣な事を云ふのだらうと、私は唯だ聞流して居るのです』

幸助も初て合點の行きし如く『成るほど爾でせう、縱んば帶里谷にした所が眞逆に夫人の名前は呼ますまい、孰れにしても助け出せば分りますから其樣な心配は無益として、唯一つ伺ひ度いは全く其牢番の力で鐵假面を救ひ出す事が出來やうと思はれますか』『梅』多分は出來やうと思ひます、詰る所ろ牢番は唯だ道具を鐵假面へ渡す丈の事で、其後は鐵假面が自身で仕果せねば成ません、夫ですから鳥居立夫の樣な活智の無い男なら事に由ると、牢を破る程の勇氣が出ず、道具を貰ツて却て迷惑するかも知れませんが、守雄殿なら充分に『幸』ハイ夫は最う守雄樣なら外に同類が待て居ると思ひ何の樣な事をしても出て來ます、爾して出て來た所で第一に鐵

假面の傍へ行き、帶里谷か守雄樣かを見分る役には、私が當らせて戴きませう』

『梅』爾して若し立夫で有つたら、貴方は織部夫人へ渡さずに直に其場で殺して仕まふ積でせう、イヤ隱しても了ません、貴方の了見は爾に違ひ無い、成る程夫も尤もですが織部夫人の身に成つて考へれば何うでせう、折角鐵假面を救ひ出し夫が鳥居立夫で有るのに、自分の許へ來る前に貴方に殺されて仕舞つたと云へば斷念めが附きませうか、織部夫人は最う立夫の爲に今までの身分も忘れ、彼が牢から出て來れば直に引連て外國へ出奔すると云つて居ます、夫ほどに思ツて居るのを貴方に無慘〳〵殺させては、私が餘り織部夫人に對し不實の仕方に當りますから、茲は能く双方の爲を思ひ、約束を極て置かねば成ません、鐵假面が守雄殿なら無論貴方と妨陀さんが引取るし、立夫ならば貴方がたは彼れに對する怨みを忘れ、綺麗に織部夫人へ渡さねば成りません、一旦織部夫人へ渡し其後で更めて仇敵を打つとか決鬪を申込むとか、或は又織部夫人が外國へ連て逃れば其の行く先まで追て行き、恨みを晴す丈けの事をするは貴方がたの勝手ですが、夫を一度も織部夫人へ渡さぬと云ふ樣では此相談は纏まりません』

幸助は妫陀と違ひ、多分は鐵假面を帶里谷ならんと思へる上、今又牢の中にて呻吟くと聞き、益々帶里谷らしく思ふに由り、心の中は面白からず帶里谷が生て居らば主人守雄は死せし者ゆゑ、彼れを救ひ出すに於ては直ちに殺して守雄の仇敵を打たねば成らず、夫を織部夫人に引渡すこと不本意の限なれば、猶ほも言爭はん決心なれども、織部夫人に恩を受けたる梅眞女の心中を察し遣りては、此上爭ふ事も出來難く、良や暫く思案せし末、『妫陀樣、貴方の御了見は如何がです、鐵假面が帶里谷ならば何うします』『妫』『帶里谷ならばアノ樣な者に用は無い、何うとも其方と梅眞女の相談に任せて置く』

梅眞女は呑込みて『夫では斯う極めて置きませう、鐵假面が出て來るは幾日の夜か大抵前以て分りませうから、其夜は私と織部夫人と第二塔の背後へ行き隱れて居ますが、貴方がたも家で其便りを待て居る樣な氣の永い事は出來ますまい、だから同じ場所へお出成さい、ですが、織部夫人と顏を合せ彼れ是れ面倒な爭ひに成ても困りますから、貴方がたは塔の右手の堀の外でお見張り成さい、私共は左手に隱れて居ます、爾して鐵假面が出て來たと見れば私が第一に

其傍へ行き迎へます』幸『イヤ假令ひ帶里谷でも尋常に織部夫人へ引渡すと云ふ約束を立て置けば私が出迎へても好いでせう、此役は何うしても私が適當です、外へ出たとて鐵假面を被ツて居ませうから急に帶里谷か守雄樣かは分りません、私が傍へ行き唯だ一言守雄樣と聲を掛ければ直に何方か分りますから』

梅眞も尤もと思ひし如く『成る程爾です、夫では若し帶里谷で有つた時、其儘夫人へ引渡すと云ふ約束を結びますか』幸『ハイ結びます、誓ひます』梅『夫ほど迄に仰有れば宜しい貴方が第一に出迎へると云ふ事に極て置きませう』とて相談漸く一決し、愈々鐵假面を救ひ出すと云ふに定まりしが果して定めの如く行はるゝにや。

四十八

鐵假面救出しの相談纏まりてより、梅眞の智慧と織部夫人の金とにて何事も首尾能く運び、愈々其事に取掛る日とはなれり。

今日は九月の第四日曜日にして、大牢獄の囚人等が一同に構内なる説教室に集められて教文を聞く當日なり、大牢獄の規則は嚴重なれど日曜日だけは其室より引出され二時間ほど説教を聞かさるゝこと、昔よりの仕來りにて如何なる罪人も是だけは禁ぜらるゝ事なし、去れば彼の鐵假面も今まで日曜の度毎に第二塔より引出され大庭を歩みて説教堂に連行かれしが、唯だ彼は外の者と違ひ國家に大切の囚人なれば特別に設けたる四人の番人あり、此四人が二人づゝ代る〳〵に彼を連れ行く者にして、此日其の順番に當りしは露宇及び舞宇と云へる二人の獄吏なり。

此二人とても本名は有るならんが永年牢番を勤むるより何時しか本名を切縮め、露宇と云ふ舞宇と云ふ便利なる符諜にて呼ばるゝに至りし者なり、彼等二人は朝九時の鐘、共に第二塔の出口に來り、外の囚人が皆説教室へ送られたる後までも控え居て何事をか細語り『爲エ、何うだ鐵の假面を被されるとは實に不思議な囚人だと怪んで居た所ろ到頭分つた、ヤ、部夫人の情夫だよ』舞『爾サ情夫だから織部夫人がアノ通り氣を揉んで我々に品物を賴んだのサ　併し今日の役目は六かしいなア、牢から逃出す秘密の道具を鐵假面に渡して居るとき、若し典獄

に見附かれば大變だ』露『ナニ其樣な恐れは無い、鐵假面は唯一人説教室の二階の一室へ入られるのだから、二階の廊下で右と左から渡しさへすれば誰も知る筈が無い、彼れを二階まで送り又二階から連れて來るのは吾々唯だ二人だから』と話す折しも説教室の方よりして又四人の番人來り、露宇と舞宇との猶前に立ち宛も二人と同じく鐵假面を待つ如く身構へたり、

殊に此二人は露宇舞宇と同じく初より鐵假面に附けられたる番人にして今日は非番に當る者なり、非番の者が呼ばるゝとは、扨は我々の惡事既に典獄に疑はるゝ爲なるにやと二人は密に見合せしが、露宇は奸智に丈けし男と見え左あらぬ體にて非番の二人の傍に寄り『貴下、お前達は非番で無いか』と、遠廻しに問試日を間違ひては了ないよ、今日は已達二人の番だ、むるに非番の一人振向きて『ナニ此二三日前から鐵假面の囚人が又一人殖たからよ』露宇は驚き『何だ鐵假面が一人殖えた、夫では二人に成つたのか』非番『爾サ夫だから今日は已達も呼出されたのだ』露宇は殆ど不興の色を隱し繕ねて退きしが、此時典獄別毛は内より第二塔の戸を開き鐵假面を連れて出來れり。是が今までの鐵假面なるや、抑亦新しき鐵假面なるやと露宇舞宇

二人は徒に目を刮れど、服は孰れの囚人とも異る事なき水色の廣き着物にて、頭は鐵の袋にて包みたるに同じければ見分るに手段なし、去れど先づ之を受取りて見んものと其傍へ寄らんとするに、典獄は非番の二人を指招きて直ちに之れに渡したれば如何とも詮方なし、其中に典獄は次なる鐵假面を連來らんと云ふ如く戸をメめて奥に退き、非番の二人受取りし鐵假面を左右より引立て說教室の方に去れり。

二人は空しく其後を見送るに此鐵假面、身高く足並も確にして殊に何と無く敏捷げに見ゆれども、唯だ彼れ久し振に天日を見ながら顏を露出して晒す事の出來ざるを殘念に思ふ如く、幾度か頭を空に向けながら引かれ行きたり。

後に露宇は又舞宇に向ひ『困つたなア 何うしやう』舞『最う此仕事を止すより外に仕方が無い、險呑な想ひをして折角品物を渡した所で、人が違つて居れば何にも成らぬ、織部夫人は自分の情夫を待つて居るのに、情夫で無い者を救ひ出しては嬉しいと思ふまい、褒美の金もお流れに極つて居る』露『だけれど折角運の向いて來たのを取逃がすのは殘念だなア、此樣な時に儲

けて牢番の足を洗はねば生涯牢番を罷める事が出來ないゼ』舞『夫は爾だ、ヱ、間違つたら夫までとして遣つて見やうか、吾々の約束は唯だ鐵假面の囚人を救ふと云ふ丈けで、織部夫人の色男を救ふと云ふ約束ぢやア無い、何方でも鐵假面だから此品を渡せば好いのだ』露『爾サ唯だ二人の鐵假面だから、當るか當らぬかは半々だ當れば何も言分は無い、己の考へでは非番の者を呼出すには多分新しい鐵假面の爲だらうと思ふ、我々が今までの鐵假面を今日連れて行く事は前以て定まつて居るのだから、ナニも其順を替へ非番の者へ今までの鐵假面を渡すと云ふ筈は無い』舞『爾だ〳〵、我々のが矢張り今までの鐵假面だよ、夫に又念の爲めだ、兼て織部夫人に言附ツて居る通り二階の廊下へ行つた時に鐵假面の耳へ口寄せ、是は織部が送るのだと斯う細語いて見ば分る、夫人の情夫なら夫を聞いて少しも怪しみは仕無いだらう、若し合點の行かぬ樣に怪む樣子が見えれば、人違ひと斷念して品物を渡さずに止めるのサ』露『アア爾だ〳〵、爾う試して見れば大丈夫だ』と相談漸く纏まるへ所、別毛は又一人の鐵假面を引連れて現れたり。

今現はれし鐵假面も前に來し者と同じく、囚人一樣の服にして假面とても同じければ、孰れが孰れと固より見分く可き樣も無し、別毛典獄は露宇、舞宇の二人を呼び『サア今度は貴樣達の番だ』と云ふ、二人は聲に應じて進み鐵假面の手を取りて左右より引立つるに、此者、前の鐵假面よりは背も高く身體も丈夫なるに似たり。

彼れ若し充分の力を出して荒廻れば二人の手にも合ふまじと思はるれど、彼れは最う運の盡と斷念めし如く、二人の手に掛りて和かなること小兒の如し、唯だ引るゝが儘に從ひ行く、露宇と舞宇とは歩みながら典獄の樣子を尻目に見るに、彼れは毎もの如く戸の所に立ち鐵假面の背影を見送りて立去らん景色無し、去れど幾歩にして早や說教堂に入り二階の階段へと掛れば外に人目とても無く誰憚るに及ばぬ事と爲りたれば、上の廊下へ出ると均しく露宇は今しも相談せし如く、鐵假面の孰れなるを試さん爲め其耳の邊へ口を寄せ『織部が之を寄越しました』

と細語けり。

假面は耳までも包み有りとは云へ、時々婆武の調を受くる爲め、聲だけ聞ゆる程に穴を明け有るに依り、此の細語は充分彼れに聞えしと見ゆ、彼れ意外の事に驚きて足を留めたれど別に怪しみ惑ふ色は無し、同じく小聲にて『何だ織部、アノ夫人か』と云ひ更にまた『好し、何の品だ』と問ふ、露宇は高く打つ我が動悸を鎭めも敢ず是ですと云ひながら、窃に我が衣嚢より何やらん包みを取出して手渡すに、舞宇は露宇よりも較や臆病なる所あるか、少し身を退きて猶豫せしも又進みて『是も』と云ひ、絹糸の繩楷子を最と小さく卷きたる者を手渡したり、鐵假面今は少しも躊躇せず唯だ『有難い』と云ひしが儘、手早く己れの袖口より其二品を、内懐へ引込めしが其の手業の早くして巧なること、宛も斯る事には充分慣れりと云ふが如く、少しの不都合をも現さず見る内に隱し終り、元の如く兩手を出し其儘再び引かれ行かんとす。

此有樣にて察すれば彼れ或は今日、此所にて斯る品物を受取るならんと心待居たるかと疑はるゝ計りなり、露宇は猶ほ織部夫人より賴まれたる言傳あれば、又も鐵假面の耳に口寄せ『貴

力が愈々逃出す時には、織部が堀の外で直に一緒に逃る樣に馬車まで用意して待て居る筈です』鐵假面は唯だ輕く合首きしのみ、此後は一語も發せず、露宇と舞宇とは我が役目の終りしを喜ぶ如く更に又廊下を奥深く進行きて、兼て鐵假面の入る席と定まりたる穴の如き所に彼れを推入れ、規則の通り彼れの背後に戸を鎖して退きたり。

是より凡そ一時間半を經て說教の終る頃、二人は又其所に行きて待つに、程なく說教は終りと爲り、一同の囚人順々に退散を初めしが終りに來りし者終りに歸るが順なれば、孰れもの歸り盡すを待つ内に、最初の鐵假面は最初の番人に引かれて去り、愈々又自分等の番とはなれり。

邊りに人の無きを見澄して戸を開き鐵假面を引出すに、心の所爲か彼れ以前よりズッと氣の引立ちし如く、起つも歩むも甲斐〳〵し、頓て以前細語きたる所まで來たれば、鐵假面は忽ち又歩を留め、小聲にて二人に向ひ『流石に織部夫人だ能く此樣な危い事を仕て呉れた、己は說教を聞きながら充分に道具を撿め彼是れの時間を勘定したが、窓の鐵の棒を三本外し、外へ出られる樣にするには何うしても三宵掛る、爾すると今月三十日の夜から、翌十月一日の朝までの間に出るから織部夫人へ、此上の御恩には何うぞ自に立たぬ者物の用意をして、掘の外へ出て居て下さいと傳へて呉れ』言葉は確に武士の言葉、露宇は思はず首を垂れ『畏まりました』と返事せしが、是よりは雙方ともに無言にて又手を引きつ、梯子を下り第二塔の入口に引返せば、玆には又典獄が初めの如く出迎へて、斯る事の有りしとは露ほども疑はず、鐵假面を受取りて塔の奥へと退きたり。

後に露宇は最と滿足の體にて舞宇に向ひ『何うだ舞宇、己が運が向いて來たと云つたぢや無いか』舞『爾だ本統に旨く行つた、織部夫人の救ひ度いと云ふのはアノ鐵假面に違ひ無いから、此上は唯だ今の言葉を織部夫人へ傳へる丈だ』露『夫は晩に又夫人の使ひに逢てからの上にしやう』斯く云ひて二人は微笑ながら分れたり。

五十

千六百七十三年九月三十日の夜、是れ鐵假面が大牢獄の第二塔を破出んと約束せし當夜なり。

此夜は宵の中より降居たる雨も風と變り木の葉を鳴らして騒がしく、空は切々に飛ぶ横雲にて幕を張りし如く暗ければ、牢破りには屈竟の天氣ならんか、彼れ果して約束の如く此夜までに窓の鐵棒三本を外し得たりと見え、夜の一時とも覺しき頃、高さ二百三十尺と知られし天邊の窓よりして徐り〳〵とブラ下れり。

之を知り且驚くものは唯だ其下に寢棲を求むる一群の烏あるのみ、番人も知らず典獄も亦知らず、彼れの身體グル〳〵と空中にて廻り居るは、肉の重みにて繩の捻の戻る爲めならんか、去れど繩切れもせず、彼れ落もせず、彼れ廻り乍らに繩の一節々々を持替て、一段々々に降り來る、繩は絹絲を合せし者にて細引の綱よりも猶ほ細ければ、彼れが手に食入りて如何ほどか痛からんと思はるれど、彼れ若し其手を放しては二百尺の大地に落ち身は粉々となりて碎けん。彼定めし痛みに齒をや嚙メながら下れるならん、去れど彼れの顏は唯鐵の面に包まれて見るに由なし、帶里谷か有藻守雄か、彼れ何ぞ大膽にして又何ぞ辛抱强きや、彼れが腰に横はりて最上重げなるは長さ三尺の鐵の棒なり、彼は忘より外しなる鐵の棒を劍に代へ、眞通の時に番人

を擲り殺さん用意にと重きを厭はず其腰に着けしなるか、流石は武士の用意と云ふ可し、鐵棒を括れる腰の帶は彼れ手拭を引裂きて糾ひし繩にや、彼れは降り〳〵て凡そ半時ほどを經て漸く地上に降り着きたり。

苦みの容易ならざりし爲と見え彼れ殆ど氣拔けせし如く、大地に撞と腰を卸し太き息を二度三度ホッと吐き、兩の手を揉みながら『ア、痛かつた、宛で千切れる樣で有つた、若し番人に見附かれば再び此繩を攀登る積りで有つたが、迚も〳〵、ア、降るにさへ此通り骨が折れる、半分も四半分も登られる者で無い』と打呟き、更に鐵の頭を左右に振りて『ア、何うかして此の假面を外さねば、世間へ出たとて仕方が無いが、ヱ、慚酷な目に逢はしやアがる、イヤ是も何うかして外す工夫が有るだらう、夫よりも先づ、此檻への外へ出るが肝腎だぞ、塀は高し堀は深し、何でも典獄の官邸の背後へ廻り、其庭を潛つて大庭へ出る見當を附けたれど、夫までに番兵を驚かせると大變だぞ、彼奴等は鐵砲を持つて居て、一人が聲を立てると五十人の一組が直に現はれるから、ハテナ其用意にと鐵の棒を持つて來たが鐵砲に向つては何の役にも立ぬ

矢張り番兵を驚かさず、コツそりと忍び出る外は無い、爾云ふ中にも此邊へ番兵が遣つて來るテ、先日から氣を附けて見るに雨の降るときは、大抵物見箱の中へ隱れ容易には廻つて來ぬが、生憎今夜は雨が止んだ、今まで廻つて來ぬが不思議な程だ、ドレ考へて居ても仕方が無い、乘るか反るかだ行つて見やう』

獨り問ひ獨り答へて立上りつ、第二塔と內堀との間なる少しの空地を辿りながら、彼れ塔に就きて忍び足に典獄の官邸の方へ行かんとし、程なく塔の角に至り首だけ出して窺ふに、三人一隊の番兵が今しも物見箱より出で、此方へと歩み來る所なり、彼れ鐵の首を早くも縮め『仕力が無い、仕力が無い、內堀と外堀とを渡る一方だ、玆まで來れば何だツて構ふ者か』と云ひ彼れ元の邊に來り、縄梯子の端を持ち斜に二度三度振動かして渡を打すに、縄梯子の上の端に在る鐵の鉤は容易く外れてヒラリと下へ落來れり、是等は縫部夫人と梅眞女の汁意にて、巧なる職人に作らせし丈け最と具合能く出來て有り、物に掛りて下る時は人の重さにて容易には外れねど、人の重さが無くなれば唯だ振る丈にて外るゝなり、彼れ此鉤を取上て『好し』と呟き、

今度は是を內堀の岸へ掛け、堀の中へと降り掛くるに、塔より下りし事を思へば最と易き事なれば、纔の間にスル〳〵と降着きたり。

抑もバスチルの內堀と云へるは何百年來掃除せし事の無き大溷にして、坎も芥も皆之へ投落す事なれば其底次第に淺くなり、日照續きの時などは水涸れ盡す程なれど、上手下手共に外堀に通じ外堀より瀨音の川に續ける故、雨繁き時は大川と共に水嵩を增し、人の背丈の立たぬほど深くなる事も有り、此夜は夫ほど迄に至らぬも、可なりの水にて鐵假面の腰より上に屆く程なり、彼れ第一に縄梯子を外し、之を手に持し儘身を水の底に沈め、首だけ出して番兵の來るかと伺ふに、番兵は外の方へ廻りしにや、來る樣子も見えざれば彼れ安心せし如く、又立ちて堀を渡り、外堀內堀の堺なる石の塀に達したり。

此塀厚さ四尺程にして其上は平なる小路となり、時々番人等の往通ふ所なれば之を越ゆるが大難事なり、高さは底より十間に近くして縄梯子を投掛く可き所も無し、去ればとて梯子も無く、直立せる石の塀に攀登るは到底出來ざる所なれば、唯だ上手なる水門を潛る外はあらじ、

鐵假面は少しの間に夫と思案を定めし者か、塀の許を上手の方へ溯り行くに水は段々と深くなり、水門の許に至れば殆ど其乳の邊に達せり、去れど幸にして流れ最と弛ければ推流さるゝ恐れも無く、潜りて潜られぬ事は有らじ、身を屈めて水門の様子を探るに、互違ひに石を疊み其間より水の通ふ組立なれば、其中の石五六個を取退けずば此所を潜る可からず、彼れ暫くは飽倦たる様なりしも頓て決心せし如く、彼の鐵の棒を石の間に入れ、必死の力にて動かし初めぬ。

五十一

鐵假面は肩まで水の來るを厭はず、鐵の棒にて水門の石を取脱さんとし、力を込めて推返すに、初は動く景色も有らざりしかど、何百年前に築きたる儘にして石と石との間を繋ぐ粘劑も今は朽果て、唯だボロ〳〵と砂の如く頽るゝのみか、既に頽れて穴の開きたる所も有る故、斯る所に棒を入れて其穴を大きくし、我が指は擦破れて血の出る程に傷けども更に屈せず、凡そ

一時間餘りにして最も小き石唯一個だけ外し得たり。

此様子にては我身體の抜けらるゝ丈け石を外すには夜あけて後までも掛る勘定なれば、殆ど仕遂ぐる見込みなけれど、去ればとて玆より外に逃出る道絶えて無き故、外に轉ずる事も出來ず、孰れにしても捕はるゝは一つなれば、外の場所にて捕はれんより、水門の石を外しながらに捕はれん、若しも何かの拍子にて夜の明けぬうち、此穴を開き得ば夫だけが仕合せなりと、彼れは斯く思ひ定めしにや、脇目も振らず休みもせず、水と石とを合手にして戰へり、去れど一個の小き石も夫だけ水門を弱くせし者にして、二番目の較や大なる石は是よりも脱し易く、一時間と經ぬうちに拔取りて水の底に沈めたり。

是より第三の石に掛りし頃、忽ちパッと水面に明りの指したれば彼れ番兵の廻り來しを知り、己が身をダッと沈め、唯だ目より上だけを出して眺むるに、番兵は此様子に氣の附かぬ如く水門の上を歩み、破れたる第二塔の窓の向ひを通り下手の方へ歩み去れり、鐵假面は玆に至り殆ど生たる心地無き程ならんと思はれしも彼れ甚だ剛膽なり、間も無く又も水の上に肩を出し、

初めの通り其の仕事に掛りたり。

鐵假面が斯く苦み斯く働ける間に、堀の外には鐵假面の首尾を氣遣ひ忍び來りて待受くる人々あり、第二塔より左に當る小高き丘の影に馬車を忍ばせ、其窓より時々に首を出して暗にも鐵假面の姿を認めんと空しく眼を張開くは、別人ならぬ織部夫人にして是に合乘せるは梅眞女なり。

今一組は水門より猶ほ少し上に當る土堤の影に、二個の石かと思はるゝ如く丸くなり、三尺ほど離れて屈み居るは妙陀と幸助の兩人なり、夜も早や三時に及びて更に何の沙汰も無ければ、幸助は妙陀に向ひ『事に由ると駄目かも知れませんよ、伸々此のバスチルが三日四日で破られる者では無く、昔から十年も氣永く構へて徐ろ〳〵と牢を破り、未だ破り盡さぬうち露見した者も有り、又自分の壽命が無く成つて死んで仕舞つた者も有ます、今夜出る積でも爾は行かず、何かの故障に妨げられ明日の晩に延たかも知れません』妙陀は少しも驚かず『明日の晩に延たなら、明日の晩に又來やうが、夫にしても夜の明るまで待て居やう、梅眞女の言葉では多分水

門から潜り出るだらうと云つたから、事に由ると今時分水門を毀して居るのかも知れません』

幸『私も爾は思ひますが今し方、アノ水門の上を番兵が角燈を點けて通りましたのに、下に怪しい者が居やうとは思はれません』妙『では先ほど第二塔の邊で烏の騒いだとき、其方は今鐵假面が忍び降りる所だらうと云つたぢや無いか、私は必と最う塔の外へ出て居るだらうと思ふ』

幸『成る程、夫も爾です、兎に角貴方の仰有る通り夜の明るまで待ませう』斯く細語きて再び元の無言となりしが、抑も此兩人は先の夜梅眞女の家にて打合せし如く、織部夫人よりも先に鐵假面の守雄なるや帶里谷なるやを見定めん爲め、夫人には知らずに此所に潜めるなり。

夫のみならず、幸助の工風にて鐵の假面をも取脱さん爲め、種々の合鍵より小刀、鐵嘴の類などをも用意せる事なれど、肝腎の鐵假面が現れぬは悶がしき限りなる可し、斯て三時半より四時を過ぎ一天漸く曉んとする頃に及びて、水門の方なる水の上に忽ち黑き一點の塊現れたり、定かには見る由無けれど、先程より闇の中に目張り居て暗きに慣れたる幸助の眼は、早くも之と認めたれば、從れ覚ながら狂氣の如く『妙陀樣、御覽成さい、貴方のお目には見えませ

んか』妙陀は首を突出して『ア、見える〳〵、幸助アレが鐵假面だ早やく合圖を〳〵』と是も殆ど狂氣の如く小聲にて促すに、幸助は傍に置きたる暗燈の一方の窓を二度三度開閉して彼方へ光を指さしむるに、水の上の黑點も此光を合圖と見てか、徐々此方へ渡り來らんとす、一歩〳〵近くなるに從ひて、能く見れば殆ど疑ふまでも無く、彼のペロームの鎭臺にて偷み見し鐵假面の其人なり。彼れ肩より上を水面に現はして、徐り〳〵と歩み來る、妙陀と幸助は瞬瞬もせず眸を凝らすに、早や鐵假面は堀の中ほどまで來りしが、此時堀は忽ち深くなりしと見え、彼れの首は宛も石轉の如く、ブク〳〵と水に沈み後には波の紋さへ留めず、彼れ今迄の疲れと、鐵假面の重さとに堪へ兼て浮上る事能はぬにや、彼れの姿認むるに由も無し』幸『オヤ』妙『オヤ』幸『ア、大變だ、全く沈んで仕舞ひましたよ』

五十二

鐵假面が忽然と水底に沈みしは固より其故ある事なり、此堀の中程に一條の埋樋あり、其深

さ一丈五尺にして幅は三間計なるが、日照の時にも此樋だけは大川より通ずる水の流れ居る事なれば、況してや堀一杯の水となれる此頃の樣子にては深さ二丈の上に及べる故、彼れ知らずして此樋に踏込み落入りしなり。

去るにても彼れが容易に浮上らぬは彼れ泳ぎを知らぬにや、夫れとも長く水門の許に身を浸し居たるが爲め、身體中凍果て泳ぐ事の出來ざるならんか、時は九月の末にて晝間は猶ほ幾分の殘暑も有れど、夜は夜風の身に浸初る頃なれば凍ずとも云ひ難し、幸助よりも妙陀は猶更ら驚きて『アレ溺れたよ、溺れたに違ひ無い、其方は早く救ひ上げて』と聲を立つるの危さも打忘れて叫び立つるは、早や鐵假面を所夫守雄と思ひ定めての事ならん、縱しや守雄に非ずとも此儘に捨置きては、彼れ大川まで推流され其死骸さへ擧らずして、鐵假面の秘密終に知る由無くして終らんも計られず、實に救はねば成らぬ場合、とは云へ夜も追々に明初る頃なれば、水中に飛入りて彼れと共に揉搔きては番兵に悟らるゝは必然なり。

番兵の鐵砲唯一發にて何も彼も水の泡のみ、如何にして好からんかと幸助が取つ置いつ思案

する間に、鐵の頭は又水の上に現れたり、現はれたるも唯だ一時にして彼れは溺るゝ人の如く、水を叩きて又沈み其後は影も形も無し、水茫々風蕭々の堀の表、千古の大秘密を隱し終らんとするか、幸助も今は猶豫の時に非ずと密に土堤の傾斜を這ひ下り、今しも鐵の首の現れたる其少し下手を指して泳ぎ行き魚を漁る鵜の如く水に潜りて、大樋の中を隈なく探せしも一度は探し當ずして息盡きたれば、浮び上りて充分の呼吸を替へ再び潜りて探り探るに、又もや息の盡きんとする頃、却て彼れより探り當られ固く我が足を捕へられたり。

扨こそ鐵假面、彼れ溺るゝ苦し紛れに我足に攀みしなるか、搦まれしまゝ浮上りて早やく息せんと揉がけども重きこと千斤の石の如く、殊に足の自由を失ひては泳ぐにも泳がれず、振拂ひて彼れの首筋か胴の邊りを捕へ直さんと思へども、死物狂の彼れの力伸々我が力に及ぶ可くも非ず、解くに由なく拂ふに由なし、纔に一間ばかりは彼れを引きて上りたれど猶ほ水面には出來らず、再び彼れに引沈められん有樣にて、最早や我身も彼と共に溺るゝの外無ければ、眞に是れ必死なり、一方の足を踏延ばし彼れが身の所嫌はず蹴て〳〵蹴捲るに、堅き靴の底は鐵

の假面の頭に觸れ戛々水中に音するかと疑はる、去れど其功漸くに現はれて捕はれし足を振放し得たれば、蘇生の想ひにて水上に浮び急がしくホット其息を繫ぎて三度び潜らんとする目先へ、宛も好し彼れの身體自づから浮出たり。

是こそは天の助けと直ちに其胴を捕へ辛くも彼の土堤の傾斜へと引上げたるが、見れば彼れ既に正氣を失ひ殆ど死骸も同樣なるにぞ、耳の邊と思はるゝ所に口を寄せ『守雄樣、守雄樣』と小聲に呼生けながら、搖ぶるに彼れ何の返事なし、妙陀も此有樣を見て『オヽ守雄さんで有つてかヱ』と云ひ、水際に下り來りしが、猶ほ守雄なるや帶里谷なるやは假面の上より見分難し、妙陀は梅眞女への約束も打忘れ『コレ幸助、此儘住居まで背負て歸り、爾して假面を解き介抱すれば助かるだらう、サヽ早く早く背負て』と半ば狂亂して迫立るも無理ならず 幸『イヤお待なさい、茲で假面だけ脫しませう』と云ひ、己が身を絞りもせず、堤の影に脫置きたる上被の衣襞より兼ねて用意の小道具を取出し、先づ假面の前後を檢むるに、背後の所に蝶番の如き金せ目あり、左の鬢際にて端と端と際間も無く食合ひてシツくりと重なり、其處に二個の高

き點ありて、點の眞中に鍵穴かと思はるゝ小き穴あるにぞ、之に鍵や鐵嘴を挿入れて有らん限りの秘術を盡すに、未だ假面の開かぬうち鐵假面は正氣に歸りし者と見え、異樣なる呻吟聲を發せり。

幸助は之にも構はず猶ほ鍵穴を突試むるに、妙陀は最早や氣が氣に非ず、所天守雄を搖る如くに肩の邊りに手を掛けて『貴方、貴方』と呼返すさへ忍び聲なり、其うちに凡そ十分餘も過しならんか、幸助は『メた』と一聲呟きしが、如何にしてか假面は前後に開きたり、曉方とは云へ猶ほ天色の薄暗く、顏を見るには不便なれば直樣、先の暗燈を取寄せて其戸を鐵假面の顏に向け、番兵の力へは火影の指さぬ樣、幸助自ら影に成り、震へる手先を强て鎭めつ、開きたる假面を徐むろに取外しパッと暗燈の戸を開くに、歷々と照し出すは知らず是れ唯の顏讀者請ふ推一推せよ。

五十三

守雄か帶里谷か照し出せし其顏は是れ大疑問の繫がる所なれば、妙陀も幸助も差寄つて是れを見るに二人の顏色は忽ちに變りたり、二人とも餘りの驚きに暫し言葉も出ずして茫然と眺め逢ふのみなりしが、漸くにして幸助は『オヽ、是は』と叫びたり。

妙陀は身も世も有られぬ如く震る手にて幸助の腕を引き『サア幸助、此樣な者の傍に何時まで居たとて仕方が無い、何も彼も我々の不運と斷念め、サア早く住居へ歸らうよ、サアお出サう、私は最う胸が惡い』と顏を傍向けて逃ぐるが如く立去らんとす『幸』では此儘捨てゝ置きませうか』と云ひ、幸助も妙陀に續きて立上りしが、彼れ思ふ仔細の有るにや『其でも是だけは拾ツて行かう』と又立歸りて脫がしたる彼の鐵假面を取上げつ、其の儘後をも見ずして妙陀と共に立ち去りたり。

此後に彼の鐵假面、否、今は早や鐵假面を脫ぎ取られし未詳の人は、次第〳〵に正氣に歸り、或は其手を上げ足を延すなど、堤の影に輾轉り居たるが、漸くにして起立れり、去れど彼れ我身が今現れの所に在るやを知り得ぬ如く、空く四邊を見廻すに、己が今しも逃出せし大牢獄の

第二塔は、明け初むる空に塞がりて目の前に在り、潜りたる水門とても殆ど鼻の下なれば、彼れ獨り呟きて『オヤ、何うして己は此様な所に、ハテな何所から來たのか』と自ら怪しみて考ふるうち、記憶は次第に復りしと見え。

『ア、爾だ、織部夫人に救はれて大牢獄を破ッて出たのだ、爾々堀を半分ほど渡ッたとき、急に深い所が有つて足を踏み込んだと思ふ間に、爾だ大分水を呑だ様だが其後は夢中だッた、アレから未だ何時間も經たぬで有らう、而見ると誰か救ひ上げて呉れたのか、イヤ〳〵救ふて呉れる程なら、夜の明け次第番兵に見認られる此様な危い所へ獨り寢かして置く筈は無い、揉搔きながら此岸へ這上ッて心が弛んだ爲め此所へ絶へ入たのだな、ア、爾に違ひ無い、オ、危い事、危い事、今一時間も茲に居れば、何の様な目に逢ふかも知れぬ所だつた、ドレ』と云ひて立上りしが、其機みに冷々しき朝風の顔に當れば、兩手にて前額より頬の當を撫廻せしが、忽ち心附きし如く『オヤ〳〵鐵假面が、是は不思議、何時の間にか無く成つたぞ、何だか頭が輕いと思つたら、之は實に、實に不思議だ』彼れ殆ど夢中に夢を見るに似たり。

只呆れに呆れ果てゝ、身の廻りを眺め廻すのみなりしが、鐵假面の影も無ければ益々以て合點行かず『何しろ厄介なアノ假面の無く成つたは何よりも有難いが、ハテな水に外れる筈は無し誰か取脱して呉れたか知らん、自分でも何うして脱さうと是ばかりに少し困つて居たのだが、實に變だ、此様な不思議は無い、併し斯う怪んで何時までも茲には居られぬ、仔細は後で分る時が有るだらう、兎に角も差當の隠れ場を定めねば』と云ひ、彼れ徐ろ〳〵と土堤を越え又も此方彼方を見廻す折しも、孰れよりか馬の嘶聲聞えしかば彼れ忽ち聞耳立て『ハテな、織部夫人の馬車か知らん、夫人が馬車で迎ひに來て呉れる筈で有た、爾々着物だけ用意して來る様に と牢番へ頼んで置いた』斯く云ひて彼れは馬の聲の聞えし方を見るに、最早や天も明るく朧ながらに小高き丘も見えるにぞ『ア、那の陰だ』と云ひ、俄に心の引立し如く足踏占めて進み行きしが、今嘶きし馬の聲は全く彼れの推量に違はず織部夫人の馬車の馬なり。

夫人は宵の程より殆ど七時間の餘も待ちて、今は待遠しさに堪へざれば梅眞女と共に馬車を降り、丘の影を其方此方と歩みながら、私に堀の方へのみ目を注ぐに、茫然として黑き人影十

堤を越して立現らはれ此方を指して來る樣子なれば、殆ど飛立つ思ひにて『梅眞や、見てお呉れ、アレだよ、アレが必と立夫だよ』梅眞も透し眺めて『ア、何だか大牢獄の囚人の服の樣です』とは云へ定かには分らねば猶ほ大事を取り、唯だ緩ろ〳〵と彼れの方に進み出るに、彼れも間近くなるに連れ、織部夫人の姿を見認めてか、嬉しさに堪へざる如く、我知らず聲を立て、『ア、有難い、織部夫人ですか』と云ふ、夫人は猶ほ躊躇ひしも、彼れが再び言葉を發し『貴女樣のお影で漸くバスチルを抜け出して參りました』と云ふを聞きては最早や何をか猶豫せん、『オ、好う出て來て呉れた』と云ひ兩の手を廣げて進み寄るに、今度は男の方にて餘り持做しの厚きに驚く如く、一足躇留りて堪へしも、彼れ亦嬉しさに度を失ひ自ら堪へ兼たる如く、夫人の手の間に身を投込み、抱かれ乍らに膝を地に突き『ヱ、最體い無い此御恩は最う生涯忘れませぬ』と男泣に泣叫ぶ彼れが心の中や如何ならん。

五十四

男泣に泣叫ぶ、織部夫人は此時まで唯だ鳥居立夫とのみ思ひ詰めしも、初めて此男の立夫に有らぬを知れり、夫人は魂消る聲高く『ヱ、此人は此人は、コレ梅眞、此人は立夫で無い、アノ脈らしい荒武者だ』と、云ひ早や突退けて其身も三歩四歩引下れり、全く夫人の云ふ如く鳥居立夫と思ひたる彼の牢破りは、先に夫人の奴隷となり終りし彼の荒武者の相須根なり。

夫人は身を引ながら猶も怒りの聲荒く『コレ惡人、コレ横着者、手前はナ、手前はナ』相須根は何事なるや殆ど合點の行かぬ如く『ハイ私です、男爵相須根です、貴女に救ツて頂いた有難さに生涯其御恩を忘れぬと申すのです』織『生涯恩を忘れぬ、馬鹿め、嘘けめ、コレ何を云ふ』

相『ハイ貴女樣が、繩梯子を送ツて下さらねば何うして私出られませう、此御恩を忘れて濟みませうか』夫人は悔しさに身を忘れ、知らず〳〵に突々と又も彼れの前に進み寄り『手前の樣な嘘け者を救ふが爲め、アノ繩梯子を送つたと思ふのか、手前の爲に誰が夫ほど心配をする者か、能く物を考へて見よ、横着物』とて手づから彼れの顏を毆らんとする如く、細き拳を握り固めて彼れの目の前に振廻す、斯る端下なき振舞も今まで立夫に逢ふ事とのみ思ひ詰め、斯

る意外の人を見し其腹立に比べては無理も無き事ならんか。

相須根は猶ほ説明して『イヤ何のお腹立かは知りませんが、でも牢番は私の耳に口寄せ、織部夫人が之を寄越したと云ひましたが』夫人は泣叫ばぬばかりにて『ヱ、情無い、牢番が欺したのか、コレ梅眞アノ牢番等は褒美の金が欲しいばかりに、此織部を欺したのだ』梅眞女は最靜に、『イヤ欺す氣で欺したのでは有りますまい、必ず何かの間違ひでせう』夫人は此語を耳にも入れず『コレ惡人鳥居立夫は何所に居る、今何所に何して居る』相『私が何うして夫を知りませう』夫『何だ夫を知らぬ、此方から鳥居立夫へ當て丶遣つた其繩梯子を盗みながら、知らぬと云ふ筈が無い』相『イヤ全く存じません』夫『己れは立夫を殺したのだ、爾だ〳〵爾して繩梯子を盗み逃出したのだ、夫とも立夫が生て居れば、定めし今頃は逃る道具を盗まれて絶望して居るで有らう、サア言へ有體に白狀せよ、言はねば直に牢番へ引渡し、再びバスチルへ投込むぞ、コレ言はぬか、白狀せぬか』

一句は一句よりも厳しく、彼の方へ詰寄せるに、彼れ相須根は茲に至り漸く心も確となりしか、驚きて一層の眞面目と爲り『之は合點の行かぬお尋ねです、假令ひ再び大牢獄へ投込まれやうが、全く私は存じません』夫『エヽ、未だ人を欺す氣か』と飛掛らん劍幕なるを梅眞女は見兼ねてか、傍より之を制し『イヤ夫人、是には必ず仔細が有ます、相須根の惡いのでは有ますまい、爾御立腹なさらずに、能く聞けば又何の樣な事が分るかも知れません』夫『だつて梅眞、之が怒らずに居られやうか』梅『イヱ私にお任せ成さい、私が何も彼も問ひますから、と云つて茲では問ふて居られません、此通り夜も明ますれば今にも番兵が夫と悟り、若し茲へ追つ掛けて、吾々が相須根と一緒に居る事を見られては何も彼も夫までゝす、何より早く此處を立去りませう』夫『立去つて何處へ行く』梅『取敢ずお屋敷へ』夫『和女は先ア何を云ふ、此樣な惡人を連て屋敷へ歸られるか、問ふなら茲で問ふが好い、左も無くば私から番兵へ引渡す』とて夫人の怒りは仲々收まらん色も見えねば、梅眞も詮方なく『では先づ茲で問ひませう』と云ひ、相須根を馬車の陰へと引行くに、彼は段々と夢の覺め來るが如く、前後の樣子の分るに從ひ、愈々其眉を顰むるのみ。

頓て梅眞は彼れに向ひ『全體貴方は鐵假面を被されて居たのですか』相『何うして夫を疑ひます』梅『貴方の顏に鐵假面が有ませんから』相須根は水門を潜りし事より、何時の間にか鐵假面の紛失せし次第を言葉短く怪み語るに、梅眞は『ア、夫は、私共の友人が貴方を壕から救ひ上げ、鐵假面を脫取たのです、爾して人違ひと思つたから其儘捨て立去つたのでせう』と云ひ、更に又問を發し『貴方は何時、何所で捕はれました』相『ハイ那のベロームで捕はれました、夫人がブルツセルの近邊で馬車の損所を直して居る間に、御存の通り私は貴女と夫人の差圖に從ひ、一足先へベロームを指し引返しましたが、魔が淵の近邊を檢めて見ると、何だか伏兵でも仕て決死隊を捕へたのかと疑はれる樣な所も有りますし、是は何でも鎭臺を探るが第一、事に由ると鎭臺へ幾人か生捕られて居るかも知れぬと、鎭臺のグルリを見ましたが忍び入る所も有ません。

其中に壕の一方の隅へ行くと、軍曹の樣な者が魚を釣ながら漁師體の男と頻に魔が淵の話を仕て居るのです、是は何より耳寄りと木影に隱れて聞て居れば、其漁師が怪い奴で何でも決死

隊の一人が生殘り漁師の姿に身を變し、私と同じく樣子を探つて居るのだと思ひました、頓て其漁師は軍曹に夫と悟られて見破られたかと思ひましたが、スルト彼奴矢庭に軍曹を壕の中へ蹴落して立去りました、私は愈々其漁師を決死隊の奴と見たが餘り手際が旨ひから愉快で堪らず、其男の立去つた後へ行きア、好い氣味だと呟きながら壕の面を見て居ますと、何うでせう投込まれた軍曹と云ふのが如鼈と水面へ浮いて出ました、エ何うでせう彼奴め未だ死切ては居無いのですよ』と言掛けて我話を梅眞が如何に聞くやと氣遣ふ如くに、彼れは梅眞の顏を眺めたり。

五十五

相須根の云ふ所は、兼て幸助より聞きたる軍曹投込みの話と符合せる故、少しも疑ふ可き所無し、殊に其の後の細き所は今聞くが初めてなれば梅眞女は感心して耳を澄すに、相須根は此樣子に力を得し如く言葉を嗣ぎ『其の浮上つて來た軍曹が、水の中で揉搔きながら頻りに助け

て呉れ、助けて呉れと私を見て呼ぶのです、此奴を生かせては面倒だと思つたから、好し助けて遣る是へ取附けと云ひながら私は岸崖の石を外し、其奴を目掛けて投込むと狙ひ違はず其奴の腦天を碎きました、今度こそ大丈夫二度と生返る氣遣ひは無く、堀の水が血の色に成りましたが、生憎にも鎭臺の物見の兵が其處へ來合せました、逃るにも逃られず、暫し爭つて居るうちに中から、大勢繰出して到頭私を捕へました。

夫から鎭臺の中に引込まれ、何でも鎭臺長と思はれる士官に嚴しく調を受ましたが私は一言も言ひません、言ひさへせねば終には放されるかと思つて居ると、堀からは頭の碎けた死骸が上るし、夫に夜に入つてから、彼の楢尾明めが鎭臺へ來たのです、彼奴に逢つては一言も有りません、彼奴大力は私の心を見拔いて仕舞ひ、手前は織部に心を寄せ夫人の許へ逃て行つて政府の秘密を明したゞらうの、今度も織部夫人の供をして決死隊を救ふ積りで魔ケ淵まで迎ひに來たゞらうのと云ひました、言譯するだけ無益ですから何うでも勝手に認めるが好いと言切りますと、彼れは決死隊の一人が生殘つて軍曹を投込んだ事は知らず、最初に堀へ突落したのも

矢張り私と思ふて居ますが私もナニ、今更決死隊の者が生て居て漁師に成つて突落したのだと云つた所が自分の罪が輕くなると云ふでも無し、爾だ〳〵と含首いて居りました。

夫から彼れは、昨夜此鎭臺の風窓を潛り此内へ忍び込み床板を外して物置へ入り、秘密を聞いた者が有るが是も其方では無いかと云ひますから、扨は彼の漁師が其樣な捷い事を仕たのかと思ひましたが、夫もナニ言開くに及ばぬ事ゆゑ矢張り自分で罪を被ると彼れ少し考へて、イヤ〳〵手前にアノ樣な事は出來ぬ、誰か決死隊の者が生殘つて居るだらうと又嚴しく問初めました、問はれても勿論名前を知りませんから其樣な事は無いと言張りましたが、彼れは愈々氣色を損じ其後と云ふ者は幾度と無く其事を問ひましたけれど、私の返答は毎も一つです、決死隊の者が生殘つて居るか居無いか其樣な事は知らぬと云ひ、滿足な返事を仕ませぬから彼終に腹を立て、夫では寳武に直々に調させると云ひ私をバスチルへ送つたのです。

梅『夫は何時の事です』相『今から二月ほど以前です』梅『夫までヘロームの鎭臺に居たのですか』相『ハイ鎭臺の牢屋に捕はれて居たのです』梅『鐵假面を被されて』相『イ、エ私が鐵假面を被

されたのはツイ此頃の事です』梅『夫は何う云ふ譯で』相『斯うです、バスチルへ送られると第二塔へ入られましたが、直に寒武から調られるだらうと思ひの外、寒武は外の囚人を調るに急がしいとか云ふ事で私は一度も調られません、尤も今夜は寒武が來るからとて典獄から達せられ待つて居た事は有ましたが、其度毎に寒武は私の室の前を通り過同じ第二塔に居る外の囚人の所へ行き、其囚人を調るのに夜を更かせて歸るのです』梅眞は心の中にて、其囚人が眞の鐵假面ならんと思へど其心を口には出さず猶ほ無言にて彼れの言葉を聞くに 相『爾すると此頃になり初めて寒武が遣つて來て私に決死隊に加はつたゞらうと云ひ、又決死隊の中で生殘つて居る者は無いかなどゝ楢尾の間と同じ事を問ましたが、私は矢張り楢尾に答へた丈けの事しか答へません、スルと彼れ大に立腹した者と見え翌朝典獄が鐵假面を以て來て私へ被せました、夫からと云ふ者は私の取扱ひがズツと嚴しく成りました、私は餘り忌々しくて成らぬから聲を立て呻吟いたり又寒武の來る度に彼を怒らせる爲め番人にまで聞えよがしに、已は織部夫人を初め皇族の端に繋がる人々に懇意が有るのに此樣な取扱ひを受るのは餘り非道いなどゝ叫びま

した』

扨は彼の牢番が鐵假面は時々織部夫人の名を呼びて呻吟き居ると云ひたるも、此相須根の事なりしかと、梅眞は漸くに合點行きたれば『成る程、爾すると全く牢番が貴方と最う一人の鐵假面とを間違ひたのです』相『或は爾かも知れませんが、私は自分で間違ひと知る筈が有りません、說教を聞に行く其道で番人が私の耳へ口を寄せ、織部から是を寄越したと云ひましたから、私は最う自分が救はれる事と思ひ喜んで出て來たのです』梅『分りました、シタが貴方は自分の外に猶だ一人鐵假面が居る事を知りませんか』相『イヤ知つて居ました、と云ふ者は私が假面を被せられる時、斷然と拒みましたら別毛は諭す樣に、假面を被せられるのはお前ばかりでは無い、此同じ室續きに半年餘も以前から假面を被され假面の儘で此牢へ入られた者が有るけれど、其者はお前と違ひ流石に國事犯も遣る丈けで溜息一つ吐無いと云ひました』

此時までも織部夫人は兩個の傍に立ちし儘無言にて控へ居たるも、此話を聞き飛立ちて『アヽ、其の溜息一つ吐ぬと云ふ感心な鐵假面が立夫だ、立夫だ』と打叫ぶ、梅眞は立夫に夫ほどの

勇氣膽力あるぞとは信ぜぬにや、此言葉を耳にも掛けず猶ほ相須根に打向ひて『寒武が[illegible]調べに行くのは其鐵假面の室では有りませんか』相『爾です其鐵假面を調るのです』梅『貴方は其姿を見た事は有りませんか』相『ハイ二度見ました』と云ひ、猶ほも其次第を說明さんとする折しも、大牢獄にては昨夜の牢破りの有りし事分りしと見え俄に早鐘を撞き初めぬ。

五十六

相須根が二度までも鐵假面の姿を見しとは、是れ何よりも大切の事柄なれば、其姿の如何樣なりしを聞かんと思へど、バスチルの早鐘は殆ど手に取る如くに聞え、且は周章惑ひて番兵の往復する影さへも見ゆるにぞ最早や一分も茲には居られず、追つ手の來ぬ間に早く逃去らん者と思へば、梅眞は遽しく夫人を馬車に乘せ、續いて相須根をも載んとするに、夫人は此場合にも之を許さず『コレ梅眞、其人を馬車に載て何とする、私は其樣な者を隱まツて置くのは嫌だよ』梅眞は云ひ爭ふ時に非ねば『ハイ貴方がお嫌なら私が隱まひます』と云ひつゝ、鳥渡立

夫に着せん爲め夫人が用意し來りたる其被物を馬車より取出し、幾等かの金子と共に之を相須根に手渡しつ『兎に角茲を落延びて今夜ローヤル街の私の家へお出成さい、當分安心の出來る樣に隱して置て上ますから』と云ふに、相須根は深く其恩に感ぜし如く幾度か措し戴けり。其間に梅眞は早くも夫人の馬車に合乘りし巴里の方を指し一散に走り去りしが、相須根も再びバスチルに入らるゝを好まぬか、囚人の着物の上に彼の與へられたる外被を纏ひ雲霞と逃去りたれば、頓て番兵が此所まで尋ね來し頃は影も形も留めざりし。

斯く鐵假面救ひ出しの計略は全く齟齬し思はぬ人を救ひ出せしかど、猶ほ一同は絕望せぬにや、此日も既に暮て夜の十一時と覺しき頃、ローヤル街なる梅眞女が家の奥の間に頭を寄せて密々と相談せり、所を誰々かと問ふに織部夫人は今朝の失敗に氣持を損じ、且つは夜一夜草原に立すくみて夜露に打たれし爲め、全く健康を害せしか、其儘屋敷に打臥せしとて茲には在らず、顏合せしは妙陀幸助梅眞の三人なり。

梅眞は壁に聞かるゝさへ厭ふ如く最と低き音聲にて『イエ私が一番心配するのは織部夫人の

振舞ひですよ、夫人は皇族の端に繋がる丈け、何の様な事を仕ても捕縛などせられる氣遣ひは無いと頼み、此頃では少しも秘密と云ふ事を知らぬ程です、先夜も御存の通りバスチルの大庭で宴武を引留めた様な事も有るし、其外牢番を取入れるにも殆んど誰憚らぬ程の勢ひです、先刻も分れる時に是から典獄別毛の所へ行き、表向きに談判して、本統の鐵假面に逢はせて貰ふなど仰有りましたが、ヤツと私が留めました、尤も國王路易とても昔の情婦を捕縛させては何の様な事を多舌られるかも知れませんから、宴武が何と上申しても夫人ばかりは捕縛させますまい、夫だから楢尾等が白寢臺を作る程ですけれど、今朝の事が夫人の仕業と疑はれる様な事でも有れば後の仕事が益々六かしく成つて來ます、若し宴武が本統の鐵假面を再び田舍の鎖臺へでも移して仕舞へば、夫を探す丈でも何れほど手が掛るか知れません』幸助は深く考へ乍ら聞居たるも漸くに首を上げ『爾すると鐵假面が外の牢へ移されぬうちに何とか工風を廻らさねば了ませんが、何うも好い工風の無いのに困りました』と言終りて太き息吐き再び其首を垂れたり。

娑陀も途方に呉れし顏にて『私も一日も早く何とかせねば最う長く此土地に居られませぬ』

梅『エ、此土地に居られぬとは、其筋の疑ひを恐れるのですか』娑『誰も疑ふ者は有ませんが唯アノ宴武が』と言ひ差して口籠る梅『宴武が何うしました、アレから又貴女の許へ尋ねてしたか』娑『ハイ多分大牢獄の歸り掛と見え二度まで立寄りましたけれど、私は病氣と云ふずに追ひ返しましたが、仕舞ひに來た時などは無禮にも見舞物を置て行ました、今度來た下女に言附け返させる積りで其儘手も附けずに有ますけれど、彼れは此次には朝廷の侍臣て來て遣るから主人に爾云へと下女へ傳へて行つた相です、私は何うして好いか實に思案ります』梅眞は少しも騒がず『イヤ貴女が爾云ふ御氣質だから困りますが、全體云へば是仕含せは無いのです、私の云た通り判事夫人に立會を賴み、初めは爾して彼れに逢ひ段々を結ぶに連れ徐ろ〳〵と彼れの秘密を聞出したら、又何の様な事が分り鐵假面を救ひ出すが出來るかも知ません、第一鐵假面が守雄殿か帶里谷かと云ふ位の事を聞出すには餘り困れまいと思ひます、貴女が夫をお厭だと云へば致し方が有りませんけれど、ナニ心配なさ

雙武が餘り推し強く貴女に附纏ふ樣になれば私が期つと彼れを追ひ拂つて上ますよ』妫『とは何うして追ひ拂ひます』

梅眞は隅の方なる棚に指さし『追ひ拂ふ工風は彼所に在ます』妫陀は其棚に目を注げど何事なるや合點行かず、唯だ幸助は察してか殆ど顏の色を失ひ『エ、毒藥で』梅『ハイ彼の樣な奴を殺す爲めに用ひねば今まで私しが危い思ひをして毒藥術を稽古した甲斐が有りません、決死隊の事が破れたなら毒藥を以て朝廷の憎い人々を殺すと云ふのは私の初からの目的です、織部夫人も能く知つて居ます、私は所夫安東が免職と成つたとき最う愈々毒藥を用ふる時だと思ひましたが、其頃は猶だ再び織部夫人が國王路易の寵愛を取返すかと云ふ見込も有り夫に免じて捲へましたが、今と爲ては夫人も立夫に心を移し路易の事は何とも思はず、夫人が再び朝廷へ入る見込は絶ましたから誰に遠慮も有ません、決死隊の人々が血を灑ぎ涙を注いで猶ほ遂げ得無かつた目的を私は笑を含んで遂て見せます、私がエキジリ初め其外の毒藥學者に教はつた法の中には、目に見えぬ毒藥も有り水に流れぬもの、火に燒けぬもの、人を殺して毒の跡へ殘らぬ

もの、樣々の種類が有ます、其中の最も激烈なのは手紙へ封じて送つて遣り、先の人が其手紙を開いて呼吸を引けば其呼吸で肺の臟へ入り血を腐らせて段々に殺します、又瞬瞬きする暇も無い樣に頓死させる事も出來ます、自分でも悪い事を覺えたと今では後悔しますけれど、悪を亡ぼし善人を助ける樣な正しい目的に用ひれば構ふ事は有ません、折角覺えた事ですから、機を見て用ひずには置ませぬ』と顏の筋一つ動かさずして斯る事を說明す抑も此女如何なる膽力ぞと思へば妫陀は今更恐ろしさに唇の色も無く、流石の幸助まで返事する言葉を知らず。

梅眞は少し言過ぎたりと見て自ら悔る如く早速に調子を變へて『ホヽ』と笑『イヤ、未だ實は之を用ふる時は來ません、鐵假面を救ひ出し貴方がたが最う此土地に用事の無い身と成る迄は私も唯だ鐵假面を救ふ丈が目的です』斯く云はれて幸助は男の身とて、恐を見せたる我心が恥しく『ナニ刀を以て國賊を殺す事を思へば毒藥とても同じ事です、遣る可き場合には充分にお遣なさい、ですが今夜は其事の相談では無く鐵假面救ひ出しの相談ですが、サア今度は何の樣な手段で救ひませうか』妫陀も漸く我に歸り『貴女が何時か最後の手段が有るとやらのお話で

したが、最う其最後の手段で救ひ出す時では有ますまいか』梅眞は最眞面目に『イヤ最後の手段ですから、何うしても一切の手段を仕盡した上で無ければ用ひられません』幸『でも夫で救ひ出す事が出來れば直に用ひ様では有ませんか、一方からは婆武が妨陀様を見染るし、今が最う最後だらうと思ひます、ドレ何の様な手段です、兎に角仕方だけ伺ひませう』梅眞は暫し考へ、『左様サ、私の胸でばかり獨り承知して居ても仕方が有ません、貴方がたに打明けて能く意見を聞かねばですが、お兩人とも本統に私の最後の手段を聞き度いと仰有るか』。

夫を疑ふ事やある、假令ひ如何なる手段にても一日も早く救ひ度き一心なれば幸助は『無論です』と答へ、妨陀は『ハイ何うか聞かせて頂きます』と答ふるに、梅眞は然らばと云ふ風にて『最後の手段は矢張アレです』と云ひ再び毒藥棚に指さしたれば、兩個は又も顔の色を變んとす、抑梅眞が毒藥棚に指さすは如何なる心なる可きや、是も暫く讀む人の推量に任せ置かん。

五十七

鐵假面を救ひ出す最後の手段と云ひて、梅眞女が又も毒藥の棚を指すは抑も如何なる心にや、幸助は怪みながら『ヘ、ヱ、毒藥を以て牢の番人を殺して置て夫から鐵假面を救ふのですか』梅『イヽヱ、大勢の牢番を殺し盡す事が出來ますものか』幸『夫では毒藥を何うするのです』梅『貴方がたは定めしお驚き成さるだらうが、イヤ到底貴方がたが同意せぬ事柄ですから私は最う云ひますまい』幸『云はぬ事には同意するかせぬか分りません兎も角も伺ひませう、ヱ毒藥を何うするのです』梅『通傳を求めて鐵假面へ送るのです』幸『ヱ、鐵假面へ、ハヽア鐵假面が夫を持つて邪魔に成る奴を殺し、爾して獨りで出て來るのですネ』梅『爾では有ません、鐵假面が自分で呑むのです、ハイ鐵假面へ呑ませる爲めに毒藥を送るのです』。

鐵假面に毒藥を呑ませるとは是れ何等の暴言なるぞ、梅眞若しや氣でも違ひしには有らぬかと幸助も怪みながら『毒藥を呑ませれば鐵假面は死ますが、貴方は殺すのを最後の手段と仰有るのですか』梅『先ア爾です驚きましたか』幸『御冗談を仰有つては了ません、本統の事を伺ひませう』梅『ナニ此場合に冗談を言ますものか、能く考へて御覽成さい、バスチルへ入られた囚人

を救ひ出すことは容易の事で有ません、夫も當前の場合ならば兎も角、既に一人の鐵假面を同類が救ひ出したと云矢先で充分に用心を仕て居ますもの、一通りの工風で行きますものか、夫とも外に手段が有れば何の樣にでも仕て御覽成さい、私も充分加勢しませう、けれども今では外に手段が有ません、毒藥の一方です、併し私も是は非常の仕方ですから今直にと勸めは仕ません、唯だ外の事を仕盡して最う何うしても了ぬから夫を行ふ外は無いと、貴方の力から進んで同意する時になり初めて之を用ひます、夫までは貴方にも云はぬ積で居たのです』幸『でも鐵假面を殺しては致し方が有ません』梅『勿論です、けれども鐵假面は生涯牢の中へ置かれるに極つて居ます、死る外は決して此世へ出される事が有ません』幸『夫だから今毒藥を送つて殺して遣ると仰有るか』

梅『爾です、此儘置けば是から十年經つか二十年經つか分りません、守雄殿にしても帶里谷にしても猶だ三十に足らぬ男今から三四十年は生て居ませう、三四十年の後牢の中で假面を着た儘死で仕舞ひ假面の儘で葬られるのが彼れの未來です、夫を貴方がたは待ますか、夫こそ三十

年も四十年も掛つて彼れを少しづゝ殺すと云ふもの、私は夫より一思ひに彼を殺し、其苦痛を短くして遣らうと思ふのです』幸『だつて夫は彼れの壽命を奪ふと云ふ者です、救ふのでは有ません』梅『でも殺せば彼れは牢から出されます、ハイ出されて牢の外へ葬られます、死骸に成らねば決して牢を出る事は出來ません』と最恐ろしき事柄を平氣にて述るを聞き幸助は只呆れに呆れ果て、返す可き言葉も出ず、娑陀は所夫守雄が此後猶ほ三十年も四十年も假面の儘牢に在り假面の儘死ぬるかと思へば、今更の如く悲くなり迫來る涙を留めも得ず、聲を呑込み忍び泣くのみ。

梅眞は憐れ氣に二人の姿を見『夫だから私は最後の手段は唯だ死骸にして救ひ出す許りだと云ふのです、死骸にすれば、此方から救ふ迄も無く典獄が棺に入れて牢の外へ送り出し共同墓地へ葬ります』幸助は殆ど腹立しげに『貴女と私共とは了見が違ひます、迚も迚も此上一緒に働く事は出來ません、貴女は唯だ鐵假面の苦痛を切縮めて遣り度いと云ふ丈の事、私共は生して置て救ひ度いと云ふのですから、全で反對です、尤も鐵假面が守雄樣でも帶里谷でも貴女の

爲には他人ですから、貴女には夫だけの親切しか出ますまい』

梅『他人とて唯の他人で有ませうか、守雄殿なら共に大事を打明た同士では有ませんか、事露見せば一緒に殺されねば成らぬと云ふ危い道を、手を引合て歩んで來た無二の親友では有ませんか、貴方がたが守雄殿を大事に思ふ丈け私も大事に思ひ貴方がたが救ひ度い丈私も救ひ度いのです、夫だから此樣な危い事を工風してまで救はうと云ふのです』幸『でも殺して仕舞へば夫までゞす、幾等苦痛を短くして遣度いとて殺して仕まうが何の親切で有ませう、眞實に無二の友なら何うして毒藥が呑まされませう、何うして殺して仕舞はれませう』梅『殺して仕舞ふと誰が言ます』幸『貴女が……』梅『アレ私は殺して仕舞ふとは云ません、殺して救ひ出すと云のです』

幸『何方にしても同じ事では有ませんか』梅『イヱ大變に違ひます、一旦は殺しても毒藥で殺した者は解毒劑で生返らす事が出來ます、彼れの死骸が牢から出され共同墓地へ葬られたなら、其夜私は墓場へ忍び墓を發いて其死骸を堀出し、反對の毒藥を以て彼れの命を呼返します』と初めて明す實の計みに、幸助は『アッ』と叫びて唖然し妬陀も泣聲を留めたり。

毒を以て人を殺し再び反對の毒を以て其人を蘇生らせるとは聞し事も無き計略なれば、幸助は舌を卷き『成る程夫は不思議です、其樣な事が出來ませうか』梅眞女は落着拂ひて『出來ぬ事は有ません、貴方は有名な毒藥學士ヱキジリが先年パスチルの中で死んだ事を御存ですか』と問返せり。ヱキジリとは毒藥の本元とも稱す可き伊國の大豪族にして毒藥研究の爲に巨萬の財産を投盡し終に毒藥王とまで云はれし人にて、先年佛蘭に流れ來りて王侯貴族に交りを結び、終に彼の有名なる普林微拉侯爵毒殺の事件（此事件の顚末も他日譯載する事ある可し）に關し大牢獄に入られて死去せし事、天下に隱れ無き大評判なれば、幸助勿論聞知り居れり。

幸『ハイ幾度も聞きました』梅『サア其のヱキジリが即ち此工風で大牢獄から出たのです』幸『アレは牢死では有ませんか』梅『ナニ牢死で有ませう、イヤサ死だけれど、墓場へ葬られた後で其弟子中の一人が堀出して、豫てヱキジリから預ツて居る反對の毒藥を以て前の毒を解し見事に

生蘇らせました、其證據には今猶ヱキジリが生て居ます、伊國の貴族フローレス侯爵と云ふのが即ち其ヱキジリです』幸『成る程、彼はフローレス侯爵だと云ふ噂は聞きましたが』梅『噂だけでは有ません私は證據を以て居ります、コレ御覽成さい』と云ひ一通の手紙を差出だせり、幸助は何事かと怪みつゝ振る手先を差延べて受取見るに文言には『御身の實意に據り墓の中より堀出だされ再び生て此國に歸りし事、御禮の申樣無し云々』と記しフローレス侯ヱキジリの名を記せり、幸助は愈々驚きヱ、ヱ、其の反對の毒を以て此人を生返らせた弟子と云ふのは貴女ですか。

梅『ハイ、實は斯うなんです、彼が牢に居るとき三年の間、普林微拉侯爵夫人の情夫克魯育と同室し牢の中で氣永く毒藥の奥儀を其の克魯育に敎へたのです、爾して克魯育が牢を出るとき、ヱキジリは彼と打合はせ何月幾日に己が毒を呑み死人に成つて牢を出るから、君が墓場へ來て己れの鼻から此藥を吹入て呉れと云ひ克魯育に解毒劑を渡したのです。克魯育は萬々承知し牢から出たが、後で能く考へて見ると師匠を生返らせるは馬鹿馬鹿しい師匠が死んで仕舞ふ日

には自分が毒藥王に成られると思ひ、薄情にも彼れ其心を翻しました、流石ヱキジリは牢の中で夫と氣が附き、是は克魯育の樣な者を賴めぬ彼れ却て己の死ぬのを喜ぶだらうト、斯思つゝ者ですから更に牢番に賄賂して私しへ手紙と解毒劑とを寄越しました、私は其手紙に從ひ打合はせの時刻に墓場へ行き忍んで居ますと其所へバスチルから囚人の死骸を持つて來て埋めましたが、頓て一人の男が現はれ心地快げに墓の土を踏鳴らし、アゝ本統に師匠が死んで仕舞つた彼奴も噂ほどで無い馬鹿者だ己が助けて呉れると思ひ毒を呑んで自殺した、斯う死骸を見捨てれば是で最う安心だと呟きながら立去りました、其人が即ち克魯育です、私は彼の去るを見濟まして其後で墓を發き其死骸を持つて歸り師匠の差圖通りに仕ましたが、果して師匠は生返りました、忘れもせぬ夫が丁度此室です』と長々の物語に幸助は唯梅眞の度胸と實意とに感じ、妙陀は名を聞くだにも恐ろしき毒藥王ヱキジリが此室にて生返りしかと思へば襟許よりゾツと魔風に襲はれて椅子を幸助の傍に寄するのみ。

梅眞は暫し二人の有樣を見て『私の最後の手段と云は此樣な恐ろしい工風です、何うでせう、

同意ですか、不同意ですか勿論貴方がたの勝手ゆゑ決して勸めは仕ませんが』とて幸助の返事を待つに、幸助は妫陀の思惑如何にやと氣遣ひて妫陀と梅眞の顏を見較ぶるのみ、妫陀は如何に返事せんとす、是も無言にて考ふるのみなりしが、頓て決然と首を擧げ『私は貴女を信じます、貴女の仰有る事に今まで迚も間違ひは有ませんから貴女にお願ひ申ます』。

思ひしよりも大膽なる此返事に梅眞は感心し『私に任せると仰有れば充分に遣て見ませう、併し初めから幾度も申す通り是は最後の手段ですから外の手段を用ゐ盡し、何うしても鐵假面を救ひ出す事が出來ぬと極た上で無ければ私も遣ふとは思ひません』幸助は玆に至り初の故障に打て替り充分の熱心を現はして『成る程、最後の手段ですが生返るとすれば殺すので無く、暫し命を停めて置く丈の事で、云はゞ眠らせて置くも同じ事でせう』梅『爾です本統の毒藥で殺したのは決して活返る事は有ませんが、數多い毒藥の中で唯一つ此樣なのが有るのです、是はヱキジリの大發明ですが、呑ました儘で捨て置けば決して生返ると云ふ事は無く停た命が停り切に死で仕舞いますが、唯だ夫を解く反對の毒藥を呑ませれば復び夢の覺る樣に命が元へ復る

のです』幸『夫では何も外の手段を用ひ盡す迄待つて居るに及びません、夫が何より近道ですから直に行ふと仕て頂きませう、ネエ妫陀樣』と云ひ振返るに、妫陀は初めの言葉を守り『私は梅眞さんに任せる故、待つも待たぬも其事だけは梅眞さんの了見一つ』幸『では早速掛らうでは有ませんか、ヱ梅眞さん』と迫立る梅『イヤ直に取掛ると仕た所で玆に一つの難儀が有ます、私は其毒藥も其解毒劑も製法は師匠に習ひ能く覺えては居ますけれど、唯だ一滴の調合が間違ばば夫こそ取返しの附かぬ事と爲りますから二種の藥が出來た上で、先づ其藥を生た人間に呑ませて見て、愈々旨く死るか又旨く生返るかを試して見ねば了ません』。

『ヱ生た人間に』梅『爾です其試驗が濟まぬうちは決して鐵假面へ送られませぬ、今申すヱキジリは牢の中で私に彼の克魯育に呑せ二日二晩殺して置て、翌々日の朝生返らせたと申します、克魯育は自分が殺されて居た事を知ず我に復つたとき何だか一年も眠つて居た樣な心持がすると云ひ又何故か頭痛がすると云つた相です、夫くらゐの事で濟んだからヱキジリも安心して自分が呑む事に成ましたが、猶ほヱキジリの實驗話に由ると、藥が夫ほど能く出來る迄に幾度仕

損じたかも知れぬと云ひます、中には命だけは取返したけれど生涯大馬鹿になり、口利く事も出來ぬ程に成た者も有ます、折角鐵假面を救ひ出ても其様に成ては大變ですから、私は是より藥を調合し、出來た上で誰かに試して見ねば成ません、外の事柄と違ひ間違へば人一人殺すのですから、先づ人殺の罪を犯すと云ふ覺悟で無くては試驗も出來ず、此方が其覺悟でも殺されるを承知の人が試驗の相手に成て呉れねば了ません』、と、成程容易には行はれぬ難儀の次第を數へ來るに、幸助も之には驚きグッと閊えて考へ居たるが、忽ち思ひ定めし如く『宜しい私が其藥を呑み、充分試されて見ませう』と言切りたり。

五十九

毒藥を試驗する爲め自ら之を呑まんとは一命を的にしての言分なれば、梅眞も之には驚き、『イヤ貴方の熱心は今に初ぬ事ですが、毒藥試驗の相手になり今貴方が無くなれば誰が妙陀さんを助けます、貴方が何と仰有ッても我黨の者を試驗の相手にする事は出來ません、私の考へでは愛武とか稲屋とか云ふ様な奴に呑ませて試し度いのです、假令試驗の爲で無くとも唯今も云ふ通り彼等は到底活して置かれぬ奴輩です』幸『夫は勿論私も同意ですが、愈々斯うと極つた上は便々と待て居る譯に行かぬから夫で私が呑で見ると云ふのです、呑だ所が多分相違無く蘇生るだらふと思ひます』梅『蘇生ると極つて居れば呑で見るにも及ばぬ事、必竟夫が覺束なければこそ試驗すると云ふのですから、間違ッて殺しても構はぬと云ふ人で無ければ試驗の相手にせられません、夫に又幾等貴方が急いでも其原品を集めたり様々の手數が有り、夫や是やに大分月日も掛りますから、兎に角此事は無言て私へ任せてお置なさい、私が唯一人で思ふ様に調合し、又思ふ存分に試驗して其上で貴方がたへ又御相談に及びますから』と云ふ、是には異存を唱ふる譯に行き難ければ幸助も漸く承知したるが斯る折から裏口より微に聞ゆる物音あり。

誰か忍びやかに戸を叩くに似たれば、幸助は聞耳立て『オヤ誰だらう』と怪み問ふ、梅眞は宛も待設けし如く『彼れは男爵相須根です』と答ふ、相須根の名は聞し様にも思はるれど定かには覺えねば『エ相須根とは何者です』梅『今朝救出した甕の鐵假面です』幸助は少し苦々しき

顔をして『ア、彼奴ですか』と云ふのみなるも、妫陀は一入胸悪き面持にて『アノ様な者が貴女の所へ何しに來ます』と詰るが如く問返せり。

個は無理ならず、妫陀は彼れ相須根が曾て守雄に無禮を加へ、不烱白刄とやら云へる恐ろしき大劍にて守雄を傷づけし事を知る故、今朝も鐵假面の彼れなるを見て匆々立去りし程の次第なれば、彼をも仇敵の片端と思へるなり。梅眞は夫と察し『イヤ貴方がたは夫ほど彼れを憎むには及びません、成る程彼れが守雄殿を傷けたとは聞ましたが決闘は武士の習ひ、事に由ると守雄殿が彼を傷ける所で有つたかも知れませんから、後まで恨む者では有ません』妫『でも彼れは尋常の決闘で無く、婁武の手先と爲り守雄を怒らせて殺さうとしたのです』梅『爾でも有ませうが、其後彼れは心を改め我黨へ附いたのです、爾云へば夫も我黨の内幕を探る爲だと仰有るだらうが、彼れは決して猶尾のやうに惜む可き悪心は有ません、唯だ壯士隊の頭分で、定つた祿が無いから誰にでも雇はれて居た丈です、兎に角彼の様な男ですから味方に就けて置けば必ず役に立つ時が有ませう、貴方がたがお厭ならば私が養ツて置き所夫安東の許へ送り隠れさせ

て置きますから、何うか貴方がたは知らぬ顔で大目に見て戴きませうと言葉を分て言開くにぞ、妫陀は深く梅眞を信ずる丈に『イヤ爾仰有るなら彼れへの怨みは忘れませうが』と云ふに、幸助は猶ほ腑に落ちぬか膨れ顔にて『鐵假面救ひ出しの計略も彼が爲に喰違ツたかと思へば忌々しくて成りません』梅『イヤ幸助さん貴方は彼を恨む譯に行きませんよ、彼が鐵假面を被されて居たと云ふも全く貴方の身代りです、貴方の身代りと爲つた爲に我々の計畫が食違ツたのです』

幸『エ、夫れは何の事です』梅『イエサ、彼はペロームの銅臺の壕で軍曹を殺したと云ふ嫌疑で捕まりました』幸助は思ひ出せし如く膝を打ち『ア、爾だ、今朝から何だか見た事の有る顔と思ひ色々と考へましたが、爾々軍曹を投込んで立去るときチラと見た浪人だ、彼が私の身代りに捕はれたのですか、是は可笑しい實に可笑い』と忽ち打解けて打笑へり。

梅眞は此圖に乗じて『夫のみでは有ません、彼は甘んじて貴方の罪を引受け貴方の事は露ほども言立ずに居たのです、其様な所を見れば滿更魂性の腐つた者とも思はれません、夫に又彼れは大牢獄の中で本統の鐵假面の姿を見たと云ひます、是は何よりも耳寄ゆゑ、私は其姿が何

の様で有つたかと問ひ掛ましたが、生憎其時大牢獄で早鐘が鳴つた故、今夜緩々聞く積で此家へ來いと言附けて分れたのです』幸『オ、、其様な事なら直に玆へお呼入れ成さい、牢の中の様子を初め色々參考になる事柄を知て居ませう』と却て喜ぶ様子を現はし、妢陀も大に柔ぎたり。

此時再び音づるる聲聞えたれば、梅眞は唯一人立上りて、徐ろ〳〵と出去りしが頓て彼の荒武者を引連れて此室へと入り來れり、荒武者の容貌は今朝見たる儘なるも衣服だけは既に囚人の服を去り、古着を買しと思はるゝ出立にて、腰に一刀をも横たへぬは物足らぬ心地やすらん、彼れは幸助を見るよりも、最嬉しげに『オ、ペロー ローム鎭臺の淙の勇士か、唯の漁師では有るまいと思つたが、矢張り決死隊の一人だつた』と云ひ、其傍へ進まんとして忽ち妢陀の顏を認め、又一歩退きたれば、梅眞は早くも間に入り言葉短に彼れ是れを說明かすに、彼れ漸く安心して席に就けり。

梅眞は無益の言葉を費さず、直ちに彼に打向ひて『先刻貴方は二度まで鐵假面の姿を見たと云ひましたが、吾々が救度ひと思ひ今まで骨を折つたのは、貴方では無く全く其の鐵假面です、所が牢番が間違へて貴方へ道具を渡した爲め、貴方が此通り助かつて其肝腎の鐵假面は助ける道が絶えました、貴方は我々に對し義務としても是から其鐵假面を助ける事に骨を折らねば成りますまい』荒武者は少しも狐疑せず『無論です、無論です私も今朝初めて間違ひの爲め自分が助けられた事を知つたから、此償ひには織部夫人や貴方がたが助け度ひと云ふ其鐵假面を助けて上げねば濟むまいと思ひます、ハイ助ける爲に充分に骨を折ます、唯だアノ鐵假面が大牢獄から引出されて何處へ送られたか、其行先さへ貴方がたが突留めて下されば、私は今から直にでも其所へ行き、牢を破つてお目に掛けます』と異様なる事を云ふにぞ梅眞は驚きて。

『ヱ、那の鐵假面が早やバスチルから外の牢へ移されたと仰有るか』相『ハイ私が牢番から繩梯子など受取つた說教日の其翌日の夜、彼れは確に大牢獄から外の牢へ送られました』外の牢へ送らるれば行衛を探る便り無き故、最う鐵假面は到底救ふ事出來ずと一同は今までも氣遣ひて、外へ送られぬ其中にと只管思案を凝らして居たるに、早鐵假面が送り去られしとは運の盡きとも云ふ可きか、唯是だけの言葉にて一同は殆んど絶望の谷底に落入りし如き心地したり。

今までとても失望せし事は度々あれど是ほどの失望は無し、鐵假面が大牢獄より連去られしと有りては即ち外の牢屋へ移されたる者なれば、幵を探し出さん事思ひも寄らず、到る所の鎖臺に牢屋ありて秘密の國事犯人を隱し置き其名前其數さへ決して世間へ知さゞる此時代の事なれば、大牢獄より取去らるゝ者は此世より取去れしに同じ、今までとても斯る例しは往々あり て、政府が隱したる囚人をば其親戚朋友等が探し出さんとせし事は多けれど探し當たる事絶て無し、初より唯だ之が恐ろしければこそ幸助をペロームの鎖臺へ附切りに附置きて、鐵假面が何れの日何れの所へ送らるゝやを見張らせ置き、漸くにして大牢獄へ送らるゝ事を突留得し程の次第なるに、今また不意に他の牢へ送られしとは全く望みの綱を斷たれし者なり。

何として其行衛を探り又何として救ひ出さんや、幸助も妨陀も落膽して首を垂るゝのみなるに、唯だ梅氏女は切て其時の樣子だけも聞かん者と思ふ如く、更に相須根に打向ひ『其鐵假

面が外の牢屋へ移されたとは貴方に何うして分りました』と問へり。

『想ふ送られる所を見たのです、實はネ、日曜の日に私は破牢の道具を受取て直に其夜から窓の鐵棒を外しに掛りました、翌る月曜の夜も夕飯が濟まして是で最う典獄も回て來ぬから安心して働かれると思ひ、徐ろ〳〵仕事に掛つて居ますと夜の十一時と覺しき頃、大勢で第二塔へ上ツて來る足音がするのです、ハテな己の仕事が分ッたのかと私は周章て其道具を寢臺の底に隱し寢た振を仕て居ました、スルと足音は段々と近くなり私の室の前まで來ましたが、私の室へは這入ず、ズッと最一人の鐵假面の居る室へ行く樣です、私は目を開いてソッと見るに、典獄副典獄の兩人が先に立ち其後から二人の番人が釣臺を舁いで隨て居ます、其番人と云ふのが一度見た事の有る奴で、其前の日曜に鐵假面を說教室へ連て行つた男です、時々私の室の前を通るから顏も姿も見て知て居るのです、夫に其の釣臺と云ふのが私がペロームからバスチルへ移されたとき乘せられたのと同じ樣な釣臺ですから、扨は鐵假面が外の牢屋へ移されるのかト、斯思つて居ますうち果して其室で騷がしい物音が初まりました、何でも鐵假面が容易に從はぬ

のを無理に釣臺へ載るのだと思はれました』梅『シタが貴方の室と其鐵假面の室とは互に物音が聞ゆる程近いのですか』相『ハイ私の室より一室隔てゝ二室目の向ひの室だと思はれます、何でも少し離れて斜向ひに成つて居るのでせう、通例の聲は聞えませんが大きな物音は聞えます、既に其夜鐵假面が罵ツた聲などは可なり明かに聞えました』。

鐵假面の聲が聞えしとは其本性を見破るの便なれば、妙陀も幸助も一樣に首を延すに梅眞も其氣と見え『ヘ、エ、其聲は何と聞えました』相『充分には分りませんが寒武〳〵と云ふ聲が二三度聞え、最後には何所の牢屋へ送られても時さへ來れば破ツて出るから、其節は鐵假面を抜いで禮に行くと寒武へ傳へて呉れ、と何でも此樣な事を云ひました』妙陀は所夫守雄の勇ましき言葉を聞く如き思ひにて『エ、其樣な事を云ひましたか、夫では最う守雄に極ツた』幸助も傍へより『ア、、帶里谷に其勇ましい言葉は出ぬ』と呟けり。

相須根は此語の心を悟りし如く『左樣です、私は兼て楢尾の話に鳥居立夫初め其外へ鐵の假面を被せると聞いて居ましたから、初めて鐵假面の囚人を見た時には帶里谷事鳥居立夫だらうかと思ひましたが、日頃極靜に控へて居る勇氣と云ひ其罵ツた語氣などで帶里谷では有るまいと思ひます』梅『貴方は有藻守雄の聲を知つて居ませうが其聲とは思ひませんか』相『守雄とはアノ決死隊の隊長橘部武發のことですか』梅『爾です貴方とブルセルの居酒屋で決鬪したと云ふ其武士です』相須根は頭を傾け『左樣サ、或は彼れかも知れませんが、彼の聲も確には覺えませんから言切る事は出來ません』梅『夫から何うしました』相『其中に口へ蓋をせられたと見へ一言も發せぬ事となりました、何しろ鐵假面の細工は巧く出來た者ですよ、蓋をすると裏に指の樣な棒が二本有つて、夫がピツタリ唇を摘み少しも物を言ふ事の出來ぬ樣に上下の唇を閉合せます』幸助も既に自ら相須根の鐵假面を被り試みたる者と見え『左樣サ唇の上下を強く推附け唇が少し前へ突出る樣に成つた所を上下から挾むのですから、アレでは言葉の出ぬのみか長く蓋して置けば唇が痛みます』と云ふ、梅眞は之に構はず『夫から其鐵假面は何うしました』相『暫くすると釣臺へ載られて私の室の前を通り下へ降されました最う邪魔をする者は有るまいと私は再び窓の仕事に掛りましたが、間も無く裏門の戸が開き濠へ釣橋を繰出し二騎兵が三

人程護衛し釣臺の儘鐵假面を何所へか送つて行きました、ハイ私の見たのは是だけですが兎に角鐵假面がバスチルに居ぬ事は確です、其翌日即ち昨日は典獄が見廻りに來ても第二塔には私一人ですから私の室より先へ行きません、夫に食物も第二塔へ上るのは唯私一人前です』。

梅眞女は聞終りて太息吐き『シテ見ると極々の秘密を守り、夜更けてからソッと何所へか送つたのですネ』姫陀は氣遣しさに堪得ず『何うしても其行先は分りますまいか』相須根は之に答ふる如く『分らせぬ爲に夜更て送るのですから到底分り樣が有ません』と云ひ、梅眞は考へ乍ら『全體云へば其釣臺を舁ぎ、送つて行つた人足に聞けば幾等か分る筈ですけれど、人足と云ふのが即ち牢番で鐵假面と共に外の牢屋へ轉任し、決してバスチルへ歸らぬから仕方が有ません』『幸』と云つて此儘に鐵假面の行衛を探さずには居れません、十年でも二十年でも吾々の命の有る間は探しませう』『姫』何か好い工風は有ますまいか『梅』斯なれば唯一つ有ます、隨分六かしい工風だけれど』と云ひつゝ姫陀の顏を見るに、姫陀は其工風を聞かんとする如く前に乘出で『何の樣な工風です、何うせ六かしいのは覺悟ですから、決して私は厭ひません』梅『貴女が

夫を厭はぬと仰有れば言ませう、外でも無い唯だ婁武に懇意を結び、彼れの日から云はせるか、彼れの手帳を偷出すか唯此の一筋です』姫陀は悸つとして身を引きしが、頓て決然たる面持にて『では詳しく貴女の差圖を受け、出來るだけ遣つて見ませう』と答へたり。

實に姫陀は相須根の言葉を聞き益々鐵假面の守雄なる事を思ふが爲め今は何事をも恐れざる決心なり。

六十一

姫陀は初て婁武に懇意を結ぶ事を承知せしも、婁武は是れ所夫守雄を初とし同志一同の敵なり、双を揮つて彼を刺殺すこと本望なれ、守雄の妻と爲りてより仇し男に白き齒を見するさへ心好からぬ事に思ひ、男姿に打扮て千軍萬馬の間にも守雄に從ひし身を以て、敵婁武に交るとは是ほど辛き事は無し、唯だ憐む可き鐵假面を所夫守雄と思ふに由り、其行衛を突留むる爲め詮方なく〳〵承知せし者なるも、若し鐵假面が守雄に非ざりせば如何にせん。

相須根の話を初め其外の事柄にて考へ合せば鐵假面は守雄なるに相違なし、其行ひの勇ましさ、帶里谷なりとは思はれず、去れど初よりの筋道を事細かに考へ來れば、第一に怪む可きはセント、ヨハ子の寺の庭にて秘密の手箱を盗み去りたる曲者なり、鐵假面が守雄ならば手箱の隱し所を他言する筈なき故、盗み去る人も有る筈なし、然るに盗み去る人ありしも帶里谷が其筋に捕はれたる證據ならずや、二人の士官一人は死し一人は生捕れたり、生捕れたるが帶里谷にて守雄は死したる者なるか、鐵假面が此兩人の内なる事は少しも疑ふに所なし、廣が淵にて捕へし上直ちに鐵假面を被せし事、既に妫陀と幸助がペローム鎭臺にて洩聞きし櫛尾と鎭臺長との話にて明白なり。

猶一つ怪きは彼の手箱既に盗み去られしからには、手箱の中なる連判帳に名を記せし他の同志等も追々に捕はる可きに、決死隊の奥怪となりし後にて何人も捕はれしを聞かず、既に同志の隨一と稱す可き梅眞女の如きも、今以て無難なり、或は政府にて是を荒立るを好まぬ爲め、唯だ密々と目を附るのみにして表向に手を下さゞる者なるにや、斯る怪みは時々妫陀の心に浮び幸助にも梅眞にも問試みし事あれども、二人とても是と云ふ道理を解得ず唯だ怪むのみにして今に分る時ある可しと云ふ丈なれば、妫陀も其上に究むる能はず兎に角も鐵假面を救はんとて、樣々に骨を折るうち終に鐵假面の行方を失ひ、宴武に懇意を結ぶの外なき事とはなりしなり。

夫は扨置き此頃巴里の町々を貰ひ歩く數多き乞食のうちに黑き頭巾を打被り其顏を人に見せざる男あり、此男鼓弓を磨るに巧にして甘歌謠ふ聲も能く、下樣の戲唱より上は朝廷に行はる、高尚なる歌までも節面白く謠ひ歩で戸毎に食を求むるは、察するに音樂師匠の零落し者にも有らんか、顏を見せねば年頃は知る由なきも聲の美妙なる所にては猶ほ左までの老人には有らぬならん。

茲は彼が宿とせるブルゼー街の煮込屋なるが、宵の程より大勢の乞食集り酒呑みながら身分相應の賤き話に夜を更かせり 甲『何うだヱ此頃は世の中が詰ると云ふ者か段々貰ひが少く成るが、乞食も何か相當の藝が無くては心細いなア』乙『爾サ那の黑頭巾の樣に鼓弓でも磨れるなら、

樂々と暮されるが』丙『馬鹿を云ふな、アノ様に病身で仕方が有るか、昨日まで二週間ほど半死半生で寢て居たぢや無いか、病氣が好く成れば返すからとて吾々へ餘ぽど借を拵へやがつた、己が口を聞て遣らねば彼奴、疾くに此宿からも叩き出される所だつた、今朝は大分氣色が好いと云ふから鼓弓を持たして出して遣つたが未歸つて來ぬ所を見ると何所かの軒下で倒れて居るのだらう』。

甲『だけれど彼奴が顏を見せぬ所は實に不思議だなア、病氣で寢て居ても頭巾を被つて居やがるが餘ぽど深い仔細が有るのだゼ』乙『何の様な仔細でも己達に顏を隱す譯は無い、外へ出る時だけ隱すなら分つて居るが最う三月ほど茲に居るけれど一度だつて顏を出さぬぢや無いか』

甲『彼奴事に由ると貴族の若殿とか何とか云ふ様な事で顏見られるが恥かしいのかも知れぬ』

乙『イヤ爾で無い、褒美を掛けて探されて居る有名な罪人だよ、顏を見せれば金の爲に吾々が其筋へ引出すと思ふのだ』甲『成る程爾かも知れぬ、彼れ仲々唯者で無い、言ふ言葉からして上品だゼ』乙『爾々、夫に又イヤに高慢畜じやア無いか、先日も己が催促したら、今に大金が手

に入るから其時まで我慢して呉れと云ひ様々の事を話したゼ』甲『何の様な事を』

乙『エ何だか大臣の身に取つて大事な事を知つて居るから、夫を婁武へ賣附ければ生涯安樂に暮されるツて其外に大臣だの貴族の名前を大勢知つて居て、今にも自分が貴族にでも成る様な事を云つたが己は一々覺えて居ない』甲『夫じヤア眞逆褒美の掛つて居る罪人でも有るまい、併し其様な大事の事を知つて居るなら何故此様に乞食して居る、早く婁武に言立て取上て貰ひ相な者じや無いか』乙『爾よ己も爾云つたら彼奴の返事が好いじや無いか、大方は分ツて居るが猶だ少し分らぬ所が有るから夫を探り上た上で婁武に知せると斯云たよ』甲『彼奴曰先が旨いから手前を欺たのだ』乙『イヤ爾とばかりも思はれぬよ、事に由ると其事件で己達に手傳つて貰はねば了ぬと云て居た』甲『何しろ彼奴本統に變り者だよ、己はアノ頭巾を引剝ツて彼奴の面を見て呉たいと思ふが、何うだ二人で彼奴を捕へ否應云はさず撿ためて遣らうじや無いか』乙『夫も面白いなア、好し〳〵今に歸つて來て寢るだらうから其時手前が彼奴を動かさぬ様に壓し附ければ己がアノ頭巾を取る、コレ手前も手傳はぬか』と丙に向ふに、丙は殆ど胸惡げに顏を蹙め、

『止せ〳〵己は最う彼れの眠つて居る暇に顔を見たよ』甲乙『何だ、最う見たのか』。

丙『見たが今では後悔だ、見無きや好つたと思つて居る』甲『何だ人の顔を見て後悔する奴が有るか』丙『人の顔なら後悔せぬが彼奴の面は人間の顔じゃ無い、オ、今思ツてても胸が悪い』

乙『人の顔で無くて何の面だ』丙『何の面などと話に出來る面ならば後悔しはせぬ、己は癩病者も隨分見たがアノ様な恐ろしい面は見た事が無い』甲『エ、彼奴癩病か夫で頭巾を被ツて居るのか』丙『ナニ癩病じや無い、癩病より猶恐ろしいよ、繪に書たお化にもアノ様な凄い顔は無い何の事は無い骸骨だよ、鼻が流れて深い三角な穴に成つてよ、瞼が無くて丸い目の玉ばかり光つて居てよ、唇の無い齦から長い齒が突出て居てよ』甲『本統に其様なのか、最う云ふて呉れるな、云ふて呉れるな、ア、聞くだけでもゾツとする』乙『夫じやア己達にも顔を見せぬ筈だ』とて互に身震する折しも、左の小脇に毀れたる皺弓を挾み、右の手に杖を突き〳〵、此所へ入來るは黑頭巾の本人なり、黑頭巾抑何者にや。

六十二

杖を力に入來る黑頭巾の様子を見れば成る程彼れ病後の疲れに堪へざるか喘ぐ息さへ切なげなり、今まで彼れの事を噂し居たる乞食共は彼れの顔の恐ろしげなりと云ふ話しに殆ど總毛立たる折なれば、化者にでも逢ふ如く互に己が背後を見ながら無言にて身を寄せ合ふに、彼れ斯とも知らずして一同の傍に寄り『ナント皆様、今夜は一仕事手傳つては呉れまいか、兼て話した儲け口が愈々今夜目附かツたが』と賴む如くに云ふ聲は、乞兒に似氣なき優しさなり。

此聲を聞きては彼の顔の夫ほどまで恐ろしからんとは思はれぬ故乙の乞食は勇を鼓し『儲けと有れば手傳つても遣らうけれど能く本末を聞て見ねば』黑『イヤ本末は云ふても分らぬ唯だ私の賴む通りに仕て呉れゝば夫で好いのだ』甲も少しく元氣に歸り『前金で雇はれる仕事と違ひ、儲かるか儲からぬか分らぬ事では、能く本末を聞て見ねば其賴みに乘られ無い、喃う一同』丙『爾とも〳〵、又例の國家の秘密とか云ふのだらう、爾病者た姿では餘り大臣婆武に禮を云はれ相に

も思へぬぜ』雑返されて黒頭巾は、残念と思ふにや破れし鼓弓をガラりと落して『皆さんは私を馬鹿に仕さなる、元は是でも陸軍で長劍の一本も刺した男だ』甲『今じや杖一本突て居るのか』

黒『爾馬鹿に仕なさるな、身體さへ達者なら皆さんには頼まぬけれど何を云ふにも此通りで、歩むさへヤツとだから折入て頼むのだ、コレ皆さんイヤサ何方でも唯お一人、欺されると思つて手傳つて下されや、夫も唯だ頼みはせぬ儲けは期と山分だ、ア、ア、斯云つても誰も手傳ては呉れぬのか、今夜見逃せば又一寸と廻り合ふ事では無いのに』と深く嘆息する有様は如何にも誠しやかなれば、恐ろしき顔の話も早や忘れて。

乙『夫ほど殘念なら己が手傳ても遣うが儲けは屹度山分か』黒『夫は問返す迄も無い事』乙『だけれど骨の折れる仕事なら御免だよ餘り又疲ぶれては明日貰ひに出られぬから』黒『ナニお前達の達者な身體に疲ぶれる程の事では無い、唯だ歩きさへすれば濟む事だ、委細は歩みながら話すからサア直に來て下され、斯う云ふ中も夜が更ける』と云ひ、鼓弓は腰掛けの上に置きし儘、杖に縋りて亦外へと出たれば、乙乞食は立上り笑ひ乍ら甲丙に向ひ『物は試しだ、彼奴の云ふ

通りに遣て見やう』との言葉を殘し、其儘黒頭巾の後に從ひて出れば黒頭巾は重き身を引き徐々と歩みながら『實はナ、或女の住つて居る所を突留る丈の事だよ』乙『何だ夫では探偵のする仕事だな』黒『爾云へば先づ其樣な者だけれど探偵と云ふ程六かしくは無い』乙『だツて何か手掛の無い事には』黒『有るとも〳〵、大有だよ、今夜其女と云ふのがローヤル街の角の屋敷へ來て居るから其の歸る時まで待ち、後を尾けて住居を見屆ければ夫で濟むのだ』乙『タツた夫だけの事か』黒『爾サ是だけの事だから私が足さへ丈夫なら自分獨りでするのだけれど』乙『爾して金は何所で儲かる』黒『ナニ今夜直ぐには儲からぬが明日でも私が其住居へ行き』乙『ウム其女に逢て強談るのか』黒『爾サ、世間を忍んで居る女だから強談つても好し又は其女を導ねて居る人の所へ知らせても好し孰れにしても儲かるのだ』乙『其奴は成る程面白いなア』黒『ナアニ未だ夫ばかりでは無いのだよ、夫で少しでも金を儲け身姿さへ拵へれば私は皇族の所へも行き、貴夫人の所へも行きお前達二人や三人安樂に養ふ丈の資本は譯も無く出來るのだが、何分此通りの身姿では第一門番に追拂はれるし、夫に顔が昔しとは』。

違ツて居ると云掛けて忽ち心附し如く言葉を轉じ『何分にも先づ少しの金を得、何所の家でも這入られる丈の身姿から拵へねば』乙『身姿が出來れば已達に用は無いのか』黑『ナニ爾では無いア、話する間にソレ約束のローヤル街へ着た』と立留れり。此時夜は早や十二時過にして、行通ふ人も絶たれば黑頭巾は安心の樣子にて一方の角に在る家を指さし『アノ家から出て來るのだよ』乙『アレか那れはお前、梅眞女と云ふ名高い女占者の住居じや無いか』黑『夫は知て居るよ』乙『何時出て來るか知ぬけれど斯うして玆に待て居やう』黑『アヽお前が玆に待て居れば私は向ふ側へ行き其女の出て來たとき顏を見るのだ、何でも宵の内にアノ家へ這入るのを見て間違ひ無いとは思ふけれど、正面へ廻ツて今一應其顏を見ぬ事にや何とも云へぬ夫で若し間違ひなら私は直に此所へ歸ると仕やう愈々其女と見れば何氣なく向ふの方へ行つて仕舞ふから其時にはお前が直に其女の後を尾けるのだよ』乙『好し〳〵爾して其女が何町の何番地へ這入るのか夫を見屆けて夫から宿へ歸れば好いのだな』黑『其通り〳〵』と云ひ彼れ滿足の體にて向ふ側へ立去りたり。

抑も黑頭巾の身の上は分らぬも、此者が斯く附狙へる女こそ即ち妙陀なる可しとは讀者の既に察したる所ならんが獨り妙陀は是を知らず、幸助と共に梅眞女より樣々の差圖を聞き終りたれば又の逢ふ日を約束し、其裏門より立出て表の方に出來りつ薄暗き常夜燈の許を過んとするに此所に一人の乞食ありて杖を突つゝ妙陀の方に歩み來れり。勿論有勝の事なれば拐は物貰ふ心にやと、妙陀は己が衣囊を探り幾片の小錢を取出すうち早や彼れ目の前に來りたれば『ソレ』と云ひて投與ふる機みに初めて能く彼れの姿を見れば、個は抑も如何に、彼れが黑き頭巾を被れる樣は、曾てセントヨハネの寺にて秘密箱を堀盗みし彼の怪物と殆ど同樣なれば、妙陀は慄として踏留るに、其暇に黑頭巾は錢を拾ひて孰れへか影を隱せり。

隨從ふ幸助は妙陀の尋常ならぬ驚き方を見て痛く怪み『何事です、ヱ何を其樣にお驚き成さるのです』と問へども、眞逆に彼時の黑頭巾と今見たる黑頭巾とが同じ人なる筈なしと思はるゝにぞ、妙陀は唯だ己が氣の迷ひと見『ナニ乞食の頭巾が變に見えたから惚りした丈の事サ』と云ひ、深く心に留ずして此所を立去りつ、頓て我住居に歸り見れば婆武より來りたる一通の

手紙あり。明夜は醫師を引連れて病氣見舞に參上すとの事を記しあるにぞ、娑陀は愈々是より
して辛き役目の初まる事と胸先づ騷くを覺えたり。

六十三

怪しむ可き黑頭巾の乞食が娑陀の住居を探らんとせし其翌々日の午後五時頃の事なるが、大宰相宴武は日頃の朴訥き風にも似ず髮を洗ひ頭を撫で見違へる程立派に成りて、其私邸より馬車に乘り出去らんとす、指して行くは何れなるや知ざれど其顏色まで每もの厳かなるに似ず、悽しと評せられたる容貌に何所やら笑しげなる所あるやに見ゆるは、窮屈なる政治上の用には有らで唯だ自分氣儘の用向ならんか、彼れの側に含乘せる一老人、腹便々と肥立り、顏ニコやかにして能く笑ひ能く話し少しも宴武の氣を反さぬ風あるは兼て彼れの友達かと見るに、友達にしては少し言葉が謙遜過ぎ、去ればとて下部雇人の類かと見れば、夫にも有らず、若しバアセーユの王宮に出入せる人に見せしめなば、是れ朝廷の一侍臣にして已よりも世辭の巧なる鳥

見田何某（原名トルミドー）なるを知らん。

馬車は頓て私邸の門を出でパスチルの方角を指して奔り初むるに、鳥見田醫師は笑ながら宴武の顏を眺めて『御前が故々私を民間の病人の許までお連成さるとは實に不思議ですよ、病人は誰ですか、餘程貴方が大切に思ふ方と見えますな、ハテな御親類の內ならば何も斯うして連て行かずとも、何街の何と云ふ屋敷へと夫だけお差圖下さらば直に出張致しますが、斯う考へると益々分らぬ、御前是れは必ず新知己の家ですな』宴武は例の破鐘の如き聲にて『先ア爾だ』、醫『猶だ細かに推量すれば多分は美人だらうと云ふ所まで分ります』と云ひ彼れの粧飾たる身姿をジロリと見、腹の內には『此の不意氣なる政治家が女俳優でも見染たのか』と吱くに似たり宴『オ、流石は鳥見田だよ、其樣な推量が何うして出來た』鳥見田は益々笑顏となり『人の心の中まで診察する眼力が無くて、醫者と大宰相が勤まりませうか』宴『アハ、、成る程夫は爾だ』醫『實は貴方も日々困苦しい御用事ばかりで、お身體にも障りますから些と美人仲間へ知己を求めて、其方の交際を爲さるのも氣保養です、及ばず乍ら此鳥見田も其邊のお手傳ひを致しま

せう。

日頃ならば我が私の事柄にまで立入りて斯く彼是と云ふ者を其儘許し置く寒武ならねど、今日は却て之を喜ぶ如く『お前は仲々役に立つ男だよ』醫『イヤ、何の樣な御用でも致します、シタが其の新知己と云ふは何うした美人ですか』寒『ナニ此頃田舍から出て來た女だよ、實は多少政府の用事にも使はれた人の妻で其人が死んでから譯あツて此土地へ出て來たけれど、事情に甚だ憐む可き所が有るから目を掛けて遣うと思ひ』と然る可き口實を作りて聞かすに、醫師は腹の中にて『ナニを云ふのだ何所かの後家へ目を附て事情甚だ憐む可しなど旨く道理を拵へるぞ』と呟き、少しの間に萬事の樣子を呑込みて是より樣々の話を爲すうち、馬車は大力蛇陀が住居の間近まで來りしが、此とき窓の外にて異樣なる物音するにぞ寒武は何事かと首を出して見るに、丈夫氣なる一人の乞食確と馬の轡に取附き、馬車の進みを留めんとして馭者と爭ふ者にして、猶ほ窓の直下には黑き頭巾を被りたる異樣の男佇立めり寒武は大喝一聲に『何者だ狼藉するのは』と叱り問ふに黑頭巾は進み出で『狼藉では無い忠義です、貴方の爲め國王の爲め

國家の大秘密をお知せ申すのです』。

馬車を擁して直訴するは今までとて滿更無き事には有らねど、探用する程の者は至つて少く聞取る丈の直打も無きが多ければ『國家の大秘密』と聞きても寒武は更に驚かず却て我が微行の姿を見破りたるを怒る如く『コレ馭者狼藉者を追拂へ』黑頭巾は之に怯まず『イヤ今聞かねば他日貴方が後悔します、國家の大事です』寒『コレ馭者、狼藉者を』黑『貴方の爲に最も恐る可き者が』寒『追拂へ』黑『姿を變へて此巴里へ』寒『構はぬから鞭で擲れ』黑『近々一事件を起さうと計で居ます』寒『爾だ〳〵打のめせ、故なくして人の馬車へ纏る奴は』黑『貴方は私の名前を知ぬから爾仰有るのです、唯の乞食では有ません、貴方に名前の知れて居る立派な武士です』

此言葉初て寒武の耳に入しか『何だ己に名前を知れて居る』黑『ハイ恐く貴方の手帳へも書留られて居ませう』黑『手帳へ留つて居る誰だ、誰だ』黑『ハイ私の姓名は』と云ひ將に名乘出んとしたるも今名乘るは身が危く己れ自らも捕縛せらるゝや知れずと思ひ出せし如く、忽ちに調子を變へ『イヤ私の名前より其事件は猶ほ大切です』寒『己に名を知られて居るなら頭巾を取て顏を

見せろ』『黒』顔では分りません、此熱心で分りませう、國家の秘密を知らぬ者が、危險を冒して貴方の馬車を引留め此樣な事を云ひませうか』『寒武は成る程と思ひてか『聞う其秘密とは何の事だ』。

斯く聞かれて容易に答へ盡しては賣物を唯だ取られるゝも同じ事、寒美の約束を得し上ならでは言立難き事なれば、黒頭巾は又も口籠るに、寒武は早や見限りて『サア馭者、早く遣れ』と言附くるに馭者は鞭にて二人の乞食をしたゝか擲り、驚きて足を引く間に馬にも亦一鞭當て、矢を射る如く走らせ去るに、乞食は病後の足を引き其後を追ながら『貴方は魔が淵を忘れましたか、妙陀と云ふ女の名を聞いた事は有ませんか、決死隊の勇士が未だ生殘つて居る事は知りませんか』と打呼ぶ。

若し此聲にして寒武の耳に入りなば彼れ唯に馬車を急がせぬのみかは、此乞食を馬車の上へ引上げて充分に問ふ事必定なれど、是等の言葉は少しも聞えず、殊に此日は是等の事を聞かんとて來し者にあらねば、全く寒美にでも有附かんとする乞食輩が、言葉を設けて吾を欺さんとする丈ならんと思ひ、其儘妙陀の住居を指して奔り去れり、後に黒頭巾と今一人の乞食は我が目的の全く外れたるを見て、馭者に打たれし鞭の傷を撫でながら是れも孰れへか立去りたり。

六十四

妙陀事平井夫人の住へる家は固より王侯貴人を迎へんとて建し者ならねば立派とは云難きも二階に一個の客室あり前に住居し人の物數奇にて飾附さへ小綺麗に行屆きたれば、朝廷の美々しさにのみ慣れたる寒武の眼には目先の變りたる想ひありて却て居心も好からんか、彼れは今まで幾度と無く訪來りて其度に面會を斷られしに引替へ、今日は丁寧に迎へられ醫師鳥見田と共に此室に通されたり。

頓て入來る平井夫人は成る程病氣後かと思しく顔の色最青けれど生附きたる美しさは之が爲に少しも損ぜず、露に惱める花とやら云へる如く却て一入の風情あり、醫師鳥見田は心の中にて『此樣な尤物が何うして今まで世に知られずに居たのか』と怪しむ如く只管平井婦人を眺む

るに、寒武は日頃の傲慢に似も遣らず、何と言て口を開かんかと殆ど極り悪げにモヂ〳〵せり、彼れが四十年來の政治上の掛引は美人と應接する掛引を彼れに教ざりし者と見ゆ、去れど彼よりも猶ほ當惑なるは妫陀にて彼れの姿を見るよりも早や毒蛇に近づくの想ひあり此儘逃去り度き程なれど、玆が大事と氣を取直し兼て梅眞より誨られたる所に從ひ『見る影も無き此家を屢々お尋ね下されます御親切は有難う存ます』と云ひ、其細き手を延すに寒武は熱心に之を把り、『イヤ此家を訪ふので無く唯だ貴女を訪ふのです』と云ひ、言葉の後を附けて呉れと云ふ如くに鳥見田を顧みるに、彼れも今宵一夜の忠勤は國王路易の傍に百年の辛抱より猶ほ効目ある出世の道と思へば、少しも遲疑せず『ハイ此の方のお住居ならば假令ひ何の樣な所で有らうが、大宰相が尋ねて來少しも恥る事は有ません』と相槌打てり、寒武は此間に次の句を考へて『實は先日來御病氣の由を聞ましたから今日は朝廷の侍醫を連て來ました、是なるは鳥見田醫師です』妫陀は『左樣ですか』と云ひながら鳥見田にも手を與ふるに、彼れも恭々しく之を把り『何うせ朝廷では遊んで居ますから此後は何時でも伺ひます』と云ふ。

此時の妫陀の身は實に女王にも增す尊榮を極むと云ふ可し、幾年の間女に向ひて下げし事なき寒武の無禮なる首を垂れさせ、朝廷の侍醫に『何時でも伺ひます』てふ言葉を聞く世に是れ程の例あるや、妫陀もし通例の女ならば此の尊榮に心醉ひ鐵假面をも同志をも打忘る可き所なるも、妫陀は唯だ如何にもして此面會を短くせんと思ふのみなり『イヱ、折角の御親切ですが病氣は大方癒りました』『島』貴女の御病氣は同じ年頃の御夫人方に能く有ります、多分神經的の疲勞でせう、併しナニ御病氣がお癒りならば是から屢々お目に掛られます』寒武も尾に附きて、『左樣さ、巴里には隨分見る所も有り交際の社會も廣く、是からは私が御案内致しませう』『島』イヤ最う大宰相の紹介ならば巴里中の貴族皇族の門は貴女の爲めに皆開きます、殊に此御綺緻では三月と經ぬうち交際場裡の達者です、夫にしても今まで貴女が世間へ現はれずに居たのは唯だ不思議です』妫『ハイ私は此後とても餘り交際など致すのは好みません』妫陀は總て梅眞の言附より寧ろ冷淡に遇へども、美人の冷淡は無禮の内に數へられず、斯る氣象の女なれば猶更ら目を掛る直打ありと寒武は却て其熱心を增す如く、是より樣々の話に移り或は今少し流行の場

所を撰びて轉居せよと云ひ、或は懇意の人に官途を望む者あらば充分に取立て遣らんなど、總て己れが大宰相の權威を示し妫陀の心を服せんとのみ勉むれど、妫陀は益々其の心樣の面白からぬを感ずるのみ。

去れど此人の機嫌を取り此人の口より聞かずば鐵假面の行衛遂に知る由なしと思へば、一々其言葉を斥けはせず唯だ好き程に返事せしに、物の一時間も經ちし頃、婁武は初めての來訪に餘りの永居は好ましからずと思ひしか又來る事を約束して此夜は分れ歸りしが、是よりして彼れ三日目或は四日目には必ず來り、長き時は二時間も話すことあり、話しは種々の事柄に移れども鐵假面の事を問ふ如き折は無ければ妫陀は最と本意無き想ひを無し、梅眞にも訴へたれど梅眞は急ぎて疑はるゝよりも氣を永くして自と其折の來るを待つ可しと云ふのみ、其外の差圖は下さゞりしが斯る中にも婁武の熱心は唯だ增すのみにて、是より二月を經し頃は最早彼れと差向に話するは危なしと思はるゝ迄に至りしにぞ、妫陀も確と思案して此上何時まで同じ面會を重ぬ可きに非ず、此次こそは假令ひ彼の疑ひを招く迄も鐵假面の行衛を聞かん、若し聞く事

能はずば夫を面會の終りとして此土地を立去り、國中の牢屋を順々に廻り行き十年が二十年掛らうとも鐵假面を探し出さん、何時まで心にも無き愛を粧ひ所天の敵に笑顔を見せんやと、先づ其由を幸助に告るに幸助も同じ心と見え一も一も無く賛成せし上、猶ほ言葉を更め。

『私も初めから此事は餘り好ましいとは思ひませんが目的の爲め止むを得ず涙を呑で堪へて居ました、愈々彼れの面會を謝絶する事になれば唯謝絶した丈ではいきません彼れを殺してお仕舞ひ成さい、貴女とても彼を殺し身の潔白を示さねば守雄樣に言譯が有ますまい、假令守雄樣の爲とは云へ那の樣な者に幾度も面會し、人を退けて密談して夫で未だ初めの目的も達せず、爾して彼を活して置くと云へば他日守雄樣が聞て貴方の振舞ひを何と思ひませう、サア其の爲め之をお渡し申して置きませう』と云ひ、一個の短劍を出して渡すに妫陀は此異樣なる言葉の心を悟りしか忽ち涙を浮め來り、最と恨めしげに幸助の顏を眺め『其方は先ア何と云ふ、今までの私しの振舞に守雄へ言譯の無い樣な事が有つたとお言か、夫は餘り私の心を知らなさ過ると云ふもの、婁武と一間に籠り密談したとて守雄は扨て置き人に聞かれて恥かしい樣な仇し

言葉も出さぬのに』と言差して泣き伏すに、幸助は猶ほ凜として『イヤ、爾は申しません、貴女の潔白は誰とて疑ひは仕ませんが、唯だ目的を達せぬ日には何の爲に面會したか實に言譯が立ちません、若し目的さへ遂るならば身を汚しても構ひません、ハイ貴女が操を破ツても其代り夫だけ目的が達すれば貴女は本統の烈女です、操も破らず目的も達せねば彼を殺さずに何うして言譯が出來ませう、貴女に殺す事が出來ぬとならば私が殺して上げます』是れ妫陀を勵ます氣か、抑も眞實の心なるか、妫陀は實にもと悟りし如く涙を收めて顏を上げ、最靜に其短劍を受取りつゝ『其所まで私には分らなんだ、成る程彼れを殺さぬ日には言譯が立ちません、此次に若し聞出さねば彼れを殺すか夫さへも出來ぬならば自分で言譯の立つだけの事を仕ます』と云ひ切る心は自殺に在るか、幸助は氣も附かぬ如く『ハイ操を破ツて目的を達するか、操を破らず彼を殺すか、何方と云へば目的を達するが大事でせう』と口の中にて繰返しつゝ忽然と座を立ちしが、此時若し向ふに廻りて彼れの顏を偷み見ば、點々として其頰に妫陀よりも猶ほ多き涙の傳ひ降るを見る可し。

六十五

『操を破りても目的を遂げよ』とは主人の妻に不義を勸むるなり、下僕の身として之を云ふも切なき事情の有る爲なれば幸助が勇士の剛腸、唯だ寸斷に裂かるゝの想ひ有るべし。

幸助の去りし後に妫陀は幾時か泣沈むのみなりしが、又倩々と考へ見れば幸助の一言には千萬無量の味ひ有り、成る程我が身が幾度も彼れ宴武に逢ひながら未だ目的の緒口だに達せぬは幸助梅眞等の日より見て如何ほどか悶しかる可き、是と云ふも今までは我身の熱心足らずして、唯梅眞の差圖を守らば夫にて事濟む樣に思ひ人形の如くなり居し爲なり、既に敵と知る宴武に交る柄は幸助の言ふ如く是だけにて守雄へ言譯無き身と爲りしなり、此上に交りの深き淺きを何か厭はん、如何にするとも目的を達せずば身の汚れを洗ふに由なし幸助の言葉は玆の事なり、好し〳〵今よりは其氣に成り彼れ宴武を欺しもせん、賺もせん、詰る所は鐵假面の行衞を探るが我身を滿むる唯一つの道なれば、如何ほど苦しく恥かしき思ひをしても彼れ宴武を取挫ぎ國

家の秘密を吐かして見れんと今までに無き奮發にて涙を拭ひ立上れば、膝より辷りと床に落つるは幸助が渡したる彼の短劍なり。

『目的を達せずんば是にて婆武を刺殺せ』然り然り、刺殺さん、爾なくば自ら死んのみと取上て眺むれば、個は是れ守雄が鍾愛せし品にして何かの時に褒美として幸助に與へしと聞きし物なれば、今までの心弱きを所夫に叱らるゝ如き心地し推し戴きて肌に抱きメめ、寢間と定めし一室へ退きしが、是より妫陀は翌朝まで其間に彳り或は泣き或は怒り、一夜を煩悶の裏に明せしと見え、翌日起出で來りし時は瞼最と重げに見えたり。

去れば妫陀は唯此一夜にて生れ替れり、復た今までの露に泣き風に驚く小女に非ず、日前の爲には身をも碎き人をも殺さんと決心を堅めたる女丈夫なり。幸助に向ひても昨日の愚痴なりし言葉と替り、心の底の測り難き笑顔にて宛かも大將の差圖する如く『何時此家を引拂ふかも知れぬから其用意を仕てお置きよ』と言葉短に言附けしのみ、其後は又心地好げに庭に出で昔し守雄より聞覺えし『凱旋の歌』を小聲に謠ひ繁木の間を徘徊するのみなりしが、頃て午後の

五時頃に及び、顔に見覺えある婆武の御者一通の手紙を持來りて渡せしにぞ、妫陀は手づから受取りて開き讀むに『先日申置し如くカヘ、ドベルの料理店にて晩餐しながら綏々とお話致し度ければ直ちに御出有り度く』云々の旨を認めあり、成るほど思へば婆武が二度ほども斯る事云ひたりと覺ゆ、唯其時は無禮なる言分かなト思ひしも今は無禮を無禮とせず、却て最後の時來りしと見て、妫陀は今まで顔に浮べし事なき最と愛嬌ある笑をニッと浮め、直に行く故主人に其旨を傳へよと云ひて駅者を返し、其身は早速家に入り二階なる化粧室へと入つて暫し粧ひを凝せし末、嫋々と出來る其姿を見れば水淺黄の絹の外套に輕き帽子を頂き帽子の傍に今しも庭より把來りし白椿の花を頭挿し、顔には一點の紅をさへ差せしと見え日頃の青白き頰に淡しき紅の色を現はせり、勿論當時の薄厚したる流行とは全く違ひ、極めて淡白したる裝りなれども、其能く妫陀の身體に似合へる事は實に譬ふるに物も無く、羽衣霓裳の仙女とても斯までの姿は無からん、若し此姿を唯一たびヴアセーユの朝廷に突出さば三千の宮女顔色なく巴里の流行一夜にして一變せん。

唯だ妫陀は自ら我姿の如何ほど美くしきやに氣の附かぬ如く、振向て腰の廻りさへ眺めず、氣も輕げに歩み來りしが、楷段の上の壁に一枚の鏡あり、突と其前に立ちて一目我が姿を照し再びニッと笑みたるのみ、踏も留らず下り行く楷段は我身を惱むる地獄の道か、抑も亦目的の楷段なるか、今更に思ひ置かるゝ未練も無く、涙は昨夜泣盡して悲しくも無し胸も騷がず、氣遣ひながら下に待つ幸助は却て妫陀の決心唯ならぬを見て、意見せし昨日に引替へ、我より心の後るゝ如く、恐る〳〵聲を掛け『お一人で好う御座いますか』と問ふ、妫陀は何氣なく我衣嚢を指し『安心お仕よ、茲に有るから』と示す心は彼の懐劍の事なる可し、幸助は我が意見の斯までも用ひられしかと思へば迫來る涙を隱し得ず、唯一雫ホロリと滴すに妫陀も其心を察してか『夫ほど氣遣はしければ從てお出』と云ひ、其顏を背けしまゝ、又も何氣無く立去る後より幸助も從ひ行きたり、畢竟此後に如何なる物語りやある。

間も無くカヘ、ド、ペルに着き幸助を供待室に殘し置き二階の廣間へと上り見るに寒武の姿見えず、扨は何かの間違かと思ふ所へ一人の給仕來り『貴女は若し平井夫人では有ませんか』と問ひ妫陀が輕く頷くを見て『お連樣は此方に待て居らつしやいます』と云ひ先に立ちて離れたる所へ案内し行く、此暇にも廣間に居合す幾組の客人は妫陀の美しき姿を見魂を奪はれて互に見送る程なれど妫陀は更に心に留めず、案内に從ひ廊下を傳ひて但有る一室の前に至れば『茲です』と給仕は指さし其儘に立去りたれば、妫陀は今更ら臆しもせず其中に歩み入るに、寒武既に茲に在り、毎もに均しき微びの姿とは云ふ者の初て典獄別毛の家にて見し時とは全く變り、朴訥き服は最も派出やかなる風と變じ、俗人を眩す如き金鎖など胸の邊りに輝き渡れり。

彼れ今までは質素一徹の政治家を以て日され當時の華美なる風に似ず最と荒々しき身の拵へにて一世を睥睨するの概ありしも、判事夫人の云ひし如く美人に掛けては最弱き者なるか、妫陀を見染てよりは全く別人の如く身を飾るに至りしも不思儀と云ふ可し、殊に此日の妫陀の姿は木石に有らぬもの誰とて心を動かさぬは無き程なれば、彼れ唯一目見るよりも恍として我を

忘れし如く『オ、是こそは本統の美人と云ふ者だ』と口走り、フラ〳〵と椅子より立ちしは眞に魂の天外に飛去りし者とも云ふ可し『ア、好く來て下された』と云ひつゝ彼れ妙陀を擁して己が傍らなる椅子に腰掛けしめたれば、妙陀は彼れを顧みて『何の御用』と淡さり問ふに、彼れ殆ど恨しげに『何の御用、夫が貴女に分りませんか』と妙陀の顏を見上げながらも彼れの手彼れの唇總て最と微に震動けり、彼れが心は悉く妙陀に呑盡され、彼れ既に日頃の度胸と日頃の敖慢とを失ひて、徹頭徹尾今は早や妙陀の奴隷と爲り終りしを知る可し。

日頃餘りに傲慢なる人の中に却て此類多しと云ふ、是れみな人と人との電氣の勝負より來る者にて、勝つ者は益々勝て益々落著き、負る者は益々負けて益々周章て、終に一方は奴隷となり一方は無限の君主と爲るに至る、初めて妙陀が別毛典獄の家にて寥武に逢ひ彼れの顏を見上る能はざりしも此理にして、其時は妙陀の電氣弱くして強き寥武の電氣に負けたるも、其後幾度か逢見るに從ひ妙陀は怨みの爲めに強くなり、寥武は愛の爲に弱くなり、進み〳〵て今は其權衡を倒にし、寥武をして終に妙陀が曾て立ちたると同樣の地に立たしむる迄に至りしなり、

傲慢無双と聞えたる寥武を斯くまでに折挫きて唯だ我が一呼一吸にも震戰かせる事と爲りしは、實に妙陀の手柄にして唯だ是だけにて最早や所夫の讎、同志の仇を全く復し得たりと云ふも可なり。

却說も妙陀は見上げたる寥武の眼を避けず其儘之を見詰るに、彼れ却て暈さに堪へずと云ふ如く直に己が眼を垂れ又た極り悪げに上來る、妙陀は『ホヽ、』と打笑み『貴方の御用が私に分ります者か』と答ふるに、彼れは言返す言葉を知らず暫し頭を垂れ息を凝し、宛も踏みたる人の如くに控ゆるのみ、此時の彼が心の中は如何ほどにか騷げるならん、取つ置つ勇氣と臆病心に戰ひ、之を外面に發し得ざるは眞に是れ戀の奴隷、彼れは妙陀が目の前に踏み死ぬる者なるか、總體に室中の靜なること墓の底とも云ふ可き程なり。

靜さ既に極に至し頃、彼は彈線にて跳上る如く悶り其身を動かして晩と妙陀の手を握れり、彼れの手熱き事火の如し、妙陀は敢て驚かず『オヤ何を成されます』と云ひながら靜かに其手を拂ひて我が膝の上に載するに、彼れは最早や鎭まり兼たる如く、猶ほブル〳〵と震ひながら、

『夫人！』妫『ハイ』寒『女に愛情の有る者でせうか』是だけが彼れの精一杯なり、妫陀は又打笑みて『可笑な事をお問成さる』寒『可笑な事では無い、眞劍です、眞劍です』と、角張たる聲にて切々に言出すも熱心過て其聲の續かぬにや有らん『妫『夫は有ませうよ天から萬人に授かッた情ですもの』寒『だけれど、だけれど』妫『だけれど何です』寒『だけれど其愛が、貴女には移らぬ樣に見えますが』此危き言葉には、思ひ定めし寒陀さへ殆ど顏色を變なんとする程なりしも、今は妫陀の眼に寒武は小兒の如し、唯だ小兒の戯言を聞く如く之を聞き戯言の如く之に答ふ、美人が人を惱殺するとは唯だ此邊の事ならんか『ハイ眞實の無い愛情が何うして眞實の女に移りませう』最曖昧なる返事なれど寒武は己れを勵ます者と見しか、抑へ難き程の熱心を現はして『之は實に情無い、私の愛情を眞實の無い愛情と仰有るか、男子の及ぶだけの眞實を以て忘れる間も無く貴女を愛して居ますのに』と縋りも附かん有樣なり。

妫陀は彼れを恐れねば强て拂ひ退けんともせず唯だ驚きたる風を示して『オヤ貴方が私を』寒『夫を疑ふ事が有ますか』妫『オホ、、夫だから眞實が無いと云ふのです、貴方の今のお言葉

ほど眞實の無い言葉が有ませうか』寒『今の言葉に眞實が無い、之は情ない、實に情無い事を云ふ、眞實の愛で無くて、四十年の今日が日まで女に振向いた事の無い寒武が忍び〳〵に貴女の許へ行きますか、眞實の愛が無くて、斯うして心を明しますか』と言出しては、仲々に臆病却て勇氣となり後より曳み掛んとす、妫陀は猶ほ心の中に、是より先に話を進めて差支無きや否や、自ら決し兼る疑ひ有れば暫し返事を發せざるに、彼れ今は夢中なり忽ち妫陀の前に膝を屈し、『コレ夫人、唯一言愛すると云つて下さい、私の妻に成ると、コレ夫人、唯一言返事すれば貴方は私の女皇です主人です、此國中に貴女と肩を並べる夫人は有ません恐らく歐羅巴全國に唯一人です、榮耀榮華も心の儘、皇族貴族と云はれる夫人も貴女の前に鮮伏ます、コレ夫人』夫人〳〵と搔口說く、實に此觥葉の通り唯一つの返事にて妫陀は歐羅巴全國に唯一人の女とならん、妫陀は身を汚して彼れの妻と爲り、其上にて鐵假面の大秘密を聞出す心にや、夫とも外に工夫ある乎、總て妫陀の運命は應か否かの唯二つに繫がるものと云ふ可し。

心にも無き愛を粧ひて徒らに男を垂涎す、世に之れを妖婦（コクエット）と云ふ、妖婦の振舞ひは淑女の爲すを耻づる所なれども、今ま妙陀の爲す所は勿論妖婦の振舞に非ず、心にも無き愛を粧ひ男を垂涎せしむるに有らで、我身は愛を粧はぬに向ふより折來る者なればなり。縱しや幾分か妖婦に類する所あるとも凡て萬々止むを得ぬ事情あり、死ぬる身を死なずして斯る場合に臨みたる者なれば少しも咎む可き所無きのみかは、其心根を察する時は實に千載の後までも婦人の鏡と云ふ可き者にて外に儔ゐ無き所なる可し、勿論何も彼も考へ盡し夜一夜を泣明して思ひ定めたる所なれば、妙陀は寒武の此熱心なる樣を見て少しも騒がず。

『貴方の爾仰有る言葉に誠が有ると何うして認められませう』此間に逢ひ寒武は宛も燃る火の風に逢たる如く、又一入狂ひ出して『斯まで云ふのに誠が無いとは、コレ夫人、心にも無い僞りを並べ女を欺す樣な男だと思ひますか、熱心です眞實です、斯う云ふても分りませんか、コレ夫人、何うすれば私の誠が分ります、至何うすれば』妙『ハイ其證據をお見せ成されば』寒『エ、證據、何の樣な證據でも見せませう、何うするのが證據ですか、大宰相の位を辭して仕まひませうか、貴女と共に田舍へでも引込ませうか、ハイ貴女の爲には義理も捨ます世間も捨ます、榮華も名譽も入ません、最う私の身に取つて貴女ほど大切な者は有ませんから貴女の爲には何の樣な事でも仕ます、是でも未誠とは思ひませんか』妙『誠かも知ませんが口で爾う仰有る丈で夫が證據に爲りませうか』寒『宜しい分りました、口で云ふばかりで無く其通りにしてお目に掛ませう、直に是から大宰相の位を辭し、侯爵寒武の爵を辭し、平民杳兒、梨的理英の身に成つて貴女の前に跪けば是を實意の證據と見て愛を返して呉れますか』と眼に一種の決心を現して念を推す、彼れ實に一旦斯うと思ひ込みたる事柄は如何なる困難を凌ぎても遂ずに置かぬ氣質なれば妙陀の返事一つに寄り其職をも辭し兼まじ。

殊に人間の生涯に一度は必ず愛の爲め何事をも忘れ盡すの場合あり、唯だ遲きか早きかの違ひにて早きものは輕く花々しく唯だ若氣の過ちとして過去れども、遲き者は充分の分別附きて

の上なれば身を過つまで止まぬも多し、況してや彼れ四十年を過ぐる今日が日まで唯だ心を功名富貴に奪はれ愛の如何ほど尚きを知らず、唯だ無慈悲、唯だ非道に、人を突倒して進むを知り、其外の情を知らず崩出づる愛の情を抑へ〳〵て今日まで來りし者なれば、愛は心の裏に在りて四十餘年の發達を遂げ、折だに有らば發せんと兆せし矢先へ妫陀の如き世にも稀なる相手を得たれば、今まで愛を抑へたる反動に一際強く動き出せしなり、彼れ直實に今は唯だ妫陀が一言の返事を得ん爲めには爵位は物かは榮耀榮華は物かはと思へるならん。

之を思へば彼れの有樣、殆ど妫陀が身に取りて恐ろしき程なれど、茲までに致らずば日尚も達し難ければ今更ら驚く事も無し、妫陀は綿に隱し持つ懷劍を探り見し上、猶も我膝に縋り附く彼れの手を拂はずに『貴方が役目を辭したとて、私が夫を有難いと思ひませうか』寶『では何うすれば好いのです、何を貴女は直實の證據と云ふのです』妫『サア何を證據と云ひませう、爾聞かれては困りますが、何でも貴方の今の言葉が若し僞と分つた時に貴方を責る事が出來、僞で濟ませぬ樣な事柄を眞の證據と云ふのだらうと思ひます』寶武は此一言に忽ち合點の行きし

如く『成る程分りました、詰り僞りと分つたとき其僞りを責る丈けの證書ですネ、抵當ですネ』妫陀は又も打笑ひ『金の貸借か何ぞの樣に證書や抵當が受られませうか』寶『イヤ夫は爾ですが其樣な證據や抵當で無く、私が若しも不實を仕た時に貴女が私を責る丈けの道を附けて置けば好いのですネ』妫『ハイ私は此樣な一克者ですから責る丈けでは氣が濟みませぬ、責て亡ぼす道で無ければ貴方が何と仰有つても誠とは思ひません』

寶武は望の愈々開きたりと見てて稍少し安心せし如く、手の掌にて其額の汗を撫で『御尤もです、私が嘘を吐いたとき私を責て攻亡ぼす丈けの道、成る程是なら證據です、宜しい、勿論僞りを云ふ筈が有りませんから夫は何より易い事です、何れ程でも責られる樣に私の身の責道具とも云ふ可き者を悉く貴方に渡しませう、夫ならば好いのでせう』妫『ハイ爾さへ仕て下さらば—』寶『宜しい、幾等責道具を渡しても其道具で責られる樣に心の變る事は有りませんから充分貴女を滿足させます、扨責道具と云つた所で、ハテな何うしたら好いだらう』妫『貴方の身に辛い丈けが好いのです』寶『夫は爾ですとも私の身に辛く無ければ責道具には成りません、サ

ア爾と極つた所で私の身に一番辛いは職務上の秘密ですが、是は貴女にお話申した所が分るまいし、併し是を話して置けば私の命も私の名譽も總て貴女の手の中です』

妙陀が今までの辛抱も唯だ職務上の秘密を聞かんばかり、茲に至りては餘りの事に爽笑まんにも笑顔は出ず『ハイ其樣な事柄なら、夫こそ誠の證據です、職務上の秘密までお打明け成さるのに仇し心が有らうとは思はれませんから』寨『では打明けます、と云つた所で色々有るが』

妙『と仰有るのは其中の一番輕いのをお聞かせ成さるお積りでせう、其樣なお心なら』とて最う聞くに及びませぬとの意を示さんとするに、彼れ大變と驚きて『イエ夫人仲々以て、其樣な水臭い男では有りません、眞實に其中の一番重いのを言ひませう、是は最う他人に知られては大變ですから貴方も其積りで聞いて下さらねば了ません』妙『其代り貴方の心が僞りと分れば誰にでも他言しますよ』寨『無論です夫でこそ責道具ですから其時には屋根の上で吐鳴つても好いです、實はネ』と云ひ掛けて彼れグッと聲を低くし皇族公德公爵と同じく忠隣公爵に關する事件が私の秘密中の大秘密です、貴女は兩公爵の名を知つて居ますか』一は是れ皇室に大關係

ある皇族にして一は武勳赫々と輝ける佛國陸軍の大元帥なり、妙陀此名を知らざらんや。

唯之を知るのみならで所天守雄が決死隊を組織せしも此兩公爵の內命とし守雄が曾て魔ケ淵に臨みし時妙陀の耳に口寄せて、連名帳に記さゞる大將軍の名前を知るは唯だ我と御身のみ、と云ひたる其大將軍は即ち此兩公爵なれば、今寨武が言出さんとする大秘密は即ち鐵假面の秘密なり、妙陀は唯是だけ聞き今まで何事にも驚かざる其胸の慄くを覺えたり。

六十八

眞逆逆へば斯うよと云ふ斷乎たる決心は、幸助の渡せし懐劍と共に深く妙陀の胸に在り何をか驚き何を恐れん、妙陀の心は燃え盡したる灰の如し、冷然と落着きて攪擾すとも復た騷がず。

唯だ寨武がプリンス、コンド及び、プリンス、チウリーン兩公爵の名前を出し、之に繫がる秘密とて鐵假面の事を言出さんとするを見て少しく慄き初めたれど、悟られぬ間に自ら鎭めて復た何氣なき容子に返れり。

妙『ヱ、兩公爵成る程お名前は幾度も聞いて知つて居ます、那の樣な力に繫がる秘密ならば誠の證據かと思はれます』饗武は唯だ此言を天の能へとも思ひ魂既に蕩けし如く『では申ますが實は斯う云ふ次第です、國王路易が若し位を退けば次に國王となるのはアノ兩公爵の中ですから、兩公ともに朝廷の內外は殆ど飛ぶ鳥を落す程の權力が有るのです』と言出す言葉は、鐵假面と何うやら緣の遠きに似たれば妙陀は外の事なるやと氣遣へども猶ほ無言にて打聞くに、彼れは妙陀の滿足氣なる有樣に力を得て『所が斯申す私が國王路易に忠義を盡し、每も國王の樞と爲つて居ますゆゑ、兩公ともに兼て私を邪魔者にし機さへ有れば追拂はふとして居るのです、私も亦兩公の權力を剝がねば王の不爲、續いては私の職務にも關しますゆゑ何うか兩公を退け度いと互に內々で骨を折る所から、終に兩公と私とは言はず語らず畢生の仇敵の樣に憎み合ふ事と成りました、此の一兩年の有樣では、私が兩公を蹴退ねば兩公が私を蹴退ると云ふ程の有樣で私も餘ほど心配致しましたが、何でも之は兩公の落度を見附出す外は無いと其後は私に兩公へ探偵を附けて置ますと、非常な秘密を探り出しました』

此秘密即ち鐵假面の事では無きやと妙陀が氣を揉む暇も無く、彼れ直ちに語を續け『何うでせう兩公が或不平の士官を手懷けて之に謀反を企てさせ樣として居るのです』何うやら愈々鐵假面なるに似たり、饗『勿論謀反の事ですから假令ひ日頃の怨みは無くとも私の職務として充分に探らせねば成りません、之を探るには其士官を捕へ苦めて白狀させるが第一ですが併し證據の上らぬうち捕へても無益ゆゑ、幾人の探偵を派出し其士官の行く先々を見張らせて何でも確な證據を捕へやうと勉めました、士官も仲々の爾る者で例令ば兩公爵と往復した手紙を初め連中の連判狀などは悉く秘密の手箱へ納め隱して仕舞つたと云ふ事で何所に在るか更に分りませぬ、併し何しろ謀反だけは確な事實で既に其士官が諸方の惡徒を語集め十五人の決死隊を組織して今年の春、國王路易を捕へふ者を組織して今年の春、國王路易を捕へ苦めて白狀させるが第一ですが併し證據、斯なれば是だけで證據は充分、此上五人を殘らず生擒ると云ふ積りで、若しや饗武我身が其中の一人なら巴里へ推寄せて來ましたが、最方でも用意して途中で其決死隊にした』と事細に述來る。

『には有らぬかと妙陀は殆ど

ふ程なりしも、又彼れが今までの振舞を考へても去る心の無き事明かなれば、直ちに又安心し平氣の色にて之を聞くのみ『所が私の目的を間違へて、十五人を鑒殺にする氣になり十四人まで殺し盡して唯た一人だけ生殺つたのです』其一人が今仰有つた士官ですかと問度き事山々なれど今問ひては疑はるゝ恐れあり、如かず彼れ自ら問ふに落ず語るに落つるまで待たんにはト、妙陀は又思ひ直して無言なり、寔『殺して仕舞つては何の役にも立ません、私の目的は唯だ兩公爵が之に關係して居ると云ふ證據を擧げ、兩公爵を罪に落すと云ふ丈ですから、生取て白狀させる一方です、併し幸ひに一人だけは生取たから今では其者の顏を包み、決して世間へ知らさずして追々に詮議して居ますが、未だ愈々兩公爵が張本だと云ふ所までは分りませんけれど、次第に分らうかと思ひます。何しろ是が私の身に取て第一の秘密です、今若し私が兩公爵を罪する爲に斯まで骨折つて居ると分れば私が却て罪に落されます、第二には其樣な擄が私の手に在つて徐ろ〳〵調られて居ると分れば兩公爵は直に手を廻し其擄を殺すとか奪ふとかして仕舞ひます、ですから之ばかりは私の命に替ても他言の出來ぬ次第です

が嘘た私の愛の嘘で無い證據として此通り貴女へ打明ました』永々と言終り永々と聞終りしも、何の得る所無し。

鐵假面は何者ぞ、今は孰れの牢獄に入られ居るや少しも突認難けれは妙陀は痛く失望し、唯た今彼が一人だけ捕へしと云ひしとき其名を聞かざりし手拔を悔れど詮方なし、彼が遂に問ふにも語るにも落ざりしは誠に此上なき遺憾なり、殊に彼れ是だけにて早や妙陀を承諾させ終りし者と見てか『サア是で最う初の眞實に少しも疑ひは有ますまい』と云ひ、初の臆病に引替て幾分の大膽を現し來り妙陀の手を取り其腰を抱擁へんとす、茲に至りて妙陀夫れ如何にす可き、幸助の渡したる懷劍か、否々事丸分通り聞盡せし今と爲り、殘る唯一部を懷劍に訴へては折角寶の山に入り手を空しくして歸るなり、何うしても鐵假面の本名と其居所だけ聞かずばならず、妙陀は急がしく思案して突と其身を引き恨しげに彼れを眺めて『私しが世間知ずと思ひ貴方は嘘ばツかり有仰るよ』寔は飛上りて『エ、エ、何と、貴女は猶だ疑ひますか』妙『公爵だの士官だのと尤もらしい事さへ云へば私しが誠にするかと思ひ、根も無い作り話を永々とお拵へ成

さツてサ』寒『是は實に怪しからぬ、明し難き大事を打明け斯まで云ふのに猶夫を作り話と云ふのですか』妙『作り話で無いにもせよ、作り話も同じ事です、縱し夫だけの事を私しの口から云つたとて證據の無い者を誰が誠と思ひませう、唯貴方の一言で其樣な事は無いと言消せば直に消て仕まひますが、捕へ所の無い此話が何の證據に成りませう』寒『では夫人幾等詳しくでも言ますから貴女が捕へ所と思ふ所を、サア一々私しにお問成さい、是まで話し盡した柄は此後は最う詰らぬ事、少しも隱さず返事します、サアお問成さいサア』是までに潛ぎ附けしは實に妙陀の大出來にて想ひしよりも猶旨く行きしと云ふ可し、妙『其樣に仰有るけれど貴方は其虜の名前も云はぬでは有ませんか、何所へ隱して有るか夫も云はぬでは有ませんか、夫が作り話の證據です』寒『エ夫を云へば滿足するのですか』と云ひ掛けしが、彼れ忽ち此二個の問の痛く炙所に當れるに心附きし如く、グツと詰りて色を變へ、妙陀の顏を見上ぐるにぞ茲が命の瀨戸と見て妙陀は眞に必死の想ひ『ソレ御覽なさい、其樣な取留た返事は出來ぬでは有ませんか、ナニ達て聞うとは云ひません、好う御座います、貴方の御心は最う分りました、田舍出の女と思ひ

澤山お戯り遊ばせ』と腸穿る一言を後に殘しツンと瞋りて立去らんとす、此時の妙陀の風情、畫にも筆にも盡された者に非ず、爾なきだに蕩けたる寒武の心緒、今は紊れて絲の如きか、彼れ醉へるが如く、迷へるが如く、周章て妙陀を引留め『コレ夫人、云ひますよ、云ひますよ、捕はれて居る其男は鐵の假面を被せて有ります、其鐵假面の本名は』妙『其鐵假面の本名は』寒『ハイ二通有まして一つは—』

一つは何と云ふなるや、此際疾き瞬間に忽ち室の外に給仕の聲あり『旦那樣、至急に貴方へお目に掛ゝり度いと云ふお客が有ます』とて戸を開きて顏を出せり、寒武は火と怒り『例令ひ國王が逢ひに來ても己が許すまで茲へ通してはアない追返せ、追返せ』叱り附る其聲の猶切れぬに『ナニ國王では無い私しです』と云ひつゝ此の室に入來る不都合千萬なる此客仁、是れ何者にやと見れば、人も有らふに曾て妙陀の顏を見知れる彼の楢尾明なり。

六十九

妙陀は固より楢尾明の顔を知れり、初めは所天守雄が居酒屋にて荒武者相須根と決闘せし時に彼を見、後にはペロームの鎭臺にて彼れが鐵假面の囚人を撿むる所を偷見たり、彼れの怜悧き面魂は幾年經るとも妙陀の眼に忘る可くも非ず、去れば妙陀は今此所に彼れの現はれ來りしを見、忽ち九天の高きより九地の底に蹴落されたる想ひを爲し、今こそと胸に隱せる懷劍を再び探りたれど、妙陀の心には猶ほ纔なる賴みあり。我身は楢尾の顔を知るも楢尾は我身の顔を知れるや否や、一たびは見たりとするも其時は我身猶ほ男姿に寞し居たり、其時の我身は今の我身に非ず、殊に場合が場合だけ彼れの眼は唯だ決闘にのみ注ぎて我が方へは注がざりき、彼れ眼力鋭くとも又記憶强しとも眞逆に今まで覺え居て看破る事は無からんかと、瞬潑きする程の短き間に妙陀は思ひ廻したれば懷劍に手は當てながらも猶之を拔き出さず、唯だ顏色を頽さじと必死の想ひにて耐ゆるのみ、去れど其顏色は妙陀が自ら思ふほど平かならず、紅を指したる頰までも青くなり、眼も唯だ開けるのみにて瞬潑を忘れしかと思はるゝ程なれば、其樣早くも寞武の目に附きしか彼れ楢尾を叱り懲さんとして未だ叱らず、先づ氣遣はしげに妙陀を見て、

『驚くに及びません、ナニ是は私の親友です』と其肩を撫掛るに、楢尾は妙陀の賴みに似ず充分眼に妙陀の顏を見知れる如く、口の中にて『ア、是だ〳〵』と打呟き、更に何の違慮も何の容赦も無く、唯だ荒獅子の其獲物に飛附く如く、突然りに妙陀に飛附き、懷劍持てる其細き手を捻上げたり。

妙陀よりも寞武は且怒り且驚き『コレ楢尾、何をする、己の許しも得ず、此室へ這入つてさへ奇怪なるに、其亂暴は氣が違つたのか、今日限り免職だぞ』と云ひ、逞しき拳固を霰の如く振亂し所嫌はず打据るに、楢尾は打たれながらも聲高く『貴方こそ氣が違ひました、此女を誰と思ひます、妙陀です、妙陀です、有藻守雄の妻妙陀と幾度も申上げたが此女です、何うして生殘つたか知らぬけれど、生殘つて此巴里へ忍び來り、貴方を欺しに掛つて居るとは餘り不思議で私さへも誠とは思はれぬ程ですけれど、最う既に種々の證據を調上げて少しも疑ひが有りません』と言葉世話しく言ふを聞き、寞武は唯だ夢中に夢を見る心地なれば、斯る際にも兼て秘密に慣れし身なれば直ちに立ちて入口の戸を內より鎖し『何だ、此夫人を守雄の妻妙陀だと、

其樣な筈が有る者か、由緒正しき平井夫人だ、何よりも此夫人の辯解を聞けば分る、コレ夫人』と云ひながら、楢尾の手より妫陀が身を剝り取り、一日見て又驚き『ヤ、ヤ、ヤ、貴樣が餘り酷い事をする者だから、是れ氣絶して仕舞つたが』全く此言葉に違はず、妫陀は餘り心の激動に堪え兼てか、何時の間にやら絶息して今は死人も同樣なり、寒武は怒れる中にも殆ど涙を流す程にて『コレ夫人、平井夫人』と呼生んとし、妫陀の頰に初めての接吻を移さんとするに、楢尾は之を遮りて『ナニ女の氣絶するのは有勝です、今に正氣に返りますから驚く事は有りません、此間に御合點の行く樣に能く申上げませう』

寒『申上ぐるとて何を申上げる、貴樣の樣な馬鹿者に聞く事は無い、夫人を玆へ置きサア歸れ、歸れ、再び己と夫人との間に這入るな、少しの手柄を立やうと思つて餘計な事まで疑つて、馬鹿め、妫陀が魔ケ淵で死んだ事は既に確定の事實で無いか』楢尾は火の如き熱心にて『死骸が上らぬから確定の事實では有りまん、夫だから今までも私は彼の連中で生殘つた者が有ると申上げたでは有りませんか』寒『夫は有つても此夫人は爾で無い、第一妫陀とか云ふ者が是ほどの

美人とは聞かぬ』楢『情無い事を仰有る、私が既に此顏を見て知つて居るから致方が有りません、夫に先日黑頭巾を被つた男が貴方の馬車を引留て、國家の大事を申上げると云つた事が有りませう、彼れも既に不思議な事で魔ケ淵から生殘つた一人です、貴方が採用せぬ爲に彼れ私へ告げて來ました、彼れの言葉に由り此妫陀なども分つたので、一々調べて見ますのに寸分の違ひも有りません』と樣々に言立つれど、色に狂ひし寒武の耳には少しも入らず『貴樣は、金に目が昏て根も無い事まで言立る乞食風情の言葉を信じ、立派な淑女を疑つて夫で探偵が上手だと誇るのか』楢尾は殆だ言ひ勝つ可き道無きかと困ずる體なりしが、彼れ忽ち一思案浮びし如く『論より證據です、此女が貴方の口から鐵假面の本名と居所を聞出さうと仕たのでせう』と叫ぶ、炎所を剔る唯一言は寒武の胸へ毒矢の如くに膺へたり。

彼れ呆るゝ如く口を開き『ウー』と云ひて塞げも得ず『オ、聞いた、聞いた、其樣な事を聞いた』楢尾は此有樣に力を得て『サア、妫陀で無くて誰が其樣な事を問ひませう、渠の目的は唯だ其の一つに在るのです』寒武は宛も手負の虎に似たり、背後の椅子に沈み込み、太き息を

切々と突くのみにて返す言葉も出ざりしが、暫くにして彼れ思ひ定めし如く奮然と立上り『構はぬ、構はぬ、假令ひ妫陀でも構はぬ唯一人生殘つて、此世に便が無い者だから、若しや我が所夫が生て居るのでは無いかと、樣々の事をして色々と聞出し終に鐵假面の事まで知り、鐵假面を我が所夫かと思ふから夫で此通り仕て居るのだ、感心な烈女ぢや無いか、其心根を察して見れば可哀相だ』

人の心を察せし事なき無慈悲非道の寥武も慾ひには心を察する事を知りしにや、彼れ猶ほ斷然たる調子にて『女の手一つで何程の事をする者か、妫陀ならば猶更だ、己は氣永く其心を慰めて、己の恩義に感じさせ、天下晴れての身に救ひ上げて遣る』楯尾は此熱心に打驚き『實に貴方にも似合ぬ事を仰有る、此女唯だ一人なら成る程驚くにも足りませぬ、夫こそ貴方の隨意ですが、生殘つたは此女ばかりで無く、波蘭人幸助と云ふ者も一緒で、既に此女の伴をして此下まで來て居る所を先刻捕縛して牢へ下しました』『何だと』楯『イヤ僞りでは有りません、其樣な譯ですもの何うして女一人と油斷が出來ませう、此女を許して置けば貴方の命が有りませ

ん、此女の決心では貴方に救はれて生るよりも、貴方を殺して死ぬるのを本望と思ひませう、左も無くば何が爲に胸に此通り懷劍を隱して居ます、私が來た時にも既に懷劍へ手を掛けました、夫だから私は矢庭に飛附いて其手首を捻上げたのです』と云ひつゝ妫陀の衣囊より玉散る如き氷の刃を取出し寥武の前に差附くるに、流石の彼も之には夢の覺し如くなり。

七十

如何に執心の寥武たりとも、我が命を斷たんとする懷劍の現はるゝを見ては迷ひの夢の覺めざらんや、彼れ唯だ餘りの事に心も容易に定まらず懷劍と妫陀の顏を見較ぶるのみなれば、楯尾は益々附け入りて其毒々しき舌を弄し『此女には今申す幸助の外に最も恐ろしい後推しが附いて居ます』寥武は獨言を云ふ如くに『後推しとは例の織部夫人だらう』楯『夫人も其一人ですが夫人より猶ほ恐る可きは夫人の侍女を勤めて居た梅眞と云ふ女です、先日夫と無く朝廷から退けた駙者安東と云ふ物の妻で、女でこそあれ男より恐る可き者です、是等の奴等が皆此女に

力を合せ熱心に秘密運動をして居ますから許して置けば何の様な事をするかも知れません、彼等の力は實に驚く可き程の有様、殊に梅眞と云ふ女は毒藥學者エキジリの一の弟子ゆゑ、永くは此世に置かれぬ惡女です、今迄とても捕へ度いと思ふ事は幾度も有りましたが、唯だ其機を得ずして延々に仕て置きました、今度こそは此妙陀諸共に種々の證據が有りますから彼等を一網に召取ます、既に先日相須根がバスチルを拔出したのも、此妙陀を初めとし梅眞及び織部夫人等のする業です、事に由ると彼の相須根まで今は此者等に心を寄せ、梅眞か織部夫人の家に潜んで居るかと思はれます』と輪に輪を掛けて述立てる。

寒武の顏は一句々々に益々眞面目の色を加へ、今は其眉の間に深き八字を現して『フム其樣な事柄が證據になるか、矢張り夫も黑い頭巾を被た乞食の言立では無いか』『ハイ乞食の言立も幾分か雜つては居りますが、大抵は夫を手掛りに私の探り上げた事實です』『寒』證據は、證據は』『ハイ證據の最も手近いのは、相須根の被つて居た鐵の假面が此平井夫人と自稱する妙陀の家から出たので分ります、私は先刻此女が貴方の召に應じ幸助を供に連れて其住居を出る

と直樣、留守宅へ入込んで驚く下女を叱り鎖め家搜しを致しましたが、押入から一番形の鐵假面が出て來ました、相須根に被せて置いた者の外に鐵假面は紛失しません、之でも猶ほお疑ひが有りますか』是まで聞きて勿論疑ふ可き所なけれど、寒武は猶ほ愛の夢を破られたる其腹立しきに堪えざる如く最と不興の體にて『貴樣は誰の命を受けて其樣な家搜しなど行ふた』『ハイ貴方は呆るゝ如く寒武の顏を見て『勿論貴方の命令です、決死隊の探偵方一切を私へお任せに成つた貴方の命令は未だお取消しには成りますまい、今日限り取消すと仰有れば格別ですが、今までの私の所行は皆な貴方の意を奉じて居るのです、誰の命令などゝ今更お問成さる事が有りますか』寒武が正氣に返ると見るに連れ猶尾の語氣は益々强し、彼れ寒武の返事せぬ間に猶ほ說進み。

『貴方は初めから決死隊を探偵した大事の目的を忘れましたか、秘密の手箱を取出し其連判狀を初めとし、公德、忠臨兩公爵と有藻守雄の間に往復した其手紙など手に入れて、兩公爵の罪跡を證據立てねば佛國の朝廷が危ひと仰有つたでは有りませんか、兩公爵を罪に落さねば貴方

自身が朝廷から追出されるかも知れぬと氣遣ひ、夫が爲に其詮議を私へ任したでは有りませんか、アレ程に手を盡しても何所に其の秘密の手箱を隱して有るか分らぬ爲め、貴方も吾々も氣を揉んで居るでは有ませんか、秘密の手箱を預つて居たのは誰です即ち此妖陀でせう、今でも此女を詮議すれば必ず手箱の在所は分り、貴方の目的も達しませう、此女に鐵假面を被せ徐ろ徐ろと窘めれば、女では有り充分何も彼も知ては居るし箱の有所を白狀するのみならず、守雄が兩公爵に命を受た事まで白狀しませう、私の考へでは此女魔が淵で生返り、第一にブルツセル府へ引返し其手箱を取出して更に此地へ來たのだらうと思ひます、既に手箱を隱して有るとの疑ひ有るブルツセルの或寺の境内で此女を見たと云ふ報告まで私の手へは這入つて居ます、夫ですから今の所で彼の手箱は必ず此女と共に巴里へ來て巴里の何所かに隱れて居ます、夫を知るのは唯だ此女一人ですのに、日頃堅固な貴方にも似ず、此女の綺緻に迷ひ私の言ふ事が分らぬとは魔が指したとも云ふ者か、實に是ほど情無い事は有ません、貴方は最う彼の秘密の手箱は要ませんか、此女を詮議するに及びませんか、夫ほどならば早速に鐵假面をも放免爲さい、

此事件は今日限り斷然捨てお仕まい成さい、爾して貴方は兩公爵の一呼一吸に徽懼々々するが好いでせう』と言葉を窮めて言爭へり。

若し妖陀にして是等の言立を聞きたりせば、セントヨハネの寺に隱せし彼の手箱は猶ほ黑頭巾の手にも入らず、孰れかに無難なるを知り、扨は彼が掘去りしと見しも掘去りしには有らざりしかと大に怪む可き所なるも、妖陀は猶ほ正體なく死人の如くに横はるのみ、宴武は聞來りて心の中に幾度か愛と怒りと鬱ふ如くなりしが終に怒りの一念勝ち、日頃の凄じき顏に復りて突と立上り『好し、此女を然る可く處分せよ、己も能く考へて置く』と云ひ先に鎖せし戸を推開き荒々しく出去りたり。

後に楢尾は死骸の如き妖陀を抱上げ之を我が馬車に載せ是れも孰れへか立去りしが、是より幾時の後、妖陀が我に返りし時は牢と覺しき薄暗き室の中に其身が寢かされ居るを見、猶ほ四邊を見廻せば、室の中に我身と同じく推込られ居る一人あり、幸助かと見れば幸助ならで、彼の恐ろしき黑頭巾の怪物なりしとぞ。

七十一

怪物黒頭巾と同じ室に籠込られ初て我に復りたる彼の妙陀は如何にせしぞ、忠僕幸助まで楢尾明の手に捕はれたれば、今は妙陀を救ふ者なく鐵假面とても其消息知るに由なし、實に彼の楢尾明の奸智は纔に餘命を繋ぎたる決死隊の殘黨を全く滅ぼし盡せしに似たり。

去れど猶ほ幸にして賢女梅眞あり、之に從ふ荒武者相須根あり、梅眞の所夫安東あり慓悍なること乳虎の如き織部夫人あり、是等の人々今如何にせしぞ妙陀の苦みを知らざるか。

夜は早や十時を過ぎ轉ど淋しき町盡れに人通り全く絶え殊に雨さへそぼ降りて蕭々の風は雲を拂はず、暗くして且靜なること宛ながら死人の境かと疑はる此巷に添ふ一構は知らず是れ誰の邸ぞ、塀の内に老茂りたる庭木は傘の如く往來に差掛り、雨宿する人の頭を撫づ、宵の程より茲に潜める二人の男あり、暗に姿は定かならねど密々と細語く聲は聞ゆ、甲『何うだヱ、此木へ飛附き塀を越えて内の樣子を伺へば茲で斯して氣遣ひ乍ら待つよりは增だらうが』乙『夫は爾

だが生憎二人とも身が重くて猿の眞似が出來ぬから仕方が無い、此枝に取附ば登らぬ内に折れて仕舞ふ』甲『だけれども何とか仕て見ねば此儘朝まで待毫けに成るかも知れぬ』乙『ナニ大丈夫其樣な事は決して無い、僕が通傳から通傳を求め内々に探り上げ、幸助と妙陀とが此屋敷の内の假牢へ閉込められ詮議せられて居る事は最う確だ』甲『夫は確でも今夜二人がバスチルへ送られるか遂られぬか夫は分らぬ』乙『ナニ夫は織部夫人の手で聞出した所だから確だよ』甲『だつて未だ馬車を用意をする音も聞えぬぢや無いか』乙『此廣い屋敷だもの馬車の用意を仕て居たとて聞える者か、夫に先でも秘密に秘密を守て居るから夜が更ければ送り出さぬよ』甲『夫は爾だ、併し其方が結句幸ひだぜ秘密を專一とする丈に、從つて護衛も無からうし、尤も君と僕との二人で掛れば護衛の五人や七人は譯も無いが、併し聲など立られると面倒だからなア』乙『爾サ、聲を立れば直に警官が聞附けて四方から駆附けるよ、楢尾のする仕事だから假令ひ秘密でも其位の用心は仕て有るよ』甲『けれども彼奴を捕れば愉快だなア、僕は最う彼奴に何れ程の怨みが有るか知れぬ』乙『お互にサ、我黨の者で一人も彼奴を怨まぬ者は無い、とは云へ餘り愉快と思

ひ彼奴を殺しては仕方が無いぜ』甲『夫は最う萬々承知だ、僕の役目は唯だ彼れ一人を生捕れば好いのだもの一人と一人なら手の内に丸めるより易い事、聲も出させず殺しもせず徐と捕へて行くは譯も無い』乙『僕とても其通りサ今夜の仕事は全體二人の腕にはおかつたるいよ、唯だ馬車の中に居る妫陀と幸助とを引浚へて去る丈だもの、二人とも馬車の戸を開きさへすれば我黨に救はれる事と悟り其儘從て來る迄の事だ』甲『眞逆夫ほどにも行くまい、必ず手足を縛られて居るのだから』乙『爾だ事に出ると其上に鐵假面まで被されて居るかも知れぬぜ』甲『夫は何うかも分らぬ』

語ふうちに乙は忽ち聞耳立て『ヤ、聞給へ相須根君、何だか馬車の音がする樣だぜ』乙『爾だ爾だ、確に楢尾が妫陀幸助を馬車に乘せ屋敷から出て來るのだ、サ安東君、君は向ふへ廻り給へ』と云ふより早く右と左へ分れしが、此兩人は讀者の既に察したる如く荒武者相須根と梅眞の所夫安東と知られたる勇士にして、織部夫人と梅眞との差圖に從ひ楢尾の屋敷を見張り居しなり。

兩人が門の左右へ立分るゝや、間も無く内より輾り出る一輛の馬車は、行く手を照す角燈を點じ有れど背後に乘れる主人を照さず、果して楢尾明なるや、又妫陀と幸助なるや知り難きも、外に護衛の無き丈は明かなれば相須根は猶豫せず、横合より突と出て靜に馬車の臺を引留むるに二頭の馬も引く能はず、メリ〳〵と音しながら其所に留りたり、乘れる主人は引留られしとも氣遣かず二度三度馬に鞭ちしが馬は唯だ揉搔くのみにて唯の一寸も進まばこそ、餘りの不思議に堪兼てか馭者臺より横に首を出し初て何者か金剛力にて我が馬車に搦むを見、大喝一聲、『誰だ』と呼ぶ聲は確に楢尾なれば、相須根は得たりと喜び、中なる妫陀幸助にも聞えよがしに遠慮なき聲を出し『楢尾君驚き給ふな、永らく君にお世話を掛た男爵相須根だよ』楢尾はハツと驚き『何だ惡人』と我知らず怒鳴り出すに、相須根は少しも騷がず『今夜此馬車の中に居る二人をパスチルへ入れぬ内に貰ひ度いと宵から茲に待て居た』と云ひつゝ馭者臺に飛上り、唯一握に楢尾の首筋を掴み手も無く下に引降せしも、彼れも仲々爾る者なれば猶ほ口を塞がれぬ間に呼子の笛をピー〳〵と吹鳴らせり。

去れど相須根は之にも構はず間も無く楢尾を手込にして暗に擬れて、は、後より安東は馬車の窓に首を突入れ中の様子を眺むるに、暗き中にも人影あるにぞ『幸助君か』と急ぎ問ふに『爾だ僕だよ』と答ふる聲固より彼れに相違無ければ、直ちに救ひ出さんとせしが、此時早や呼子を聞き八方より馳集る巡査の足音物凄く聞えたれば、彼れ忽ち思案を變へ自ら馭者臺に飛移り鞭を取りて馬の腰を痛く打つに馬は主人の替りしとも心附かぬか、巡査の中を潜り〳〵是も孰れへか走去りて後には唯だ巡査と巡査が『ヱ、今のは楢尾長官か爾だらう、何故呼子を吹いたのか馬が留らぬから困却して我々を呼んだのだらう自分で手綱を取つた事は餘り無いから、併し最うアノ通り行つて仕舞つたから仕方が無い』と顔見合せて評議する聲を聞くのみ。

七十二

安東は馬車の儘にて巧に巡査の群を切抜け、飽く迄も楢尾と思はせんが爲め馬車をバスチルの方に向けて奔らせしも幾丁をか進みし末誰一人も後より追來らぬを見認めたれば人無き巷に

馬車を入れ、馭者臺の燈を取りて馬車の中を照し見るに、幸助は猶ほ鐵假面を被されしに非ず唯だ手錠足錠を卸されたる儘にして、安東の顏を見るよりも『眞に能く救ふて呉れた今夜の君の働きには感心した』と嬉し涙を翻さぬばかりに禮を云ふにぞ、安東は直ちに手錠足錠を弛め遣るに、幸助は身も輕々と馬車より飛降り『僕はナーニ、牢へ入られても平氣だが唯だ妫陀樣が心配だ、妫陀樣は何所に居る定めし君方の保護で無難に逃れただらうネ』と逆さに問はれて安東は打驚き。

『何だ妫陀樣は君と一緒で無かッたのか、僕は又此馬車に君と兩人が載られて居る事と思ひ玆まで來たのだが』幸『ナニ僕と一緒な者か』安『ヤ、ヤ、夫は大變だ、こは是から直に楢尾の屋敷へ荒れ込み力盡で妫陀樣を奪ひ出す』と早や引返さん劍幕に幸助は合點の行かぬ如く、先づ安東を引留めて『待ち給へ、君の云ふ事は更に分らぬ全體妫陀樣は何うしたのだ、僕と同樣に捕はれたのか』安『無論の事サ夫を君が知らぬのか』幸『多分其樣な事では無いかと心配は仕て居たけれど、少しも知らぬ、僕は妫陀樣の伴を仕てカヘ、ド、ベル（妫陀の捕はれし料理店）の店先に居

る所を、不意に捕縛されたので、其時妙陀様は二階に居たゆゑ何うこられたか少しも分らず』

安『イヤ君に續いて妙陀様は二階の一室で捕はれた』幸助は今更の如くに悔しがり『ヱ、此様な殘念な事は無い、爾して今妙陀様の捕はれて居る所は』安『サア僕などは多分君と共に楢尾の邸と思ッたが』幸『イヤ爾で無い、爾で無い、成る程楢尾の邸内かも知らぬけれど僕には一度も顔を見せぬ、楢尾がアノ通りの惡人ゆゑ、注意して僕と引分て置たのだらう、爾と知たら何とか工風も有つたゞらうに、或は妙陀様だけは、何うかして逃れて居る事かと思ひ、ヱー殘念だ——殘念だ』安『夫も今では仕方が無い、僕の云ふ通り是から楢尾の邸へ引返し、妙陀様を救ひ出す外は有るまひ』成る程肝腎の妙陀を救ひ得ずしては二人の遺憾如何ほどならん。

安東は之を我が失策と見て氣も燥立ち『サア行ふ』と迫し立るに幸助は考へながら『イヤ、君は楢尾の屋敷の内を知ぬから、行きさへすれば助かる様に思ふけれど、家の中は外からの見掛に似ず仲々嚴重に出來て居るから、今行けば却て事を過る元、夫に妙陀様がアノ家に居るか居無いか夫も疑問、縱んば居るとした所で、何所の室に居るのか分らず、先程の容子では相須

根が楢尾を手込に仕て立去た様だから、其後を追て行き楢尾を窘めて詮議を遂げ其上で妙陀様を救ひ出しに掛るのが却て近道だらうと思うが、夫とも君に充分な見込が有るなら』と道理を推して說出すに、安東は實にもと同意し『楢尾奴は織部夫人の屋敷へ連て行かれたから、是より直に此馬車で夫人の屋敷へ驅着けやう』

幸『イヤ〳〵、此馬車は却て足の附く元だから玆で放して仕まはねば了けぬ、馬の頭を楢尾の邸の方へ向け鞭を當てれば定めし此邊の道には慣れて居やうから空馬車を引き元の馬屋まで歸つて行く、爾すれば急に樣子が分らぬから玆に暫時の猶豫が有う、最う事が斯う荒立ば何うせ吾々は破れかぶれで、明日にも政府中の大騷ぎと爲り嚴重に探偵せられ何の樣な目に逢ふかも知れぬが、兎にも角にも未だ仲々の大役を控えて居から成るたけ血氣を推鎭めて政府でも探偵の出來ぬ樣にせねば成らぬ』安『成る程夫は無論の事だ、幸に楢尾が相須根に攫はれた事までも吾々の外には誰も知らず明日までは政府も氣が附かぬから大丈夫だ、サア遣う』と云ふよりも馬の首を背後に引向け力を込めて其腰を打めすに、馬は已ぶし力を指し空車の音も高く唯一

散に走去りたれば、二人の勇士は頬笑みて早くも其姿を隠せしが、是ぞ鐵假面の局面一變して歴史に名高き佛國毒藥審問事件の端を開き、猶ほ勇士烈女の身の上に幾多の辛苦を重ねしむる元とはなりぬ、其次第は妸陀及び鐵假面の行衛と共に順を追ひて說行くべし。

七十三

時の警視次官として飛ぶ鳥を落すの勢ひある楢尾明を運び去るとは大膽とも不敵とも言樣の無き振舞なれど、國王路易をさへ擒にせんと計みたる人々と云ひ殊には亂世の頃なれば怪しむにも足らざる可し、夫に又妸陀幸助とともに捕はれ、鐵假面救出しの目的も殆ど絶えなんとする所に押寄せたれば、是より外に策なしと云ひ破れかぶれの了見にて斯る事を仕出來したるなり、唯だ肝腎の妸陀を救ひ洩らし其行先さへ知り得ざるは此上も無き遺憾といふ可し。

此夜の二時頃、ソイソン邸と知られたる織部夫人の別莊に集へるは幸助、安東、相須根の三人なり、彼等は明日にも政府より捕縛せらるゝ身を以て危き事をも打忘れしか、煖爐の前に打

列なり、平氣なる顏色にて何事をか語れり、是れより一室隔てしは織部夫人の室にして、其眞中に慘らしく手足を縛られ動きも得せず椅子の上に据らるゝ小男あり則ち是楢尾明なり、其右と左より罪人を調る如く之に對へる二人の女は是梅眞と織部夫人なるが、夫人は怒れる聲を押鎭め『コレ楢尾、今更私を恨む事は無い、白寢臺で私の命を失ふとした事を思へば、是くらゐの仇打は當り前だらう、隱したとて了無いよ、アノ事は最う相須根も證人だ、此後若し表向きに宴武と爭ふ樣にでも成れば私は白寢臺の事を彼れの罪に數へ天下の人に訴へる、其積りで證據も證人も揃へて有る』楢尾は一言の返事も無く唯だ悔しげに其齒をガツ〳〵と嚙鳴らすのみ、次には梅眞が進み出で、少し柔かなる言葉にて『コレ楢尾さん、今は何も貴方の罪を責るのでは無い、唯だ鐵假面の本名と所在、夫に妸陀の居所を聞く丈けの事、サア妸陀を何處へ隱して有ります、夫から先へお言ひ成さい、サア〳〵、大牢獄には吾々の同志が有つて時々通信が有るけれど、妸陀と思ふ女の囚人は未だ送れて來ぬとの事、シテ見ば貴方の邸の穴倉ですか』。

楢尾も見掛に似ぬ强情の男なり、彼れ梅眞を怒らせんと思ひしか、己れの怒りを押鎭めて怜

悄しき顏に笑を浮め『最う此通り捕はれた上は何うでも處分を受ませう、今より未練に命を惜み大事の秘密を明すでも有りますまい』梅『ナニ貴方を處分する積りでは無く秘密を聞いて其儘許して遣るのです、ハイ夜の明けぬ中に密と屋敷まで送つて上げます』檜『其手には乘りません よ、私を放せば直に警察の力で以て、貴女を初め次の間に居る貴女の御亭主まで捕縛します、貴方も夫を知つて居るから決して私を許して呉れる筈は有りません』梅眞は平氣にて『ナアニ、貴方を此儘留て置くこそ却つて吾々の迷惑です、留て置けば明朝に成り、貴方の行衛が分らぬ爲め直に婁武も驚き警視廳も騷ぎ出します、爾して草を分ける程の探偵でもせられては我々一同身の上が危いから貴方を此儘に返しますよ、返した所で貴方も自分の面目に關するから、眞逆に己は女風情の手に捕へられ國家の秘密を多舌つて仕舞つたなどと他人に言ふ氣遣ひは有りません、夫だから吾々は貴方を放免するのが得策です、若し又放した後で貴方が警察の力を以て吾々を窘めに掛る樣なら、其時こそ吾々は充分に貴方と鬬ひ貴方に後悔させる道を知つて居ます』檜『とは又何うして』梅『夫は譯も無い事です、貴方へ一通の手紙を送り其中へ私の製する毒

藥を封じて置けば、貴方は封を切つて臭氣を嗅いだ丈けで頓死します』と通例の話の如く最と落着きて云ふ。

此恐ろしき言葉には、流石の檜尾も顏色を失ひたれど彼れ猶ほ平氣の色を粧ひ『ナニ構ひません よ、兎に角貴女は今御自分で云ふ通り私を明日迄茲へ留置くは不利益と知つて居ます、夜の明けぬうちに放免するに極つて居ます、爾う放免と極つて居るなら私は何事も言ひます まい、國家の秘密を告げ知らせて放免せられるも、夫を告げずに餘儀無く放免せられるも、の味に變りは有りません、私は無言つて貴女方が餘儀なく放免する時刻まで待ちませう』梅『ヤ、私の問に返事せずとも時刻さへ來れば放免せられると思ふのですか、其樣な事が有り者か、何うせ私共も最う貴方を捕へる柄は破れかぶれです、貴女が有體に白狀すれば放して上げますし、白狀せねば貴方を殺して、政府から探偵の來ぬうちに此巴里から逃去る丈けです、吾々はブルセル府と云ふ安全な都の有るを知つて居ますから直にブルセル府へ逃込みます、ですから貴方も强情張つて恐ろしい目に逢ふより白狀して何氣なく返されるがお德でせうサア何

うです』楢尾は暫く考へて『白狀すれば直に返して呉れますか』梅『イヤ直に歸しては貴方の云ふ事が嘘か誠か分りませんから、二時間ほど貴方を留置き其中に次の間の人々が妙陀を救ふて來るのです、其上で歸して上げます』楢尾は再び考へしが『イヤ、何う考へても白狀せぬ方が私の利益です、此儘殺されゝば少しも殘念で有りません』梅『とは又何う云ふ譯で』楢『私より外に誰も妙陀の居所を知つた者は無く婆武さへ未だ知りませんから、私が死んで仕まへば誰も妙陀に食物を能へる者が有りません妙陀は暗室の中で饑死します、爾すれば丁度私が妙陀と情死する樣な者です、木石と云はれる婆武さへ迷ふ程のアノ美人と情死すれば別に恨みでも有りません、アハヽ、爾では有りませんか』と聲を放つて打笑へり。

烏賊は最後に墨を吹き惡人は最後まで毒言を蓄へて敵の肝を挫ぐと聞きしが、今楢尾の一言の如きは眞に最後の毒言と云ふ可きか、楢尾が死ねば妙陀が暗室に饑死するとは是れ何等の毒々しき言葉なるぞ流石の梅眞も之には驚き、思はずゾッと反返るに、織部夫人は腹立しさに堪へぬ如く『構はぬから梅眞此楢尾を殺してお仕舞い、兼ての毒藥で殺してお仕舞い』と打叫ぶ、

梅眞は爾も得せず、唯だ賤みの意を眼に込め彼れの面を睨め詰めるのみなるに、彼れは猶ほ語を繼け『斯云ふ中にも妙陀は定めし身の置所も無い程に當惑して居るでせう鬼の樣な醜い面の男と一緒の暗室に入られて居て、其男には私が充分に妙陀を窘めよと言附けて有りますから、今頃は其男に嘗られたり抱附かれたり慘々な目に逢て居ませう、夫を思ふとア、〳〵餘り好い氣持は仕ませんよ』と益々言募る毒語には梅眞も堪へ兼しか『本統に生して置かれぬ奴です』と云ふより早く衣嚢を探り小き一瓶を取出し、顏を背むけて彼の鼻に指附くるに、毒藥の効目覿ろしく彼れグーともスーとも云はず頓死して椅子より落たり。

嗚呼梅眞は日頃の思慮に似も遣らず今彼を殺すとは妙陀が事を忘れたるか、彼れの毒語は一々事實にして妙陀は全く暗室の中に在りて怪物黑頭巾に苦められつゝ有るに、梅眞は最早や之を救ふに及ばずと思ふなるか。

七十四

楢尾の頓死せし樣を見ては、兼て彼れを憎みたる織部夫人も恐ろしさに堪へざるか『アレー』と一聲高く叫びて逃出さんとする如く壁の方に薄寄りたり、梅眞女も今まで毒藥の學問には身を委ね人の爲に製したりとは云へ、自ら手を下して人を殺すは初ての事なれば、顏色を土より青〳〵しブル〳〵と身を震せ深き息を吐きながら楢尾の死骸を眺むるのみ、驚き騷ぐ織部夫人を制せんとも得せず、此時次の室に控へたる三人のうち幸助は夫人の聲に驚きたる如く、合の戸を開きて入來り『何事です、何事です』と云ひながら四邊を見て『ヤ、ヤ、此の楢尾は何うしました』と問ふ、梅眞は漸くに胸を撫で『何を問ふても返事せぬから毒藥で殺しました』此返事には幸助も悸つとせしが彼早くも氣を取直し『今殺して何うします、妸陀樣の居所が分りましたか』梅『イヽヱ』幸『夫が分らぬに彼奴を殺して貴方は何うする積です』と責るが如く鋭く問はれて、梅眞は初めて我に復りしが半ば其顏色を整へて『イヤ、私は初から此楢尾を毒藥の試驗にする積でした、此通り殺して置て又生返らせる事が出來れば愈々鐵假面の居所が分かつたとき直に救ひ出す事が出來ますから』幸『イヤ其お積りは分つて居ますが今は試驗など仕て居ら

れる場合では有ますまい、斯云ふ内にも妸陀樣が何の樣な目に逢つて居るかと思へは私は氣が氣で有ません、楢尾が旨く生返れば好いとして若し生返らねば何うします、又生返ると仕た所で夫まで妸陀樣を苦ませて置くと云ふのですか』

梅『イヱ爾では有ません、妸陀さんの居る所は大抵見當が附きました、此の楢尾の言葉で寥武も誰も知らぬ所へ隱して有ると云ひ、又私がお前の屋敷の穴倉では無いかと問ふたとき、楢尾は急に私へ抵抗する色を現はし何事も言はぬ事に成りました、是等の樣子で察する時は、妸陀さんの居る所は必ず彼の屋敷の中で穴倉の樣な所だらうと思はれます、私は爾見て取たから毒藥を試したのです、貴方は幾等か彼れが屋敷の案内を知て居ませうから夜の明けぬうち安東、相須根の兩人と共に彼の屋敷へ踏込で、妸陀さんをお救ひ成さい、幾等嚴重と云つた所がバスチルとは違ひ、高が別莊の事ですから貴方等三人の力で何うでも成ませう、夫でも猶ほ分らぬならば再び楢尾を生返らせ詮議を仕直す迄の事です、實に楢尾と云ふ奴は底の知れぬ頑物で、妸陀さんを人質に取て居る强味が有るから容易の事では白狀しません、何でも彼れの荒肝を挫

き爾して置て詮議する外は無いと思つたから詮方なく私は毒藥を用ひたのです、此上生返らせて再び詮議し、白狀せねば今度こそ殺して仕まふぞと云へば幾等彼れでも最う强情は張れません、必ず降參して白狀します』と初て本心を打明けるに、是には幸助も感心し『成るほど能く分りました、斯する中にも時刻が移る、私は直に是から安東、相須根の兩人と共に彼の屋敷へ驅附けます、如何にも貴女の推量通り妙陀樣の居る所は彼れの屋敷で事に由ると私の捕はれて居た室續きかも知れません』『梅』多分其樣な事でせう』『幸』大抵の案内は私が知て居ますからドレ直に行つて來ますとて幸助は奮つて起ち、其儘次の室なる安東と相須根とに諭るに、二人とも危き仕事と聞きては一歩も退く事を知らぬ勇士なれば一言の苦情も無く直ちに玆を立出んとするに、此時梅眞は何事をか思ひ出せし如く、幸助の後を追ひて出來り『ですが貴方がたは容易に彼れの屋敷に入込まれると思ひますか』と樣子ありげに問掛けたり。

相須根は腕を撫でゝナニ其御心配には及びません、表門を叩き破つても押入ります』『梅』其樣に荒立るより成る可くは繩梯子で塀を越すが好からうと思ひます、夫が若し出來ぬと成らば、

初の通り幸助さんを繩に縛り、殘る二人がバスチルの番人に化け、楢尾の指圖に從ひ囚人を連歸つたと云ふ樣に見せ掛け、今に楢尾が歸つて來るからと云ひて屋敷の人々を欺き、シテ又妙陀嬢を連出すにも矢張りバスチルへ連て行くのだと云へば却て事が穩かに運ぶかと思ひますが』とて我が所夫安東と幸助との顏を眺めながら云ふに安東は頷きて『ア、爾する樣なら彼れの馬車を追返さずに其儘置けば好つたのに』と云ふに幸助は『ナニ馬車は無くとも其計略は行はれるよ、第一君方が馬車へ暴行を加へ楢尾を擄にした事は屋敷の者も誰も知らぬから何とでも言くるめる、評議は道々の事として直に行かう』斯く云ひて三人は己れの家にでも歸るが如く最と嬉しげに出行きたり。

後に梅眞は妙陀救ひ出しの外に猶ほ楢尾が果して蘇生るや否、我が製したる毒藥の果して師匠ヱキジリの毒藥ほど利目あるや否との心配も有ればにや、晴れ遣らぬ顏附きにて次の間に歸り入らんとするに、織部夫人は何時の間にか出來り『お前は本統に酷いよ私を唯一人死骸の傍へ殘して置てサ、私は獨りでアノ傍に居る事は出來ぬから出て來たが』『梅』ナニ彼れは今お聞の

迎めですから未だ本統の死骸では有ません、眠つて居るのも同様です』織『私は生て居る楢尾を恐ろしいとも何とも思はぬが死だ楢尾は本統に恐ろしい』梅『貴方にも似合ぬ事を仰有る死人が何で恐ろしいのです、況して楢尾は未だ死人では有ませんもの』と口には事も無げに言做せど其唇の色を見れば梅眞の心の中も仲々平氣に有らぬを知る可し。今までは次の室に、天下に秀でたる三人の勇士が控へ居たればこそ更に何とも思はざりしも、廣き所に唯だ女二人にして殊に夜は早や草木も眠れる丑満の頃と云ひ、自分の殺せし其の死骸の傍に明すは誰とても身の毛の逆立つほど恐ろしからん、去れど梅眞は猶ほ怯まず『サア夫人、元の室へお出成さい、アノ儘置ては不可ませんから、丁度牢屋で、死だ囚人を扱ふ様に、手足の縛めを解き、暫く寝かして置きませう、爾せぬと眞の試驗には成ません』夫人は殆ど震へる聲にて『若し生返る者ならば今直に生返らせてお呉れ』梅『今生返らせては何の試驗にも成りません少くとも明後日の朝まで三十時間ほどは其儘に置て見ねば』織『だけれどお前夜が明てから又殺せば好いでは無いか』梅『其様な事が出來ます者か、夫とも貴女がお否ならば貴女は御自分の室へ入てお休み遊ばせ、

後は私が唯だ一人で好き様に致しますから』夫人は暫し無言にて考へしが獨り室に退きて寝に就くは梅眞の傍に居るより猶恐ろしき事なれば立去らん景色も無く、主人に叱られたる犬兒の如く唯だ悄々と梅眞の後に從ふのみ、梅眞は無言にて元の室に入り、彼の椅子より轉げ落ちし楢尾の死骸に俯向き掛り、手足の繩を解かんとするに彼れの膚は既に温かみを失ひてヒヤリとするも氣味悪し、夫にも構はず猶ほ解き續くる折しも背後に從ふ織部夫人は魂切る如き聲を出し『アレ幽靈が』と叫びながら梅眞に縋り附きたり。

今死したる楢尾明が早や幽靈となり現はるゝとは些と早過る様なれど、梅眞とても何と無く薄氣味悪き折柄なれば『貴女は先ア、何を其様に』と云ながら顔を上るに、成る程夫人の驚きしも無理ならず窓の外より硝子越に此室を差覗く一怪物、是れ人か是れ幽靈か其顔は腐れ掛けたる骸骨より猶恐ろしゝ。

室の内なる硝燈の明りに、硝子越に内を窺く恐ろしき怪物の顔歴々と見えたれば、流石の梅眞も言葉無き迄に驚きて殆ど其所に立すくめり、去れど織部夫人の如く度胸まで失はねば忽ちに勇氣を集め、窓の傍に突と寄りつ、片手に又も毒藥の瓶を持ち眞逆の時には振掛んと云ふ劍幕にて『誰だ』と云ひつゝ硝子戸を引明るに、此暇に怪物は黑き頭巾に其顔を包むと見えしが暗に姿を隱したり、梅眞は猶ほ眼を見張り庭を隈なく眺め渡せど夜色暗々として見分くるに由なければ、彼れが猶ほ其邊に潛めるや將た其儘立去りたるや、夫とも烟の如く消えたるや孰れとも知る能はず、殊には何さま唯だ少しの間にして彼れが眞實の人なりしか、或は又孰れかに掛けたる額面の類が硝子に反射して恐ろしげに見えたるや殆ど疑はるゝ程なれば、梅眞は『アヽ』と云ひて窓をメめ、再び硝子を見直せども今は其の影を認めず、初は全くの實物と思ひしも早や我が心を疑ひて氣の所爲か神經の爲なるかと半信半疑に迷ふのみ。

織部夫人は餘りの恐ろしさに物言ふ力まで失ひし如く、太く開きたる眼にて梅眞の顔を見詰め『是れ梅眞逃て行かう、サア逃て行かう』と云ひ確と梅眞の手を取りたり『逃てとは何所へ』

『夫』何所へとて此死骸の傍に居るからアノ樣な事が有る、サア何所へでも逃て行かう』梅眞は僅に顔色を取直し『逃て行かずとも先が私を見て逃たでは有ませんか私の傍に居れば大丈夫ですよ』織『だツて今のが幽靈だと大變だ、楢尾さん（と早「さん」附にして）はアノ樣な人だから屹と化て出るのだよ』と震聲にて戰くも無理ならず、當時は今と違ひ世間一般に幽靈の出る事を信じたる折と云ひ、中にも夫人は神經の强き人なれば恐るゝ事も人より恐れしとなり。

梅眞は次第〳〵に落附たる口調にて『サア幽靈なら此上も無い仕合せですが』と半分云ふを皆まで聞かず『幽靈ならば何故仕合せ』梅『私はアレが誠の人では無いかと心配するのです』夫『何故其樣な心配する、猶だコレ夜の明ける迄間も有る、私は何うして夜を明さう』梅『アレが誠の人ならば我々は大事の秘密を見られました、彼れが若し政府へ行き、織部夫人の屋敷の中で楢尾明の死骸を扱ツて居たと訴へれば私共は何の樣な目に逢ませう、縱や政府へ訴へずとも世間の人に話をすれば、惡事千里の譬へです、吾々が楢尾を浚ツた事は明日にも巴里中の噂と爲り直に政府の耳に入ります、今の者が何奴か少しも見當は附きませんが娑陀さんも何時か

アノ樣な怪物を見た樣に話ました、夫は兎も角、那れが人なら此屋敷へ這入り夜中に内の樣子を伺ふには何か夫だけの仔細が有ませう、事に由れば政府で使ツて居る探偵の一人かも知れません』夫『だから梅眞直に逃げやう』梅『逃やうとて何所へ逃ます、未だ妫陀さんを救ひに行つた三人の人々も歸りませず何うしても夜の明るまで茲に居ねば成ませんですから貴女は最うお寢間へお入りなさるが好いでせう私がお送り申しませう』と推返せど如何でか唯一人り淋しき寢間に夜を明さる可き』夫では最う仕方ない』と云ひ、力なく〳〵此室に踏止る事と爲りたれば梅眞は再び楢尾の死骸に向ひ、解掛け縄を解きに掛るに彼れが身は全くの死骸なり、屈めたる手は縄解くれど伸もせず、梅眞は氣永く徐ろ〳〵と其節々を撫でなぞして引延すに、夫人は面色土の如し。

『コレ梅眞若し此死骸が生返らねば何とする』梅『生返らねば夫までゞす、何うも致方が有ません』夫『生返らずして今の樣な幽靈が附纏へば、私しは三年と經たぬ中に取殺される』梅『其樣な事が有ます者が、夫にナニ大抵は生返りますよ大丈夫です』と口には輕く言做せども、彼れが

死樣の餘りに充分なるを見ては幾分の心配なき能はず、曾てエキジリを墓より堀出し四十時間を經て蘇生させたる事は有れど、心の所爲かエキジリの死骸と此死骸とは何と無く死樣が違ふ樣なり、此死骸が此儘にして生返らずば鐵假面の秘密は遂に知るに由なく、何所とも分らぬ牢の中にて彼れを苦しみ死に死なせるの外あらじ、斯く思へば我身の過ち實に容易ならぬ事なれば、寧その事三十時間の後を待たず今の中に蘇生劑を呑ませ彼れの命を呼返して見んかとも思ふ程なれど、初めよりの目的にて三十時間を經たる後呼返さんと定めある事なれば、今更夫を改むるも心惜く、其儘又彼れの手足を撫で延し傍なる壁の隅へと引行きて横に寢かせ白き布にて其上を蔽ひたり。

斯て梅眞女が初めて發と息附く所へ急がしく入來る一人あり即ち是れ幸助にて、彼れ殆ど血眼なれば、梅眞は氣遣はしげに『妫陀さんの居る所が分りませんか』幸助は周章て惑めき虚呂〳〵と室中を見廻しながら『イヤ居る所は分りました、貴女の推量に違はず楢尾の屋敷の穴倉へ隱されて居たのですが、吾々と唯だ一足違ひに何者か引浚つて立去りました』梅眞も夫人も

一様に『ヱ、ヱ、何と』幸『吾々の考へでは或は窶武からの使ひでも來て連て行つたのかと思ひますが、何しろ皆無其行衛が分りません』梅『夫は先ア殘念な事を』幸『殘念より何より私しは悔しくて成ません、斯うなれば梅眞さん、最う三十時間の四十時間のと氣永い事は言て居られまん、直に楢尾を生返らせて貰ひませう、事に依ると楢尾の浚はれた事が最う窶武の耳に入り、夫ゆへ娑陀樣が外へ移されたのかも知れません、何しろ吾々は斯う云ふ中が險呑です、何だか最う其筋の探偵が背後へ附いて居はせぬかと思はれる程ですからサア直に、直に蘇生させて頂きませう、イエ何と仰有ツても此上に猶豫する事は出來ず、又楢尾に白狀させるより外に仕方が有ません、彼れが生返りさへすれば猶だ色々問ふ事が有ますから』と息迫切つて云ふ言葉には必死の決心を帶るにぞ、梅眞も是には言爭ふ事能はず『致し方が有ません、生るか生ぬか兎に角蘇生劑を呑せて見ませう』と云ひ、又も衣嚢より一瓶の藥と注射に用ふる管の如きものを取出せり、此治まりは如何樣に成り行く可きや。

七十六

娑陀は楢尾が家の穴倉より何者の爲め何れの所へ連行かれしや、勿論今し方の事と云ひ楢尾が浚はれたる後なれば、彼れに問ふとも全く知らぬやも計られねど、夫とも又前以て彼れと窶武の間に定め置きたる事かも分らず、孰れにしても彼れは警視の次官なれば、外に知れる事も多からん、今は彼を生返らせる外無き事とは成れり、殊には怪しき男の此室を窺きたる事と云ひ幸助の言葉と云ひ何うやら一同の爲せし事早や政府の爲に探り知られ、今にも捕縛さるゝやも計られぬ勢ひなれば最早や楢尾を此上幾時間も死人と爲して置く可きに非ず、茲にて彼を呼生し鐵假面の事までも聞盡さずば終に其の大秘密を知る由無くして事破れ、取返し難き後悔せんと梅眞も斯く見たれば夫等の道具を取出すに幸助は稍少し安心し『ア、爾して下されば、今日中に娑陀樣を救い鐵假面の秘密も知る事が出來ませう、シタガ生返るに何時間掛りますか』梅『左樣サ一時間は掛りませう、爾して彼の心が元に復り能く吾々の問ふ事に返事する樣に成

るのは何うしても三四時間の後でせう』幸『オヤ〳〵夫程掛りますか』梅『確には分りませんが、夫位は掛る者と思はねば成ません』幸『では其間に私は安東相須根の兩人を呼んで來ます、彼等は猶だ私からの指圖を待つ爲め、楢尾の屋敷の近邊を見張つて居ます、連て來れば楢尾の愈々生返ッたとき三人ともに力を合せ彼れを散々に威して、知つて居る丈の事を殘らず白狀させて仕まひます』

斯く云ひて幸助は又立去りたれば後に梅眞は、恐る〳〵控ゆる織部夫人を隅の方なる長椅子へ連行きて身を休ませ『貴女は餘り此樣な事を御覽成さらぬが好う御座います、又氣分でも惡く成ると了ませんから』と云ひ、其身は立ちて彼の死骸の方へ寄行かんとするに、此時忽ち次の間に唯なら人の聲あり、夫人も梅眞も何事かと一樣に耳を澄すに、誰やらん織部夫人に面會せんとする者が取次の男と云ひ爭ふ者にて『馬鹿な事を云ふな、夫人が內に居る事は知つて居る、誰が來ても面會せぬから其積りで斷れと云ひ付られて居るだらうけれど、外の客とは人が違ふ、己が斯うして夜の明ぬ中に來るのを唯事だと思ふのか、コレ大急ぎだ大至急だ、夫人の一命に

拘はる事だ、其所退け、コレ退かぬか』と云ふ叱り聲切れ〳〵に聞え來る、抑此荒々しく周章たる來客は何者にや、殊には午前四時と云ふ猶明けやらぬ此時刻に、夫人の命にも拘はると打叫ぶは實に容易の事にあらじ、梅眞は合點の行きし如く『ア、、太變です分りました、武倫伯爵の聲ですよ』と云ふ。

抑武倫伯爵とは今まで此篇に出し事なけれど當時の歷史に名を留し貴族の一人にして織部夫人の妹なる痲季、安那女の所夫として夫人を義理ある姉とする人なれど夫人が朝廷を斥けられし頃より互の往來も疎くなり居たるなり。夫人も成る程と思ひしか『ア、爾だ武倫伯だ伯が今頃何の爲に』と穩かならぬ顏にて問ふ、梅眞も少し驚き恐れたる聲音にて『最う何も彼も破れました、私の云ふた通り窓を窺いたアノ男が幽靈で無く全く政府の探偵です、彼奴必ず變武の許へ馳せ附け此屋敷で楢尾を殺したとか何とか上申した爲め變武から國王路易に急告し、貴方や私を捕縛する事に成つたのです』夫人は餘りの恐ろしさに咽喉も干涸び聲までも皺枯れて、『エ私を捕縛する、アノ武倫伯が』梅『イエ、武倫伯は政府の捕手の迎はぬうちに早く貴方を逃

させやうと思ひ朝廷を脱出して注進に來たのです、兎に角、次の間でお逢成さい』と云ふ、實に是れ危機一髪、夫人は返事もせずに次の間へ出んとするに、武倫伯は早や取次を推退けて、此間の襖まで寄せ來れり。假令ひ我身を逃んとするの親切ある人なりとは云へ、此間に入つて此有樣を見られては大事なれば、夫人は必死の勇氣に復り、客を推出す劍幕にて次の間へ躍り出るに客は果して武倫伯なり。

伯は痛く周章たる物と見え一言の挨拶よりも先づ迫立る高聲にて『夫人、夫人、貴女は唯つた今朝廷で捕縛される事に極りました』梅眞の云ふ通りなれど斯く容赦なく言はれては『左樣ですか』と尋常に受られぬのが兼て夫人の片意地なれば、斯る危き場合にも猶ほ屈せず『ヘヱ、饗武の大馬鹿めが其樣な事を云ひましたか、路易が夫を聞ましたか』と叱るが如くに問ひ返せど恐れの調子は充分見えたり　伯『最う其樣な剛情を張る場合で有ません、貴女を捕縛すると云ふ事は幾度も饗武から言立ましたが、是までは國王が許しません、今夜は最早や饗武の言葉を斥け兼る場合に成り、愈々捕縛を許しました』十年前には我足許に膝を折り我身を最愛の妻よ

と拜みし國王路易が、今は饗武の言葉に從ひ我身の捕縛を許すかと思へば、俄に悔しさ腹立しさの込上て『何の廉で其樣に私を』伯『何の廉、私へ向つて其お言葉は餘り空々しいと云ふ者です、最う朝廷で貴女の無罪を信ずる者は一人も有ません、夫を猶だ言爭へば次の間へ踏込で楯尾の死骸を引出しませうか』此言葉には一言の返事も出來ず、夫人は傲慢なる其首をヘシ折る如く打垂るゝに、伯は夫人の手を取りて『サア一刻も猶豫は出來ません私と一緒にお出成さい、外には私の馬車が居ます』夫『ヱ、ヱ、貴方が私を捕縛するのですか』伯『貴女は先ア何を仰有る、最う馭者にも言含めて有ますから、直に私の馬車で逃すのです』夫『貴方の馬車で逃ずとも私は自分の馬車でブルツセル府へ逃て行きます』伯『飛んでも無い事を仰有る饗武が朝廷から私より一足先に出ましたから最う捕手の役人が其邊まで來て居ます、自分の馬車を用意する暇が有ますものか、夫に貴女は最うブルツセル府へ逃ては了ません墺國へお逃なさい』夫『とは又何う云ふ譯で』伯『ブルツセルでは直に又歸り度く成りませう、貴女は二度と此國へは歸られません、歸れば直に又捕はれて我々一門の名を汚しますと推問答する其暇も實に危き限りと云ふ可し。

恐ろしさと驚きと一時に來りし者なれば夫人が決し兼るも無理ならず、去れど彼の寥武が武倫伯よりも一足先に朝廷を出たりと云へば、夫より捕手の者等を集め命を傳へて出發させしとしても、最早や此所へ推寄せ來る刻限なる可し、武倫伯は氣を燥ち只管に織部夫人の手を引きて『サア言ふ事は後にして兎に角私の馬車へお乘成さい、玆に斯して居る所へ若し捕人の者が來れば貴女より私が困ります、朝廷の罪人に內通して其逃亡を助けたと云へば何の樣な目に逢ふかも知れません、私が玆へ來たのは實に命掛けの仕事です』と必死になりて說立れど、夫人の心は何所までもブルツセル府へ逃るに在りて殊に梅眞を壹連行き度しと思ふにぞ、此間際と爲り猶爭ひて『イヤ私はブルツセルを好みます』伯『好む好まぬと其樣な事を云ふ場合では有ません、夫に又墺國には貴女の息子が行つて居るでは有ませんか』と云ふ。

息子とは抑も誰の事ぞ是なん曾て此ソイソン邸の主人なる曾易遜伯爵と織部夫人との間に生

れたる末の子にして皇族サボーイ家の正當なる血筋を引く者なれば全體云はゞ朝廷より何かの位を授けられ皇族の一に數へらるゝ筈なるも唯だ其子の虛弱なるが爲め國王路易之を嫌ひ、斯る者を朝廷より跳退るも左まで朝廷の不爲には爲らずと云ひて墺國へ追送りしなり、皇子勇仁（原名、プリンス、ユージーヌ）と云へる名前にて今猶ほ墺國に養はるゝ者實に此の夫人の息子なり、武倫伯は之を知れるが爲め、夫人を其許に送り遣れば子の愛に引かされて再び此國へ歸る事無からんと後の後まで考へて斯は計らう者ならん。

夫人は猶ほ進まぬ事とて又も故障を出さんとするに武倫伯は最早や堪へ兼しと云ふ如く『何と云つても爾は私がさせませぬ』と叱り附け、今迄の容赦を捨て、荒々しく引立て〳〵『ナニ此屋敷の後の始末は殘らず私が附けて上げます、下部にも誰にも分れを告るに及びません』と云ひ、手も無く夫人を捕へ去り門前に待たせ在る我馬車に推載せて早くも孰れへか立去りたり。

是にて捕縛を免れたるは實に夫人の幸ひと云ふ可きなり、次の間に在る梅眞女は此問答を殘らず聞き、唯だに夫人のみのみならず、我が身も最も危ければ最早や此所に一刻も踏留り難きを

知り藥瓶を持ちし儘立上りしも、去ればとて楢尾明の死骸を小脇に挾みて去る程の力も無し、此所へ捨置きては一切の秘密夫までと成るのみか、折角に作り揚げたる我藥の効驗さへ再び試す可き折なからん、如何にせんかと取つ措つ思案せしが最早や幸助が所夫安東と荒武者相須根を連れて歸る可き刻限なり、彼等三人若し捕手より先に歸れば此死骸を持たせて逃去る事も難からず、夫までは危くとも茲を立去る事能はず、度胸を定めて何事も運に任せ敵と味方の孰れが先に入來るや、戸を待つ事と決心し再び腰を卸せしは大膽と云ふの外なし。

猶又熟々と考ふるは楢尾を死骸の儘に置きては若しも我身の捕はれし時、彼を殺したりとの疑ひを解く由なし、今の中に蘇生劑を施して彼を生返らしむるに於ては我身に人殺の罪なくして彼又暫したりとも其身が殺されたる事を知らず。唯だ眠り居たる位に思ひ毒藥の秘密を見破る能はじ、同じ捕はれる事としても一回の試驗もせずに捕はるゝは殘り惜き限りなりと、危き際にも落着きて前後を考へ、頓て立ちて合の戸に錠を卸し斯して置けば捕手が愈々來るとも彼奴等が此戸を叩き破る間に我身は此方の窓を開き逃延る事も難きに非ずと胸に問ひ胸に答へ

て、又もや死骸の傍に行き白き布を取退けて、先づ其の注射の管に充分の藥を入れ、死骸の鼻に奥深く管を入れて徐ろ〳〵と吹込み終り、次には死骸を抱き起して其顔を天井の方に向け、自づと咽喉の開く樣にし藥を下へ降らせる爲め咽喉より胸へ撫で卸すに、藥は我が思ふ通り程能く楢尾の腹の中へ傳はり下りたるに似たり。去れど其功猶現はれず、楢尾は死骸の儘にして正氣に復る樣子も無き故、扨は藥の足らざりし爲めなるにやと梅眞は怪しみながら再び彼れを横に寢かせ又もや管を取り上げんとするに、此時外より今鎖せし室の戸を碎くる程に打叩き、『御用、御用』と叱る聲さへ聞ゆるは確に捕手の來りし者なり。

最早や何うする事も叶はず、殊に捕手は大勢と見えメリ〳〵と戸を押毀す音のするにぞ、梅眞は殘念に堪えざれど死骸の先途を見る由も無く、窓を開きてヒラリと飛出で、庭を傳ひて裏門の外に出れば『ソレ必定茲へ來るだらうと網を張つて待つて居た』と云ひ、手も無く取つて押へ附くるは、何ぞ圖らん彼の窶武自身なれば梅眞は驚きしも其甲斐なし、續いて飛附く役人等に高手小手に縛り上げられ用意の馬車に乘せられたり、梅眞は腹の中に『ナニ構ふ者か、夫

人は逃たし、所夫を初め幸助も無難だから外に氣を置く所は無い、捕はれて行けば結句妫陀の居る所だらうと吱きたり。

譯者曰く總て此邊の記事は歴史上の事實を其儘にして夫人と武倫伯との問答などもチョーシー僧正の『路易十四世治世實錄』に記したる語句を其儘に寫したるものなり、又織部夫人に子ある事は今まで煩を厭ひて記さゞりしも、夫人は路易王の愛を失ひてより立腹の餘りソイソン伯に嫁したれば伯の正式の妻なり、唯だ不和合の爲め內實は離緣同樣にて夫婦別々に我儘勝手の振舞を爲し居たる者なれば、數人の子ありて皇子ユージーヌは其末子なりとぞ、尤もソイソン伯爵は間も無く死去したれば夫人の氣隨は一層募りたりとなり。

七十八

梅眞女が捕はれてより、局面玆に一變し鐵假面詮索の事は全く消え盡せしかと疑はるゝ程となりぬ。織部夫人は皇子勇仁を頼りて墺國に逃行きしまゝ何の便りも無く、妫陀も孰れへ隱さ

れたるや更に分らず、毒藥試驗の爲めにとて梅眞に殺されて生復る可くも見えざりし楢尾明も死骸となりて葬られたる者にや、警視廳の官房にも顏を見受ず。相須根、幸助、安東の三人も彼の夜かぎり姿を隱し音も無く沙汰も無し、黑頭巾も見えず、寒武も現はれず、唯だ何と無く陰氣なる有樣にて此年も暮れ早や翌年の四月となりぬ。

此頃徐ろ〳〵と世の中に名高くなり、寄ると障ると人々の噂さに登り上は皇族貴族の社會より下一般の賤民まで耳を聳つるに至りしは、後の世までも鳴り響く彼の毒藥審問事件なり、取調を受る被告人は別人ならぬ梅眞女にして、政府は之が爲に故々裁判官、警察官の中より審問委員と云ふ者を組立て梅眞女をビシゼンの塞に在る獄に下し、獄の外へは特別に毒藥審問廷と稱する臨時裁判所の如き者を設けたり。抑も之は何が爲ぞと云ふに、皆な寒武の爲す業にて、彼れは一たび平井夫人に心を寄せ夫人が妫陀なる事を知つてより痛く失望の餘り、二日ほど引籠りて打臥せし儘なりしと聞きしが、彼れ臥しながらに樣々の事を考へ廻せしが、其の起來るや以前にも增す熱心にて第一に織部夫人捕縛の事を言立て國王の許しを得て、其身自ら梅眞を

まで取押ゆるに至りしなり、戀の叶はぬ遺恨をば政治上の熱心にまで加へたる者なるか、何さま是ほどの勢ひなれば蛇陀も定めし辛き目に逢はされ居る事ならんとは思はるれど、救ふ可き手段なければ是も詮方なし。

唯だ一人最も嚴しく宴武の怒りを正面より受けたるは彼の梅眞なり梅眞は手を替へ品を替へ樣々の調を受け決死隊の事より幸助相須根等の事までも調べられしかど一言も同志の秘密を洩らさぬより、宴武は殆ど取調べを思ひ斷しも、調ぶるうちに梅眞の容易ならぬ女なる事分りたり、斯る毒藥調製に巧なる者を生かせ置き之に憎まるゝ事と爲りては自分までも何の樣な仇をせらるゝも計り難ければ、虎を野に放つの危きを犯すより、毒藥を名として梅眞を取調べ死刑に行ふに如く事なし、調ぶる中には又樣々の事を白狀するにも至らんかと扨こそ毒藥審問廷を開き恐ろしき拷問を加へたるも、梅眞は終に何事をも白狀せず却て大膽にも朝廷を嘲り宴武を罵るのみか、政府の深く秘密として隱し居る事をまで遠慮無く打き立て殆ど審問官の手に合はぬ始末と爲りたれば、憐む可し梅眞女は當時佛國の刑罰にて一番重しと聞えたる燒殺の刑に處

欠

幾度の水責にも梅眞女は更に屈せず、終に何事をも言立てずして、燒殺しの刑に處せらるゝ事とはなれり。勿論水責の有樣は其筋の秘密にして何人にも知しめざれば、世間の人之を知らぬ筈なれども隱すより現はるゝは無く、誰云ふと無く梅眞女は水責に屈せずして宰相寶武を罵しりたりとの噂、人の口より口に傳はり翌日は早や巴里中の話の種と爲りたれば、梅眞の名は到る所に鳴響き其の燒殺の死刑の如きは昔より例の無ほど最と名高き事件とはなりぬ。

死刑を行ふは有名なるラ、クレーヴの刑場にして、物見高き巴里の事とて當日は朝の內より燒殺の恐しき有樣を見ん者とて玆に集へる見物人幾萬と云ふ數を知らず、中には又梅眞とは如何なる女にや其顏附は如何、目附は如何、年頃は如何などと怪みて故々西班、伊國、白耳義など云へる遠き國々より上り來るも有り、之が爲に刑場の邊なる家々の二階は一週間も前より借切りと爲り、窓一ケ所一時間の價何十圓と云ふ高價に上れど之すら厭はずして借らんと云ふも

欠

多く益々其値段を迫上るのみ是等の家々の内にて最も眺めに都合好きは刑場の正面に在るビンドノーと稱する居酒家の二階にして、其窓より首を出せば刑場の有様一目に見ゆるのみならず、被告が臺に載せ連來らるゝ道筋も總て目の前に横たはり、初めより終りまでの有様殘らず見盡さるゝ故、既に先年貴族プリンビラ侯爵夫人の殺されし時などは此窓を借らんと云ふもの幾人の數を知らず、終に二千五百圓にてチャンプトース侯爵の手に入たれは其後は此窓を綽名して二千五百圓の窓と云ひ、太抵の贅澤家も此直段に閉口し容易に借切らんと云ふものなし、去れど主人は強て貸急ぎをせず、我窓には確に二千五百圓の直打ある故、其價を一文でも下ては貸さずと云ひ高く留りて借手の有るを待つに流石物見高き都の人も安き隣の窓を借り此窓には口を掛けず、其後既に六七回も名高き死刑ありたれど此窓ばかりは大威張にてお茶を挽きたれば、主人は少し失望しながらも人に向ひ『最う世は末に成ました、幾等貴族が贅澤だの何のと云つても私しの家の窓代を拂ふ者が有ません』と嘆息し居たるが、世は猶ほ主人の嘆息する程末にも至らぬと見え、此度の梅眞女の死刑には既に四日前に貸切りと云ふ札を掛けたり。

抑斯までの大金を出し梅眞の死際を眺めんと云ふ無情の人は何者にや怪しみて主人に問へば『ナニ都の人は到底此窓を借得ません、田舍の大盡です』と妙に勿體を附けて答ふるのみ。去れど此田舍大盡の外に猶ほ贅澤家は有ると見え當日の午後二時頃に及びて（梅眞女の死刑は午後四時と云ふ定めなり）群がれる人々を推し分て此家に入來り、是非とも此窓を借受んと云ひ込たる二人連の客仁あり、主人は怪しみて其身形を見るに唯だ通例の商人風にて之が爲めに高き窓代を拂ふ可しとも思はれねば『イヤ御覽の通り約定濟みですから』と斷るに客仁は仲々屈せず『イヤ約定濟みは知て居るが、見れば早や二時にも成つて未其人が見えぬから事に由ると其人に差支でも出來、急に來られぬ事に成つたのでは無かと思ふから問ふて見るのだ』主『イヤ其人が來られぬ事に成つても既に代價を前金で取ましたから外へ貸す事は出來ません』客『でも有うが若し其人が來ぬ事に成れば何も窓を明けて置くに及ばぬ事、前金流れに成つた者と見做し外へ貸すのが當然では無いか』と云ひ猶ほ樣々に說附けたる末、終に一種の約束を結び、若し前約の人が來れば直々に其人に相談し、其人と並びて見る事にするか、其人が他人と並びて見る事

が否だとならば、早速其人に明渡して立去る可しとの事に定めたり。

此客人も何者にや、何が爲に斯くまで此窓を所望し斯まで梅眞の死際を見度るにや、主人は唯だ我家の窓の好き爲とのみ思ひ更に其上を怪まず、頓て客仁二人は主人に幾何の金を渡しツカ〳〵と二階に上り、窓を開きて刑場を眺め見つ、刑場の眞中に早や梅眞を縛り附くる鐵柱の嚴めしく立てる樣より其傍らに薪を初め燒殺しに用ふる硫黄の大塊など積上げあるを悄然と打見遣て『ア、茲ならば最上だ、茲で僕が合圖をすれば、君と相須根が何所に居ても充分其合圖が見えるだらうネヱ安東君』『安』『爾とも幸助君併し此窓を借たと云ふ合客は何者だらう、若し其者が合圖の邪魔でもすると困るが』『幸』『ナアニ其樣な心配が要る者か、誰だか知らぬが何でも田舍の大盡だらう、縱や僕の顏を見知つた人でも僕は此通り顏形を作り替て居るから誰も僕を決死隊の殘黨波蘭人コフスキーとは思はず、合圖とても唯だ帽子を脫ぐ丈の事だから傍に何の樣な人が居ても差支は無い、充分安心して居たまへ』と云ふ。

此物語にて察すれば客仁は即ち妫陀の下僕幸助と梅眞の所夫安東にして荒武者相須根等と語

らひ、梅眞女を刑場より奪ひ去ると云ふ大膽不敵なる事を目論みつゝ有る者と讀者大概は推量せしならん。

八十三

幸助と安東の兩人は彼の二千五百圓の窓に凭り、暫しが程は無言にて刑場の彼所此所に滿々たる群集の有樣を見廻すのみなりしが、頓て安東は最と滿足の樣子にて『ア、此の有樣では政府の護衛が幾等澤山でも恐るゝに足らぬ見給へ幸助君、何所から何所まで我黨の雇人が行き渡ツて居るじや無いか、茲で君が合圖をすれば一同直ちに護衛兵の前に立塞がり其間に僕と相須根とが梅眞を引浚へ群衆を潛ツて立去るのだから、夫に又群衆の中には到る所に我黨の加勢が居て夫が群衆を押附けて騷がせながら僕等の逃るのも助けるから萬に一つ失策は無い筈だ』幸助は心配氣に『夫は爾だが我黨の加勢と云ふのが實は金で雇つた無賴者で此邊に住む盜坊や巾着切りだから頭數ほど當には成らぬよ、餘ほど用心して掛らねば』『安』『夫は爾サ、此邊の破落戸

までを驅り集めたのだから少しも油斷は出來ぬけれど、中には又、相須根が壯士隊の隊長で居た頃、其手下に屬して居た者が二十人ほどは交つて居るから夫等は滿更の破落戸とも違ひ幾等か役に立つだらう』幸『ナニ壯士隊と云ふのは詰り食詰者の寄合で、別に相須根の恩に感じたとか義理に懷たとか云ふので無いから餘り當にすると仕損じる、何でも君と僕と相須根と唯三人で此仕事を遣ると云ふ覺悟で居ねば、肝腎の時に失敗るから』安『爾とも先づ其積りで僕は充分に用意を仕やう、では合圖を能く賴んだよ』幸『好いとも合圖だけは充分に旨く遣るから安心し給へ』安『承知だ君が茲から大體の樣子を見て合圖すれば夫に應じて僕と相須根が夫々の號令を傳へるから』と斯く云ひて安東が立去れば、間も無く此家の主人に案内せられて此二階へ登り來る客あり。

是が先約にて此窓を借入たる贅澤家ならんと思へば慾き所へ來し者かなト幸助は腹の内にて呟けども詮方なし、其内に主人は贅澤家を幸助に引合す如く『是が先刻申ました田舍のお客樣ですが、外に相客が有つても差支へ無いと仰有つて下さいますから何うぞ御一緒に御覽を願ひ

ますと云ふ、幸助も成る可く我本性を怪まれじと心に祈る折柄なれば充分に面を柔げ『イヤ貴方の借切て有る所へ後から來て邪魔をするのは誠に失禮の至りですが外に是ほど能く見える窓が無く、夫に貴方のお出が遲いから若し外の用事でも出來お出には成らぬ事かと、達て主人に賴み込み半分だけ貸て貰ひました』と云に客も存外に氣の輕き人にして『イヤ此樣な時には少しでも能く見える所を借度いのは誰しも同じ人情ですから其御挨拶には及びません、お見受申せば貴方も一廉の紳士ですから却て私も仕合せです、一人で見るより相手が有つて共に酒でも呑ながら見るのが一興です、コレ亭主一番上等の酒を二三瓶以て來い』と命じたり。

人の死刑を酒呑ながら眺むるとは鬼にも均き業なれば幸助は少し癪に障れど开を咎む可き場合に非ず、是が浮世の人情ならんと何も角も斷念めて先づ其人の顏を見るに成るほど田舍の豪商と思しく身姿持物最立派にして全體の振舞も何處と無く優かげなり、去れど何故にや其顏に見覺えある如くなれば、是まで孰れかにて逢ひ見し人には有らぬかと幸助は私かに心を惱ませども思ひ出さず、商人は我怪しまるゝには氣も附かぬ如く『失禮ですが貴方は此巴里の方でせ

うネ』と問掛ろ、其聲すらも初めて聞くとは思はれぬ樣なれど、幸助は大膽にハイ直に此近邊に住んで居ます主人に聞けば能く私の事を知つて居ます、シタが貴方は、商『ハイ私はチウリンの生絲商で年々二三度は此巴里へ參ます、今度も一月程前に來まして實は最う歸る日限が來て居ますけれど梅眞女の所刑を見る爲め故々逗留して居るのです』と腹藏無げに答ふるを打聞けども幸助は何事をも思ひ出さず、其中は亭主は二三瓶の酒と二個の盃を持來り、是なら必と貴方がたのお口に叶ふだらうと思はれますとて卓子の上に置きて去りたれば彼の客仁は之を二個の盃に盛り一つを幸助に差出し自ら殘る一個を呑みつゝ『オ、仲々呑口の好い酒です、サア一つ召上れ』と云ふ、幸助も辭むに及ばぬ事と半分ばかり呑乾して『成るほど口當りの好い酒です』と答へ其儘卓子の上に置くに此時客は太き金時計を取出し『オ、早や四時を十分ほど過ました最う梅眞が引立られて來る自分でせうが』幸助も氣に掛れば『左樣サ』と云ひながら自ら窓より首を出し梅眞の來る可き道筋を眺むるに、其暇に客仁は衣囊より小き藥瓶を取出し幸助のコップに二三滴垂らし込み知らぬ顏にて其小瓶を元の衣囊に修めたり、其業の早くして且巧

みなる事、巾若切も羨む程にて流石の幸助さへ少しも心得かざりしとなり。

八十四

話更りて梅眞女は彼の第四回の水責に非常拷問を受けたる爲め、全く死人の如くになり、前後も知らぬ姿にて審問廷より擔ぎ出され再びビンセンの牢獄に投入られしも身體に何處か丈夫なる所ありし爲にや、翌日は早や元に復り、兼て我隱し持てる樣々の藥を呑みて三日と經ぬうち全く健康なる身體とは成れり、是を聞きて宰相婁武は猶ほ梅眞が決死隊の殘黨の名前など知れるを疑ひ、汗を白狀せしめん爲め今度は水責の荒々しきに引替へ、若し白狀せば唯に死刑を見含すのみか、無罪として放免し遣はさんとまで言出たれど、梅眞女は之にも應ぜず、既に硫黃火燒殺の宣告を受け死ると覺悟を極めたる上なれば今更ら憐みを乞ふ心なしと云ひ張り猶も婁武を罵りて止まざるより、其筋にても呆れ果て愈々死刑を執行する事とはなれり。

死刑は丁度宣告より十日目にして其間梅眞は牢の中に在りて當時政府を憎む者等が作りたる

諷刺の歌を聲高く謠ひ、或は牢番を罵るなど殆ど手に合はぬ程にして少しも死刑の恐ろしさを氣に留ぬ如くなれば牢番等は却て驚き恐れ、此女こそ惡魔の化身にして其毒藥の秘傳なども悉く惡魔より授かりたる者ならんと言合しとぞ。斯くて愈々十日目と爲れば午後の三時に牢屋より引出され、最後の說教を受くる爲め有名なるノートル、ダムの說教室に連行かれ、當時の儀式に從ひて梅眞女は太き蠟燭を手に持たされ一時間ほど說教を聞かされ、且は臨終の懺悔に心に掛る事ども殘らず吾に言聞かせよと長老より論されたれども、長老の涙に少しも心を動かす事無く、我身は惡魔の化身なれば死際に後悔無し、死したる後は魔道に入り再び饗宴を苦めんのみと言罵しり更に儀式の尊きを知らさる如くなれば之が爲に稍や時間は延びたれど、其事の終ると共に臺の上に載せられて幾人の騎兵に護衛せられ、死刑人の服を着けて『ラ、クレーヴ』の刑場へと引行かれたり。

總て此頃の規則として死刑に處せらるゝ者は白き布にて顏を包まれ、人に見らるゝ事無き樣にし連行かるゝ定めにして、既にブリンビラ侯爵夫人の如きも其例に從ひしこと何人も知る所

なれど梅眞は群衆の中に能を顯し、里は若しや我身を救はんとする者は無きや夫等を見廻し度き了見なれば何と言ても其顏を包ましめず、素顏陽はに臺に載り片頰に笑を浮めし儘、群がる人々に會釋しながら連られ行く、其大膽には殆ど感ぜぬ人も無き程なりしが、頓てラ、クレーヴの廣場に到れば一層氣を附けて四方八方を見廻すに、幾萬と數知れぬ見物人は、道にまで込合ひて護衛の騎兵も殆ど進み兼る程なり、殊に群衆の所々に異容なる打扮をしたる人も見ゆる如くなれば、梅眞は早くも夫と察し定めし我が所夫安東を初め幸助相須根等が我身を救ふ手筈を廻らせ何か計み有る事ならんと思ひ、其の平氣なる顏に一入の喜びを現はし來り、スワと云はゞ直ちに臺より飛降らん身構へにて猶ほ諸人に笑顏を示すに、梅眞梅眞と叫ぶ聲は口々より發し來り、中には痛く罵るも有れど中には又勵ます如き言葉を發する有り、其八かましき事耳も聾するばかりにして護衛の騎兵は幾度か鞭を擧げ此騷ぎを叱り鎭めんとすれど、熱湯の沸返る如く推合る幾萬人仲々之に鎭まる可くも非ず、時々は此邊の破落戸かと思はるゝ逞しき顏形の人、群衆を推分け臺の傍に進み來り『姉御心配する事は無い、冥途の橫町に待て居る人が有る

よ』などゝ意味有りげなる言葉を發し梅眞が『分ッたよ』と云ふ如くに頷くを見ては滿足の體にて躍り廻り又群衆を推立て人の波を打返さしむ、是等の有樣にて察する時は何かの合圖を待ち我身を奪ひ去ること、最易き事なれば、孰れかの所に必ず合圖し差圖する人あらんと梅眞は眼を上げ諸方の小高き所を初め、四邊の窓などを見廻すに、刑場の正面なる居酒屋の二階に當り殊更に首を前に突出したる一紳士あるを認む、梅眞の鋭き眼は早くも此人に目を附けたれど、遠くして見分るに由も無く、次第〳〵に近よるに從ひて篤と見れば日頃の風とは異れど確かに彼の幸助なれば、今は何をか疑はん我身が彼の窓の下に至らば彼れ必ず同勢に合圖して我身を救はせる事ならんと眼に充分の心を込めて幸助を打見遣るに幸助も『安心せよ』と云ふ目配せにて梅眞の顏を見る、茲に至りて目も口ほどに物を云ふと云ふ可き歟。

是よりは一刻も早く彼の窓下まで進み行かんと祈れども一歩〳〵と進むに從ひて群集の推合益々劇しく護衛の足も伸々に捗取り得ず、凡そ三十分ほどを經て辛くも其下に到りたれば梅眞は愈々救はるゝ時來れりと再び件の窓を見上ぐるに、斯は抑も如何に先に見たる幸助の姿は見

えず、見も知らぬ別人の商人首を出して我顏を眺め居るにぞ、扨はと驚き色を替るに、商人は眼に嘲りの心を籠め『ザマを見ろ』と云はぬばかりに其顋を突出せり、去るにても憎き此商人奴抑も何者にや、如何にして茲に在るや、幸助を如何にせしや、何故に我を愚弄する如くなるやと眸を定めて更に見直せしが、其人の誰なるやは梅眞の眼に能く分れり、商人に打扮たれども彼れ商人に非ず我が敵なり、而も最も恐ろしき我が敵なり、餘りの事に梅眞は思はず絶望の聲を發し『ア、最う駄目だ、楢尾めが』と口走りて臺の上に沈み込みたり、實に梅眞の絶望するも無理ならず此商人は先に梅眞が毒藥を以て頓死させ又蘇生劑を呑込ませて生死の定かならざりし彼の楢尾明なればなり。

八十五

楢尾明が現れてより梅眞救出しの目論見は如何に成り行きたるや、其手筈全く違ひて梅眞終に硫黄火に燒殺されたるや如何に、夫等は暫く後に讓り話を元の筋に返して茲には先づ讀者の

氣掛りなる彼の鐵假面の居所より妫陀の身の上に說及ぼさん。

鐵假面が釣臺に載られてバスチルより孰れへか連去られしは早既に一昔とはなれり、今は是れ千六百八十一年にして彼の時よりは凡そ八年の月日を經たり、其間鐵假面は孰れの牢屋に隱されて如何なる目に逢ひ、今は如何なる有樣なるや知る者絕えて有らざれども、玆に佛國と伊太利の國境にピチロルと稱する谷間の一驛あり、玆の鎭臺に八年前より推込られ最無慘なる取扱ひを受くる一囚人、是ぞ彼の鐵假面なり、彼れ八年の辛苦にて漸く鐵の假面を取脫し我が顏を空氣に晒す事だけは知りたれど是とても表向に許されしに非ず、唯だ牢番の來らぬ間に密と脫し牢番の足音を聞けば周章て又鐵假面を被る故、誰とて彼れの顏を見し者なく、彼れ猶ほ依然として憐れむ可き鐵假面なり。

彼れの捕はれ居る一室は山と山との間に築きし石の二階にして、窓先より一尺も離れぬ所に高き塀を建廻したれば、塀の外の有樣は勿論知る由なく、年中唯だ陰々と薄暗き所にして時に吹く風と共に窓より山霧の往來するのみ、日の光とては指す事無ければ濕り氣の深きこと

云ふばかり無し、今や彼れ此窓に身を寄せて籠の鳥の如く縱橫に組做したる鐵の棒にヒタと寄添ひ、何やらん塀の外より聞ゆるかと疑はるゝ物音に耳を澄せり。幸ひ丁度牢番の來らぬ間なれば彼れ密に鐵の假面を外し其顏を現せども最早や何人も彼れの顏を見知る能はじ。縱しや妫陀や幸助等を連れ來りて此前に立しむるも恐らく此憐む可き囚人の守雄なるや、帶里谷なるや將亦其外の人なるやを見分る事難からん、彼れ長き捕らはれに髮の毛悉く白くなり容顏も全く頽れ、身體も痛く屈みたり、四十か、五十か、六十か年齡とても察するに由なく殆ど年頃を失ひたる人に似たり。其着けたる衣服とても更に昔の影を留めず、汚れ垢着きたるは云ふ迄も無く所々裂け破れて繫ぎ合せたるも有り、孰れが襟、孰れが袖、色も褪め形も頽れ唯だ體を蔽へるのみ、靴も底拔け緣破れて殆ど足の踏むに堪へねど、無きよりは優るとして猶ほ穿てる者ならんか、此有樣にて察すれば八年の間に一度も其服を着替へ其靴を穿替たる事なからん。

宴武の邪慳なる命令と牢番の慘酷なる取扱は可惜ら盛の武士を此零落に沈ませし者なるか、去れど彼れ猶ほ死もせず、此有樣にて命だけは永らうるのみならず猶ほ心の中には燃えて未だ

消盡さゞる靈火一點の存するに似たり、殊に其の眼の明かにして此世の人に類を見ぬ如き異樣なる光あるは一身の思ひと力悉く眼に集りたる者ならんか、左は云へ今は此眼何の役にか立んや、彼蒼の色さへ見る由なき一室の內に籠込もりて眼は有れども見る物なく、塀の外の有樣の縱に斯も有らんかと推量せらるゝは唯だ耳に聞ゆる物音のみ、彼れが今窓に倚りて餘念も無く打聞るは是れ谷川の水の聲、梢吹く風の音に非ず、孰よりか切々に聞え來る女の聲なり。

聲も聲、節面白き謠の聲にて耳を澄せば聞ゆるに似、身を退ば聞えぬに似たり、塀の外より來るにや夫とも猶ほ遠き所なるや、孰れにしても此邊りは番兵の外は來る可き所に非ず、殊に女など入込む可き土地ならぬに何者が如何にして可憐の聲を送るにや、何うやら樣子の有り相にも思はれ又怪しさに堪へざれば益々耳を鐵の格子に摺寄するに、先も忍やかに謠ふにや定かに聞分難けれど何樣佛國の歌にして、曾て聞覺えも有るに似たり。

聞くこと凡そ五六分間にして心に夫と悟りし如く『オ、、何うしても此室に聞えよとて謠ふ者に違ひ無い』と打呟き、密と窓より身を引きて裏も現はなる寢臺の下を探り、恐々四邊を見

廻しながら取出す一物を何かと見れば、是なん日々食殘せし麵の屑を集めて團子となし之に爪もて幾個の文字を彫附け影干に乾固めたるものにして、兼て斯ゝる時の用意に外なる人に投與へて我心を知らさん爲め作り置きたる物と見ゆ、彼れは之を取上て最惜げに幾度か手の掌にて轉がし見つ『ア、之と分れるのは子に分れる樣な心地がする、此樣な事をして外の人と通信するは隨分危い仕業だけれど、己に彼の歌を聞えよがしに謠ふ者なら、夫と見て探すだらうし、左も無くば氣も附くまい、此球は草の中に横たはり、一雨降れば溶けて仕舞ひ、其儘誰の目にも觸れずに濟むから左ほど危い事も無い、此樣な時に外へ投げねば又と投る時節は來ぬ、其代り若し未だ世間に己の名を覺えて居る人が有つて此球が其人の手に入れば、何うして又助けられる事に成るかも知れぬ』と云ひ、彼れ猶ほ此世に望みを絕たぬと見え、再び窓の所に行き、鐵の格子の間より、塀の外へと彼の球を投出すに、暫くして最微に『ポーン』と聞ゆる音あるは、哀れ彼の球の水の中に落たる者なり。扨は此堀の外は堀にして謠は堀の猶外なる堤の上より來る者なるか、爾とも知らずに百日の苦勞も水の泡と爲したるは是も我が不運なりと、彼れ

男の目に涙を浮め、餘りの落膽に二足三足背後の方に跟蹌きたり。

八十六

斯る折しも室の外にて牢番の足音したれば鐵假面は忽ち我に復り、周章て彼の假面を取り打被り、何氣なき體にて待つに、牢番は入口の戸を少し開き其身體は現はさずに『ソレ洗濯物が出來て來た』と云ひ一束の白布を投込みて立去れり。

固より鐵假面は幾年來一つ着物を繋ぎ合せ破れし儘に附け居れども、唯だ肌に附くる肉襦及び日々用ふる手拭だけは牢獄一般の規則に由り一週間に一度づゝは洗濯を許され居る故、汚れしを取集め時々牢番に托するなり、今持來りしは即ち洗濯を經て送り來りし者にして勿論怪しむ廉も無ければ、鐵假面は深く心にも留めず、其身は寢臺に寄添て何事をか考ふるのみなりしが、頓て心に浮ぶ事ある如く突と立上り『今聞た塀の外の謠と云ひ何うやら樣子の有り相に思はれる折なれば、何う云ふ事で外に此身を助けやうと計んで居る者が無いとも云はれず、若し

爾ならば事に由ると此洗濯物の中にも何かの合圖を包み込で有るかも知れぬ』と打咳き、身を震はせつゝ其傍へ走り寄りしが、又忽ちに立留り『イヤイヤ、生ながら地の底に埋められたるも同樣に世の中から取退けられた此の囚人を誰が救ふて呉れる者か、今では己の名を覺えて居る人も無い程だらう、昔は友達も有り愛せられた事も有れど、其人々も或は其の筋の手に殺され或は己と同樣に牢にでも入れられて居る事で有う、縱や一人か二人は世に永らへて居るにもせよ、鐵の假面まで被せる程政府で秘密にする囚人を、世間の人が何うして知らう、己が斯うして此鎭臺の牢獄に閉ぢ籠められて居る事は國王路易と寥武の外は知て居る者は無い、爾だ、爾だ、誰が救ふて呉れる者か、何うかして牢から逃出し今一度世間の樣子を見たい、見度い、と思ふ爲めツイ心まで迷ひ出し、久しく聞かぬ佛國の歌を聞き、若や此身への合圖かと、オホ、詰らぬ事を考へて居た、何うせ生ては此牢を出られぬ身、出たい〳〵と思ふだけ我が心を苦める樣な者、ア、ア、思ふまい、思ふまい、浮世の事は斷念て最う死るまで此牢に居る者と觀念するが結句心易い、我ながら愚痴な事を考へて居た、此樣な積りで洗濯物を開けば唯だ

失望する丈けの事愚痴な心の治るまで、開かずに其儘置ふ』と漸く思ひ直したるも實は是れ絶望の極度なり。

生て世に出る望み無く外より便りする心當りさへ無き程の場合に臨み自ら我が愚痴を叱る、世に是ほどの憐れむ可き事や有る、彼れ力も無く足を引摺再び寢臺の方に退かんとせしが思ひ切りても切られぬは浮世の事なり『イヤ〳〵斯う思ひ定めた上は何もクヨ〳〵と考へる事は無い洗濯物の中に何の合圖が無らうとも今更失望する筈も無い、心の迷と悟ツて見れば、氣遣も無し、望みも無し、夫を氣遣ふが猶ほ迷ひと云ふ者、ドレ』と一聲心を堅め又も進みて洗濯物を取上げしが、一切の望み死し盡しても我身さへ氣の附かぬ心の底に猶ほ一點の望みを繫ぐと見え、彼れの舉動毎もほどに冷淡ならず、手の先さへもブル〳〵と動けるは若やと私かに期する所有る爲なり、彼れ先づ手拭を撿めて次に其の肉襟に及ぶに、肉襟の袖口の裏に當りて何やら淡黑き所あり能く能く見れば細に認めたる文字なり彼れ今更の如く打驚き『アッ』と叫びて飛退しが、遠ひと思ひし我が心の必ずしも迷ひに有らぬを見て胸に動悸の騒がざらんや、餘り

の事に彼れは再び近寄るをさへ恐るゝ如く暫し立すくむのみなりしが『イヤ夢で無い、夢で無い』と打叫び、周章しく兩の手を我が頭の背後に廻しもどかしげに鐵の假面を取脱し再び元の素顏と爲り、洗濯物の傍に屈み、彼の肉襟を取上げて袖裏の文字を讀まんとす、此時の彼れの心は愈々其目の中に集まりしとも云ふ可きか、瞼開きて眼深く沈み、眸は凝りて星に似たり、讀み取る文句は驚く可し『御身は誰ぞや、名を聞かせよ、若しや余の思ふ人ならば何の樣な事を仕ても救ひ得ません、次の洗濯物を出す時に細かく御身の名を記して送り越せ』唯だ是だけなり。

今が今まで我身を思ふ人無しと斷念め居たる此囚人を心に留むるのみならず、斯まで危うき手段を廻らせ救ひ得させんと云ふ者あるか、彼れの眼は益々輝き、嬉しとも歡ばしとも附かぬ一種の涙深き目の中に湛へて身ゆ、時しも風の吹き廻しか、歴々聞え來る謠の聲『鶯の繼し仇巢に殘されし、身は羽も延ぬ離ほとゝぎす、雲井に風の聲聞くさへも、若や母かと延あがり、梯子かけてと泣くも血の聲』歌の心も文字の意も孰か斷腸の種ならざる可き。

『御身は誰ぞ名を聞かせ』此文句にて見る時は我見を救はんとする者の有る事は明かなるも如何にして我名を知らしむ可き、斯る時の用意にと兼て作りし麭の球は空しく堀の底に沈みたり、再び球を作るとも到底堀の外まで投出す事難ければ何の甲斐も無し、去ばとて外なる人の差圖に從ひ洗濯物に我名を記すは是も出來難き所なり、筆と墨有ば兎も角も、何を墨にし何を筆にし我が姓名を記さんや、牢に入りてより年々一度づゝは彼の婆武が我が白狀を聞かん爲に我に手紙を認めさせ巴里へ送らせる事にして、其度紙筆を貸渡さるゝ事は有るも夫とても他の用には使ふに由なし、牢番親から紙墨筆を持來り己が目の前にて其手紙を認めさせ、認め終れば直ちに紙墨筆を持ちて去る故、我身は其外の事一何だも認むる事出來ぬなり、八年の永き月日を唯だ着のみ着の儘にて何等道具も渡されず、眞に手拭と肉襦の外は何一つ手に持ちし事の無き身が何を筆墨の代りとせんや、縱し又筆墨紙の有たりとて洗濯物に書入するは此上も無き危ふ

き業なり。

抑牢番と云へるは即ち此鎭臺長仙頭麻有（原名セント、マールス）と稱する人にて此人曾て魔が淵にて決死隊の捕はれし時、伏兵の大將として出張せしペローム鎭臺の長官なり。彼れ生捕るべき決死隊をば悉生捕得ずして多く殺したる落度に由り、楢尾明と婆武の不興を蒙り斯る邊陣の鎭臺へ追ひ送られし事なれば、何とかして其落度を償ひ再び都近き土地に移され追々出世せんとの念切なれば囚人の取扱に少しの油斷も無く嚴重の上にも嚴重を加へ譬へば囚人の食事に用ふる皿なども其裏に何か認めては無きやと疑ひ、一度一度目の前にて洗はせる程の事なり、既に此程も若しや蠟燭の心に何か認めたる紙を卷込みて有りはせぬかと氣遣ひ幾挺の蠟を悉く斷割て撿ためたる事も有りと云へり、斯る程なれば勿論洗濯物とても一々に撿たむる事なるに此度の通信が彼れの目に留らずして無難に玆に達したるは實に不思議と云ふ可きなり。

斯も嚴重なる牢番の目を掠め外の人に我が姓名を知らせる事殆ど思ひも寄らぬ次第なれど、折角我れを救ふ者ありと云ふ願ふても無き好き機會に出逢ひながら我名を知さずに止む可きな

らず、今知さずば生涯浮世に出る抜け道を塞ぐに均しく二度と再び出らるゝ場合の有る可に非ず、縱し現はれて罰せらるゝとも鐵假面を被せられ死まで日の目も見る能はぬ今の有樣に越す程の罰は有らず、見破らるれば見破られん吾は浮世の自由を求むる爲め如何なる責苦をも恐れぬ者なりと、暫くにして斷然想ひ定めたれど、猶ほも思案に餘れるは墨筆なり如何にして洗濯物に我が名前を認む可きや、是よりして鐵假面は唯だ此事を考ふるのみなりしが、是も間も無く良き工風を思ひ附きたり。

毎週一度金曜日には夕飯の皿に魚類を入れ來る事なれば魚の骨を取りて筆にせん、墨は我身體に滿々たる生血こそ天の與ふる紅インキなれ、多年寃武を恨む心に、熱く沸返れる事なれば煮詰りて他人の血より濃からんも淡き事なし、是ばかりは未だ寃武も牢番仙頭も我より奪ひ取る事能はずして我が身體に預け有る事なれば、好し／＼身體の裂れかを嚙破り其血を以て通信せん、夫も目に觸るゝ所を傷けては怪しまれる元なれば靴を脱ぎて足の指を切るとせん、痛みは恐るゝ所に有らぬも除り多くの血を出して床を染做す事ありては是を隱すに難けれども、少し

ばかり食破り唯だ眼前の用事を達する丈けに留む可しなど、何から何まで思案して金曜日を待つ中に頓て其日に至りしかば目論見通り魚の骨を取りて隱し、是より牢番の來る合間々々を伺ひて次の洗濯物を送り出す時までに漸く目的を達したり。先づ彼の外なる人より認め來りし通り肉衫の裏へは最細かに『委細は手拭に記し有るを見よ』との數文字を記し更に手拭の隅の方へ猶細かに我姓名などを書附け、开を隱す爲め外の手拭と結び合せつ結び目を解きて檢たむるに及び初めて文字の現はるゝ事とは爲したり、端の端まで落も無く此通り工風を廻らせ、愈々牢番が洗濯物を集めに來る其時を待ちつゝ有る彼の心配や如何ならん。

八十八

今日は是れ鐵假面が初めて女の歌を聞きしより七日目にして即ち洗濯物を送り出す當日なり彼れ既に外への通信を認め終り其の布を室の片隅に置き再び窓の際に寄るに今日も猶ほ彼の謠は聞ゆ『アヽ丁度七日が七日の間同じ刻限に同じ謠、アレが洗濯をする女でも有らうか我名を

問ふて寄越したのも矢張りアノ女に違ひ無い、左も無ければ他人が洗濯物へ書入など寸る事は出來ぬ、とは云へ洗濯などする女が己を救ふと云ふ筈は無く又此樣な大膽な計は出來まい、して見ると誰か己を知る者がアノ女に賄賂でも使ひ此樣な事を仕て居るのか、爾だ夫ゆゑ己の記憶を呼起させる爲め樣子有氣なアノ歌を謠せる者で有うか夫とも又、那の女が若しや』

我が思ふ女にやと怪しみて更に又耳を澄すに此時番兵の容赦なき聲として『コレ／＼茲で其樣な歌などを謠つては了無いぞ』と叱り附くる言葉聞え歌の聲は忽ち止みたり『ア、無情な番兵が叱つたと見える、那の歌を謠ふ女が己の事を思ふて哭れる此世に唯一人の友達かも知れぬのに其聲も是ぎりで聞く事が出來ぬのか、イヤ／＼斯う云ふ中にも牢番が洗濯物を取りに來る刻限だ怪しまれぬ樣に仕て居ねば何の樣な事に成るかも知れぬ』斯く云ひて窓より去り私かに脫いで殘したる彼の鐵假面を打被り『ア、生中、假面を脫ぐ事を覺えた爲め時々脫いだり被つたり、却て面倒を增すばかりだ、最う此牢を脫出る迄、決して假面を脫がぬと仕やう、拔いだ所を牢番に見られては又も叱られ怪しまれる元にもなる』と呟く言葉の終らぬに早や聞ゆるは

牢番の足音なり、彼れ慌に入口の戸を開き内に入りて又鎖しつゝ鐵假面に打向ふ、其顏色を見れば年の頃既に五十を過ぎ人生の最も無慈悲なる時代に達せし者にて、面も眉間に深き八字を寄せたるは如何ほどか邪慳なる人ならん殆ど底の計り難き所あり、彼れ會釋も無く鐵假面を打見遣りて『コレ唯ッた今、塀の外で何物か歌を謠つて居たが、定めし窓から聞いたで有らう』鐵假面は口籠ながら『何うですか、茲へは少しも聞えませんが』牢『假忘けるな聞えぬと云ふ事が有るか、併し二度と謠はぬ樣に番兵に叱らせたから夫で好い、今日は外の話が有る』

外の話とは若や通信の事露見せしには有ぬかと、彼れ殆ど顏色を變たれど唯其顏を隱せるは幸ひなり 牢『外の事とは先日出した其方の手紙に對し饗武樣から己へまで返事が有つた、尤も己から其方が神妙に仕て居る事を書添へて置いた爲でも有らうが、聖書だけは差入を許された、夫から一年に唯一度クリスマスの日を以て僧侶を呼入れ說敎を聞かせて遣れと云ふ有難い恩命だ』一年に唯一度僧侶に逢ふと聖書のみ差入らるゝ此二つが何で有難き恩命なるや、聖書は孰れの牢屋にも備へ有りて自由に囚人へ見せしむる程の物にて、僧侶の說敎はバスチルの囚人さ